

平成 2 6 年 度

研 究 紀 要

創

第 1 7 号

TSUKURU



北海道今金高等養護学校

巻頭言

学校教育において取り組むべき様々な課題がある中で、近年キャリア教育の充実が求められるようになってきています。その背景には、社会生活を送る上で必要な基本的な知識の獲得、倫理観の希薄さ、人間関係の形成が難しいなどの学校教育上の課題や生徒の発達の課題があります。また、経済不況や雇用形態の変化などの社会経済的な変化に加えて、新規学卒者のフリーター志向の広がり（2010年で183万人）と就職後3年以内の離職率の増加（2012年3月卒業者の内の19.6%）、引きこもりの増加（2010年で69.6万人）が見られる中、学校教育の職業生活との接続が課題となりました。

国においては、平成9年頃から中教審答申、理科教育及び産業教育審議会答申などにおいて、「高等学校における進路指導や職業教育の見直し」が課題となりました。この見直しを初等教育から職業生活までを視野に含めたものとして捉え直す進路指導改革としての「キャリア教育」が、中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（平成11年）で示されました。そこでは、学校教育と職業生活の接続の改善のための具体的方策として、職業に関する知識・技能の修得を図る教育を進路指導として行われる教育に加え、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」とされ、「また、キャリア教育の実施に当たっては、各学校ごとに目標を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う」ことが求められました。その後、キャリア教育の定義は、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」から、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とかわりました。言い換えれば、「一人一人の社会的・職業的自立に必要な能力や態度を育てることを通して、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現していく過程であるキャリア発達を促す教育」です。特別支援教育においては、平成21年告示の特別支援学校高等部学習指導要領に「キャリア教育」の文言が明記され、キャリア教育への取り組みが進みつつあります。

本校では、このような動向を踏まえて、平成24年度から研究主題を『社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究～「今養版キャリア教育」の創造を目指して～』とし、3カ年計画で第6次研究に取り組みました。初年度は、研究主題を『キャリアプランニングを中心とした基礎的研究』とし、キャリア発達に関わる諸能力について、4領域8能力を参考にしながら、本校の生徒の障がいや発達の状況、課題の特徴を踏まえ、独自のマトリックスとして「今養版キャリアプランニングマトリックス」をまとめました。そして、2年次目は研究主題を『今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した実践的研究』とし、生活単元学習と作業学習を中心に新たな教育実践に取り組みました。3年次目は、マトリックスに基づいた教育課程の見直し、生活単元学習における「心とからだの学習」の指導段階表についての授業計画や実際の授業を通じた検証、卒業生の就労先へのアンケート調査や事例調査に基づいた指導課題の明確化、作業学習における評価様式と指導の在り方の見直しを行いました。また、これまでの研究成果の普及と中高一貫したキャリア教育の実現に資することを目的として『キャリア教育のすすめ』という冊子を発行し、道内の各中学校の特別支援学級に配布しました。

校内研究の推進に当たっては、引き続き本校の研究アドバイザーとして、北海道教育大学函館校の北村博幸准教授に、本校まで足を運んでいただき、重要かつ示唆に富む御助言をいただき、研究を推進することができました。深く感謝申し上げます。また、道内の特別支援学校の公開研究会に参加させていただいたほか、学校の視察も行わせていただくことができ、キャリア教育に関わる教育課程の編成や授業実践などについて多くのことを学ばせていただきました。改めて深く感謝申し上げます。

本研究は、知的障がい教育におけるキャリア教育の創造という大きなテーマに少しでも迫り解明しようとする実践研究の端緒となる研究のまとめです。また、これまでの実践研究の着実な積み重ねに基づいて現時点で整理することができた「今養の教育」の成果でもあります。是非、忌憚のない御意見と御助言をいただければ幸いです。また、今後とも本校への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年3月

北海道今金高等養護学校長 高 嶋 利次郎

目 次

<巻頭言>

第 1 章 研究の全体像 3～19

第 2 章 課題研究 20～46

第 3 章 プロジェクト研究 47～94

第 4 章 調査研究 95～105

第 5 章 寄宿舍の研究 106～126

第 6 章 研究の成果と課題 126～130

資 料 1 特別支援教育研修会の記録 131～153

資 料 2 今養版キャリアプランニングマトリックス 154～155

<あとがき>

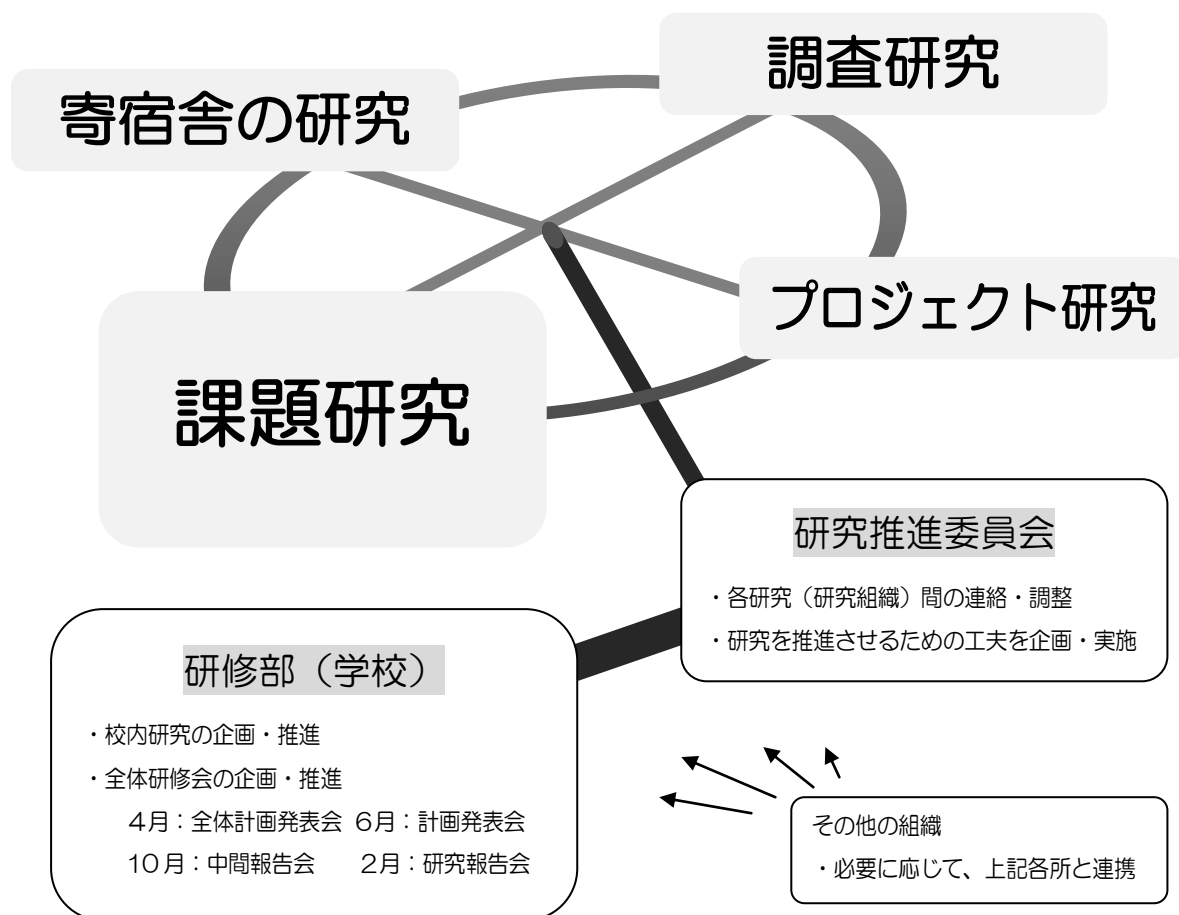
<共同研究者>

第 1 章

研究の全体像

1 本校の校内研究

本校では、1つの校内研究主題に基づいて取り組む「課題研究」「プロジェクト研究」「調査研究」「寄宿舍の研究」の4研究があり、それぞれが相関している（図1参照）。



～図1「本校の校内研究」イメージ～

課題研究

本校の研究の中心的研究と位置づけている。本校における教育実践等のニーズの優先度などに応じて設定された実践研究であり、日常の指導実践と最も密接に関連する研究である。

プロジェクト研究

課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に関係する組織で進めるものと位置づけている。学校教育の動向や本校における教育実践等のニーズに基づく緊急の課題に関する実践的・総合的研究であり、校内部署の横断的なプロジェクトチームを編成して実施することもある。取り組むべき課題があるかどうか、どういった組織で取り組むかといったことは、年度当初に公募している。

調査研究

文字通り、調査による研究である。校内外における教育実践等に関する情報を、資料・統計として調査及び研究するものであり、研究内容に関する専門性の高い部署が担当する。取り組みについては年度当初に検討して決定している。

寄宿舎の研究

寄宿舎研修部を中心に、校内研究主題及び学校が行う上記3研究の流れに沿う形で取り組むものと位置づけている。また、研究推進委員会を通じて学舎の情報交換や連携を図っている。

校内研究の企画・推進は、学校の研修部（以下「研修部」と略す）が行っている。研修部員も委員となっている研究推進委員会（以下「研推委」と略す）は、4つの研究が相互に連携して推進されるよう、必要に応じて連絡・調整する、いわばコーディネーター的役割を果たしている。

4つの研究を進めるそれぞれの研究組織は、研究主題や内容によって変化する（[表1](#)参照）。また、研究の方法としては、理論研修（学習会）、研究授業、事例検討、教材教具の開発・工夫などがある。各研究組織は、研究の内容に合わせて方法を選択し、ときには組み合わせている。

～ [表1](#) 本校の校内研究のあゆみ ～

	研究主題	概要（主な研究内容）	研究の種類（研究組織）
第1次	【平成9～10年度】 生徒一人一人の発達段階・特性等に応じ社会参加・自立を促す教育課程の編成はいかにあるべきか	教育目標の具現化、教育課程の基本方針、指導内容の選択・組織、個別指導計画の作成、地域環境・素材を生かした教育活動	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第2次	【平成11～13年度】 生徒一人一人が自立し、社会参加できる力を育む授業づくりと教育課程の編成はいかにあるべきか	教育課程の編成、授業の実践と検証、個別指導計画の充実、現場実習及び進路状況の把握	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第3次	【平成14～16年度】 生きる力を育む指導の研究	総合的な実態把握、指導課題の具体的設定と指導内容の関連、単元・題材指導計画の工夫、個別化と集団化が最適化された授業作り	・課題研究（学年部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第4次	【平成17～20年度】 授業作りに活かす、教師の専門性の向上を追求する実践的研究	課題単元の教材開発、作業工程分析の充実、個別の教育支援計画等の様式及び作成に関する研究、体力つくりの見直し	・課題研究（形態部会） ・P研究（CO+進路部代表、体力つくり部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第5次	【平成21～23年度】 社会参加・自立を目指した働く力の育成	教科及び領域・教科を合わせた指導の授業研究、体力つくりの見直し、指導内容表の検討、教育支援計画・指導計画・通知表のあり方の整理	・課題研究（学年部会） ・P研究（体力つくり部会、研推委、指導計画WG） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究

（Pはプロジェクトの略 / COはコーディネーターの略 / WGはワーキンググループの略）

2 第6次研究

(1) 経緯

平成23年度当初、今年度のプロジェクト研究では何に取り組むかという職員アンケートを実施した。その結果、「本校の教育をキャリア教育の視点に照らし合わせながら、本校の良い所、改善ポイントを探る」という内容で研究を進めることに決まり、研究推進委員会が主体となってスタートさせることになった。

研究推進委員会は、平成24年度以降の校内研究全体の方向性、つまり第6次研究の計画の素案をまとめることを目指した。具体的には、キャリア教育の概要を学び、これまでの教育課程・教育内容の成果と課題を洗い出しながら今後の研究の進め方を検討するべく『本校としてのキャリア教育の進め方の洗い出し』という主題を設定し、研究を進めた。

まず、キャリア教育学習会を計2回実施した。キャリアとは何か、まずはイメージを共通認識することから始め、本校の現状や道内外の取り組み（実践事例）について学習した。全職員に資料を配付し学習することで、キャリア教育の必要性について確認することができた。しかし、意識を浸透させ、共通理解を図るには時間を要することがわかった。

次に、学習会を踏まえた上で「キャリア（教育）の視点を生かして、本校でどのような取り組み・研究を進めていくのがよいか」というテーマで、研究推進委員会の各委員はレポートを作成した。「行事や授業をはじめとする教育課程をキャリア教育の視点で見直す必要がある」「キャリア教育について校内の共通理解が必要である」という意見が多く出された。また、見直しや共通理解の具体的な方法、研究組織や期間についての具体的な意見も多く出された。そして次のような「第6次研究の方向性」がまとまった。

「第6次研究の方向性」

<1年目>

- ・キャリア教育の指針を決めていく段階
- ・具体的には、各学科、各学年、研究推進委員会を研究組織として、3年間の系統的な教育目標・方針（≡基礎・柱・道筋）の明確化に取り組む

<2年目>

- ・教育実践を見直していく段階
- ・教育課程（行事、授業等）、指導内容表、各教科・形態内の指導段階（指導の系統性）などを見直し、修正し、まとめていく

<3年目>

- ・1年目の土台、それをもとに2年目で改められた教育計画のもと、実践とその検証・評価を重点的に行う段階
- ・3年間の取り組みによる成果と課題をまとめ、次期研究へと引き継ぐ

これまでは、研修部が考えた研究主題を各研究組織（学年部会や形態部会）がある意味“自由”に解釈して課題を見つけ、研究授業をするという、いわば“形式的”な研究だった。一方、第6次研究は現場の声から始まり、テーマがキャリア教育であるだけに学校教育全体という視点を持ち、研究を進めながら研究の方法を見いだしていかなければならないという、いわば“創造的”な研究である。今後もボトムアップ方式で研究を推進し、チームワークを発揮して課題を解決していきたい。そして、生徒の成長と将来に結びつく成果を残したい。

(2) 研究主題

社会の変化に対応できる力を育てる 実践的研究

～ 「今金版キャリア教育」の創造を目指して ～

(3) 主題設定の理由

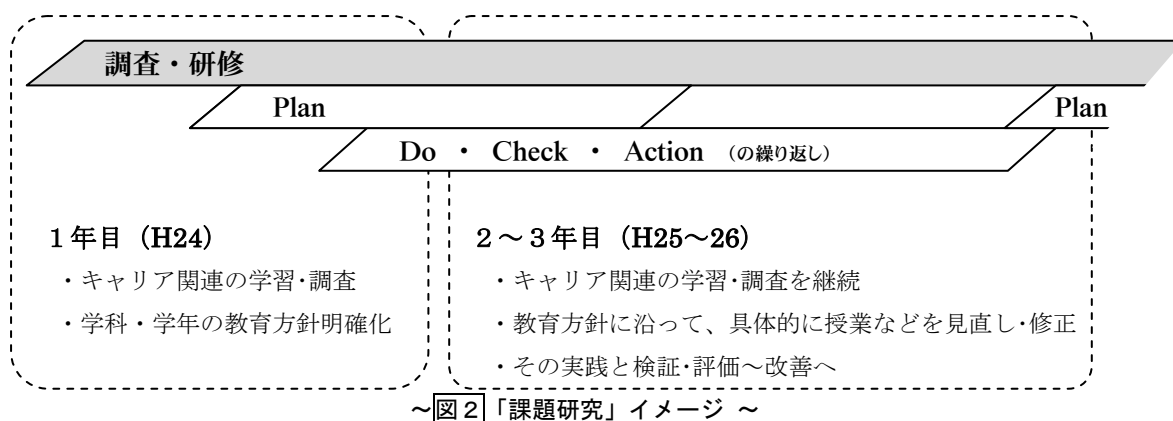
本校は開校以来15年間、卒業後の就労、広義には社会参加・自立を目指した職業教育に取り組み、284名の卒業生を輩出した。生徒実態や社会情勢の変化に対応しつつ、生活単元学習と作業学習を中心とした教育課程のもとで指導を行い、生活する力と働く力の両方を身につけられるよう工夫を続けている。

しかし、近年の生徒実態や社会情勢の変化は、これまでとは変化の質も幅も大きく異なっている。例えば、障害の多様化（特に発達障害を持つ生徒の増加）、それに伴う個に応じた指導・支援のあり方の多様化、経済の不安定さがもたらす就労への影響、障害者自立支援法の動向をはじめとする障害者福祉の課題点などが挙げられる。これらは、生徒が卒業後、社会の中で主体的に生きていこうとする上での“内外部的な困難さ”として立ちはだかっている。全国に存在するこの困難は、道南地域、本校周辺の地域も例外ではない。さらには、地理的条件など地域ならではの困難さも存在する。だが、これを乗り越える道を切り拓き、その道を歩んでいく力を身につけさせることこそ、我々教職員の使命である。

こうした状況を踏まえ、本研究では、本校の学校教育目標である「豊かな心と体をつくり、努力する生徒を育てる」の実現に向けて、その道筋とも言える教育課程、授業・指導の一つ一つをキャリア（教育・発達）の観点から再点検する。教職員のチームワークをもって今一度本校の教育のあり方を見直し、生徒や社会の変化に柔軟に対応できる生徒を育てていくことを目指し、本主題を設定した。

(4) 研究期間

原則として、平成24年度から平成26年度までの3年間とするが、「課題研究」として位置づける図2の「調査・研修」から「Action」までが一定程度終わるまでとする。何を達成すれば一定程度とするかについては、研究推進委員会を中心に全校的な協議を進めて決定したい。つまり、研究の進み具合から、3年未満もしくは3年以上になることもあるということになる。



（５）研究の内容と方法

① 研究推進委員会の役割

- ・研究主題に基づく実践的な研究推進にかかわる業務の企画、研究・研修内容等の推進等を行う。教頭、研修部長、研修部員、各研究グループの代表、その他必要な職員で構成する。各研究組織と協議しながら、具体的な研究の進め方を検討する。いわば舵取りをすることにより、各研究組織が同じ方向・方法で研究を進められるようにする。

② 調査・研修（第６次研究期間を通して取り組む）

- ・キャリア教育の必要性について職員間の共通認識を図るほか、研究を進める上での参考とするため、以下の取り組みを行う。

<キャリア教育学習会>

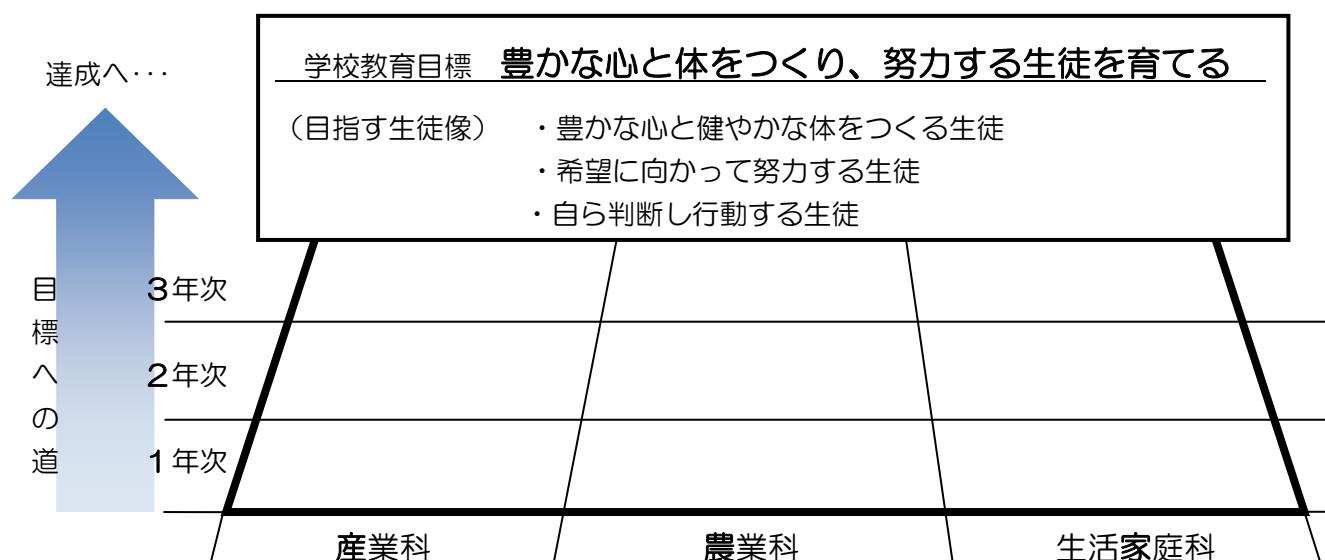
- ・研究推進委員会は、キャリア教育の概念について職員間の共通理解を図るための学習会を企画・実施する（基本的には全体研修会の中で行う）。また、キャリア教育の学習に役立つ資料を、各研究組織に提供することもあわせて行う。

<調査研究>

- ・担任をはじめ、全職員が在校生の実態把握に努める。
- ・第６次研究１年目から、進路指導部や旧担任を中心に卒業生の現状と課題を調べ、調査した内容をまとめ、各研究組織に伝えることで、キャリア教育の必要性について職員間の共通認識を図ることを計画していた。しかし、これまで実施できず、実施することへのニーズが高まったため、平成２６年度はこれを行うこととする。

③ P l a n（１年目後期から取り組む）

- ・各学科・各学年の教育方針（指導段階）について協議し、３年間の系統的な教育目標・方針（≡基礎・柱・道筋…仮に「目標への道」と呼ぶ）をはっきりさせる（[図３](#)参照）。最終的には教育課程検討委員会、職員会議にかける。



～ [図３](#) 「目標への道」のイメージ ～

- ・これは平成２４年度、各学年・学科と研究推進委員会が進めた課題研究において「今養版キャリアプランニングマトリックス（以下「マトリックス」と略す）」として具現化した。今後、研究推進委員会は適宜このマトリックスを検証していく。

- ・これに伴い、学校教育計画の学年経営案や学科経営案の様式・内容についても検討が必要となる場合は、各学年・学科と教務部がこれを進める。

④ Do・Check・Actionの繰り返し（2年目から取り組む）

- ・マトリックスに沿って、本校の教育全般を見直す。教育課程（行事、授業等）、指導内容表、各教科・形態内の指導段階（指導の系統性）など、実践～評価（検証）～改善を繰り返しながらか見直しを進めていく。そのための研究として、以下の取り組みを行う。

<課題研究>

- ・平成25年度は、形態部会において「今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した実践的研究～生活単元学習と作業学習を中心に～」に取り組んだ。これにより、生活単元学習（以下「生単」と略す）部会では題材の一つである「心とからだの学習」の題材一覧・指導段階表をまとめ、作業学習（以下「作業」と略す）部会では各学科の評価様式を統一することができた。PDCAサイクルの視点で考えると、生単はP、作業はCを整備できたと言える。
- ・これを受け、平成26年度も生単部会と作業部会で研究を続け、それぞれがDやAなど整備していない部分の整備を行っていく。

<プロジェクト研究>

- ・平成25年度当初、何に取り組むか公募・検討した結果、教育課程検討委員会が「教育課程（行事・時間割等）の見直し」に取り組むことになった。平成25年度はそのうち行事の見直しに着手した。マトリックスに沿ってあらゆる学校行事の目的や内容を見直し、その新たな形を提言としてまとめることができた。
- ・平成26年度は、残っている時間割の見直しに着手する。職員にアンケートをとり、見直しをかけるにあたっての問題点や今後の方向性を見出してから進めていく。

<寄宿舎の研究>

- ・寄宿舎研修部を中心に、第6次研究の流れに沿う形で研究を進める。なお、研究推進委員会に寮務主任が出席することで学舎のパイプ役を担ってもらうほか、全体研修会に寄宿舎職員が可能な限り出席することで、学舎の情報交換や連携を図る。
- ・平成25年度は、男女各棟を研究組織として抽出生徒各1名の事例研究に取り組んだ。マトリックスに基づいた指導の在り方について検討を重ね、実践において成果と課題をまとめることができた。平成26年度は、これを踏まえて研究を進める。

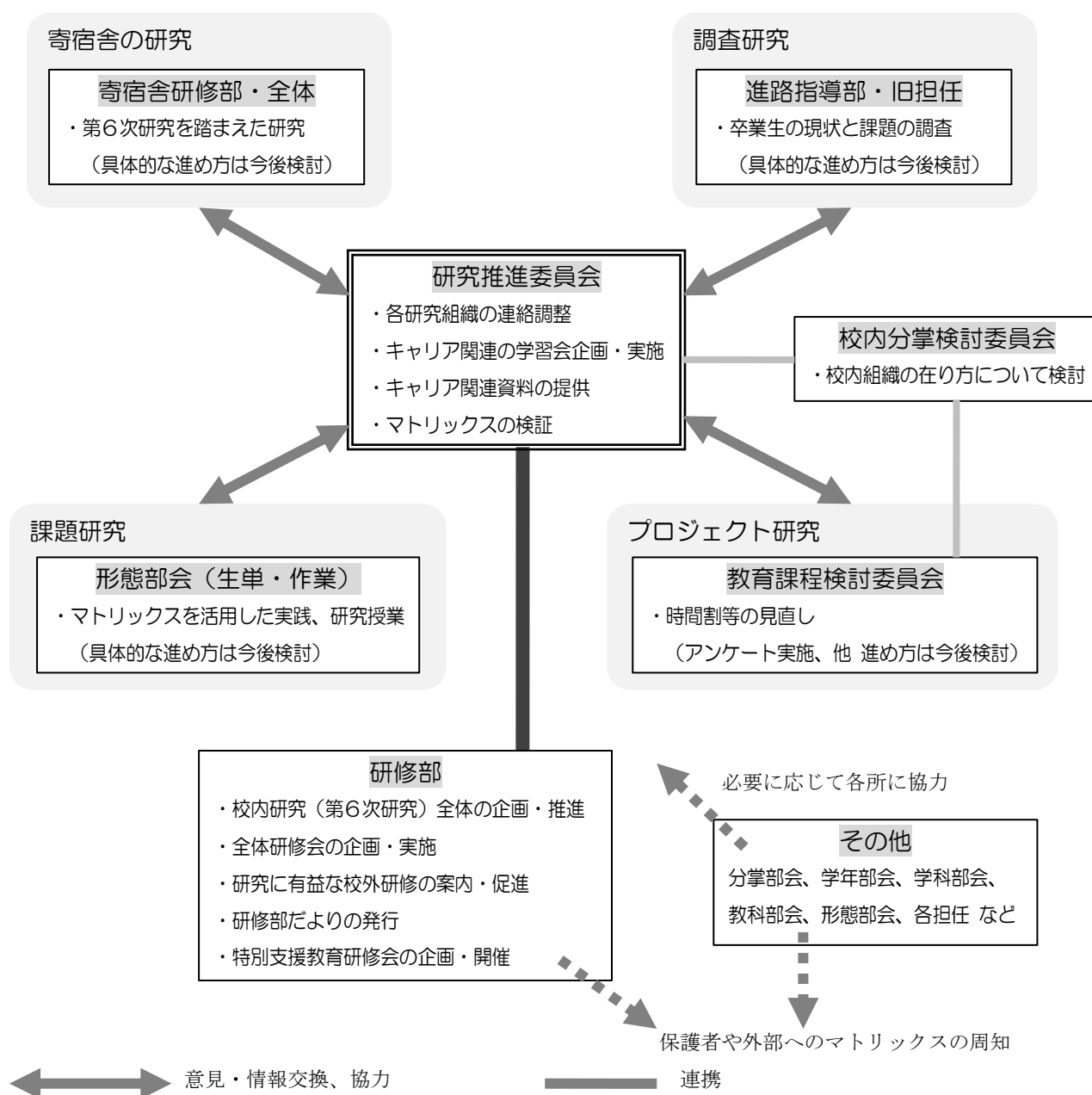
⑤ その他

- ・各研究の具体的な進め方は、これを担う研究組織のメンバーで検討してもらう。ただし、上記の方向性とズレが生じないように、研究推進委員会において適宜検証し、必要があれば進め方を再検討してもらう。また、課題研究においては研究の成果を実証するため研究授業を取り入れてもらう。
- ・研修部は、研究を一層充実したものとするために有益な校外研修を適宜案内し、研修促進費を活用して研修へ足を運んでもらうよう促す。また、研究の経過や校外研修の成果について「研修部だより」にまとめ、適宜職員に配布する。さらに、本校職員に対しては校内研究に役立てるための機会とするため、また地域の関係者に対しては本校の取り組みを発信するとともに特別支援教育への理解を深めてもらう機会とするための「特別支援教育研修会」を企画・開催する。
- ・教育相談や進路支援、就学支援など、保護者や外部とのつながりがある部署は、マトリックスの周知を少しずつ進めていく。あわせて、相談・支援の在り方についても検討する。これにより、本校の教育（キャリア教育）に対する理解と協力を得るよう努める。

- ・平成25年度研究紀要「第5章 今年度の成果と課題」および同年度学校評価より、校内組織の在り方について検討を進める必要性を確認している。これについては、校内分掌検討委員会が中心となり、教育課程検討委員会や研究推進委員会（キャリア教育・研究の推進という視点から参画）などと連携しながら、組織を整備していく。

（6）平成26年度の研究

以上を踏まえ、課題研究は昨年度と同様に形態部会（生活単元学習部会、作業学習部会）と学年部会で Do・Check・Action の段階に取り組むことにした。プロジェクト研究は、教育課程検討委員会による教育課程（週時程）の見直しに取り組み、調査研究は進路指導部が卒業生の現状と課題について調査することにした。寄宿舎の研究は男女各棟1本ずつの事例研究に取り組むことにした。研究組織とその相関については図4の通りである。



～ 図4 平成26年度研究組織及び相関図 ～

3 キャリア教育の学習

(1) 学習会の企画と実施

これは、キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解を目的として、研究推進委員会が企画し、計4回実施したものである。この取り組みは今年度で3年目となっている。

今年度は「キャリアの視点で、本校の教育を見直す」をテーマに、講義形式、グループ協議形式など、学習内容に応じてスタイルを変えて学習会を実施した。また、24年度作成し活用した「キャリアに関する学習資料」を、今年着任した職員に配布した。さらに、こうした学習の様子や補足的な内容は、研修部が適宜発行している「研修部だより」に掲載し、全職員に配布するなどして、キャリア教育の定着推進を図っている。

(2) 第1回学習会

6月の全体研修会後に今年度1回目のキャリア学習会を行った。今回の学習会は、今年度のテーマである「キャリアの視点で、本校の教育を見直す」を念頭に行った。具体的には、今年度は第6次研究の最終年度である。昨年度は今養版キャリアプランニングマトリックスを使用し行われた授業実践の中で取られた手立て方法を検証し、よりPDCAサイクルを意識し授業改善を行っていくことが、各研究グループから提示されている。そのため、今年度から本校に勤務された職員も多くいる今年度のスタートでもあったので、昨年度行った授業公開（公開授業研）での内容を職員全員で理解したうえで、今年度の研究を始めてもらうことを主旨として学習会を行った。

方法として、昨年度行われた授業公開（公開授業研）について、各学科（産業科、農業科、生活家庭科）、生活単元学習、総合の5本の授業について授業者からの発表、その発表についてのグループ協議の2本立てで行った。

- 1 今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した授業について（昨年度の公開授業研より）
※各授業の指導案にかんしては、昨年度の研究紀要参照

産業科

- ・特別支援学級出身の生徒は少人数の教室で学んでいた経験から生徒同士のコミュニケーションが少なく、現在の作業学習の時間においてもそのような傾向が見られ、課題として考えている。
- ・現在教師から指導されているコミュニケーションに関する事項が、実際の職場ではどのように役にたつのかを紙面にまとめ、生徒に提示することで生徒への意識向上につながった。



農業科（1，3年合同授業を行った）

3年生からの視点

- ・生徒から「先輩のここを真似したい。」「ここがいい。」という話が持ち上がったことがきっかけとなり、合同授業を行う計画を立てた。

- ・合同授業では①コミュニケーション力②忍耐力、集中力を伸ばしていきかけたため、①を生徒達が教え合うこと、②を題材であるプラグトレイ洗浄を長い時間続けることで達成させようとした。
- ・3年生は後輩に教えることによって先輩としての意識を高めることができた。

1年生からの視点

- ・昨年度までは本格的には先輩、後輩間の交流はなかった。
- ・1年生の生徒は言われたことを言われたとおりにやるだけだったが、合同授業後には先輩から教わったことをその通りに行い、更に自分達なりに、「こうやったらどうなんだろう。」「ああやったらどうなんだろう。」と考えながら取り組むことができた。
- ・現在、2年生になったその生徒達には他題材についてもやりかたを考えさせている。



- ・マトリックスを観点とした授業を行うために、作業日誌の見直しを行った。
- ・生徒に還元できていたか確認を行うために作業日誌の自己評価の集計を行った。

生活家庭科

- ・指導の重点をマトリックスと合わせており、作業日誌をマトリックスの観点に合わせたものにした。
- ・授業は3年生段階での紙すきである。紙すきは2年生のときから行っており、慣れている。指導者は必要以上に指示を出さず、生徒が自分達で考えながら、作業に取り組ませるようにした。更に、コミュニケーション、手早さ、丁寧さも意識しながら授業を行った。
- ・学年は3学年で行ったが、科が生活家庭科であるため、マトリックスの3年生段階を狙うことは難しいと感じ、2年生段階を狙って行った。手立てを工夫することによって3年生段階を狙えるようになるのではないかと考えた。



生単（性教育の授業を行った）

- ・現3学年が2学年だった昨年は問題が多発した。その際に指導しても正しい答えは言えるがそれを実際の生活に生かすことができていなかった。そのため、自ら「選択する」ことに重点を置いた授業を行った。道徳のような授業を行ったため、生徒に答えは教えていない。
- ・「命を大切にすることはどういうことか？」という問いに対して事後学習の中で「自分はいじめられたことがあって、学校に行かなかったときがあるので命を大切にしている。」など自ら発表した生徒がおり、生徒の考えを引き出すことができたと考えている。
- ・今回の授業を行ったことによってマトリックスにどのように還元できたかは定かではないが、段階をつけて指導していくことが大事だということがわかった。



総合

- ・「総合的な学習の時間」に関する規定は実習の事前、事後学習以外に規定が無かった。
- ・進路に関する学習については生単の単元として行うよりも少しずつ行ったほうが生徒の身になると考えていたため、毎週行うこととなった。
- ・単元計画にはマトリックスとの関連を必ず入れている。計画、略案ともに網掛けになっている部分が特に重要な部分である。



2 グループ協議について 座談の感想

- ・発表をふまえたうえで、「キャリア教育」という視点で、どのように本校の学校教育目標を達成させていくかグループ協議を行い、職員それぞれの考え方をお互いに知り合う機会となった有意義な時間であった。

(ある職員の協議後の感想)

話し合いの中で自分の考えと他の先生の考えに共通点があった。また、様々な立場からの考えを聞くことができ、勉強になった。



(3) 第2回学習会

10月の全体研修会後に実施予定であったが時間の関係上、12月の一週目に変更して行った。今回の学習会は、本校が来年度に教育課程を見直すことが決定しこともあり、本校職員が本校の教育活動について共通理解し、学校のことをしっかり理解した上で学校運営にあたってほしいという理由から行った。内容は、本校の教育活動の主である作業学習にスポットをあて、各学科長から作業学習のねらいや教育活動の実態についての講義を行い、全校職員の共通理解に努めた。また、寄宿舍との連携というのも日常の生徒指導では重要であることから、北特研に参加した寄宿舍職員からの研修報告も行い、寄宿舍の取り組みも知ってもらって、生徒をどう育てるか考えてもらうことを主旨として、講義形式の学習会を行った。

1 寄宿舍より北特研全道大会・部会発表（資料あり：第3回全体研修会のうしろ部分）

① 寄宿舍部会Ⅰ（義務の養護学校中心一泉波寄宿舍指導員）

- ・4グループに分かれ、各グループとも実例をもとに協議した。KJ法を用いて、達成の可能性

ではなく方向性を示すというものだった。

- ・評価のときに「こんな目標だったんだ」ではいけない。目標の立て方が重要である。
- ・言葉かけをするという目標設定についても、言葉かけで達成可能かどうか考えるべき。

② 寄宿舎部会Ⅱ（職業学科高等部－藤田寄宿舎指導員）

- ・主に情報交換を行い、ブレインストーミングの手法を用いて協議を進めた。
- ・現在寄宿舎で研究している SST は、全舎生に行っている学校もあった
- ・校舎が複雑で死角ができる点が課題となっている学校があった。
- ・プライベートな空間を持つことが難しいという話題になった。現在、本校では女子棟は1部屋空けている。
- ・舎室編成が能力別で組まれている舎もあった。進路希望や発達段階に応じて、高め合うことはできるが、ともすると見下したり自己評価が高くなったりする生徒もいるという課題が上げられていた（今は発作や人間関係などを考慮し全学年1部屋に入るようにしている）。
- ・どのような障害があろうと、周りに配慮されなければならないことを理解させなければならない。自立は何でもできるようになることではない。相談できる力が必要。
- ・同じ生徒の成長を促す立場として協力・連携が必要だと思う。日々の生徒情報を PC で共有している学校もあった。

2 各学科から

① 産業科

- ・製品紹介。1年は基礎、2年は発展、3年は応用。
- ・作業工程では、完成までの道のりが長い。使用粘土は学年で異なる。
- ・各学年に目標があり、まずは「集中力、危険への意識、丁寧さ、器用さ」。さらに、伸ばしたい力は「コミュニケーション能力、礼儀正しさ」がある。
- ・販売流通を意識して取り組んでいる。
- ・窯業は時代遅れな印象を受けるが、適宜題材を見直しながら、新しく良いところは取り入れるようにしている。例えばビルクリーニングなども行っている。
- ・大切にしていることは、進路先で大切だと言われていること。「返事挨拶、言葉遣い、姿勢、道具を大切にする、準備片付けを進んで行う」といった仕事をする上での基礎基本。作って楽しいではなく、仕事としてとらえ取り組んでいる。

② 農業科

- ・題材紹介。1年は玉ねぎとコーン、2年は今金男爵、豆類、草花。3年はカボチャとニンジン、花壇用の花（A コープ販売用）と学校祭用シクラメン。種から育てて販売まで行い、生産から販売までの社会（流通）の流れを意識して取り組んでいる。
- ・合同花壇整備（交流及び共同学習の一環として、檜山北高校と3年農業科・産業科で行っている）
- ・農業は生き物を育てるという仕事。手先を使う仕事も、体を動かす仕事もあり、いろいろな作業種を経験することができ、本人の特性を見極めることができる。
- ・農家になるためではなく、農業をしながら、基本的な働く力を身につけさせるために、日々取り組んでいる。

③ 生活家庭科

- ・作業内容紹介。1年は資源回収、フェルト、縫工。2年は紙漉、3年は石けん、3年間で除雪、

清掃を行っている。

- ・現在紙漉では大きい紙の制作を試作中で、これができれば本校の長形3号封筒を制作できる。校内での流通を意識して取り組めるか計画している。
- ・公宅回収の牛乳パックは、セイコーマートに持って行ってティッシュに替えて使っている。それ以外はせたな「ふれんど」に回収してもらっている。



北特研発表（寄宿舎）



産業科発表

（４）第３回学習会

12月の2学期終業式後に実施した。北海道千歳高等支援学校と北海道小樽高等支援学校、2校の公開研究会に参加した本校職員による研修報告という、講義形式の学習会を行った。今回公開研究会に参加した2校は、本道の高等支援学校では新設校で、キャリア教育を推進している学校であり、今後の本校の教育課程を考える上で、とても有意義な報告会（学習会）になった。

1 研修報告～矢倉教諭より「北海道千歳高等支援学校 公開研究会参加報告」

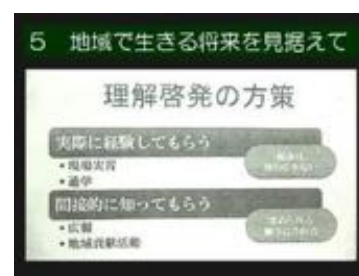
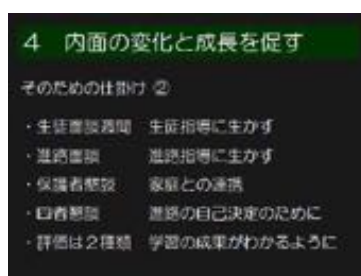
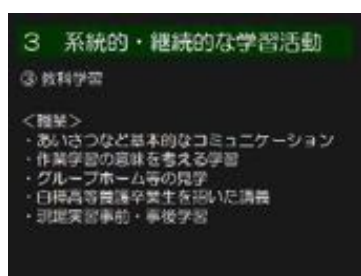
○ 学校見学及び授業公開

- ・グループ別に行われていて生徒がすべて案内・説明を行っていた。言語活動の充実の一環ということだが、練習不足や緊張なのか生徒の実態によるものなのか、説明はたどたどしいところもあった。
- ・生產品販売を行っていたが、商品の説明や会計では、「〇〇円になります」と接客用語としては間違っていた場面があった。
- ・箸の袋詰めの受注作業の様子も見学できた。美術室にて2人1組で行っていたが、一人一人がもくもくと手早く行っていた。

○ その他

- ・生徒の実態としては、既設科でも本校よりも障害の重い印象を受けた。また、初めての機会だったからかもしれないが、明るさや笑顔が少ない印象を受けた。
- ・生徒の挨拶や来客者がいる際の身の振る舞いなど、職員が手本を示し、日常的に指導する必要があると感じた。
- ・体育館の会場の作り替えも生徒が行っていたが、職員の指示出しも端的さが求められると感じた。
- ・「特別支援学校の常識を地域社会の視点から見直す」。これは学校の常識が社会の常識かどうかを考え、社会で許されないことは学校でも許されない、ダメなものはダメと教えること。生徒指導規定があるのもこれの一つである。従来の特別支援教育（学校）で行われてきた成果、特別支援教育としての基本的な指導をどのようにうまく混ぜ込んでいくか、学校が掲げた理念を実現するだけの努力が日々必要であると感じた。

※別紙 PPT 資料抜粋



2 研修報告～野呂教諭より「北海道小樽高等支援学校 公開研究会参加報告」

○キャリア教育（キャリア発達を支援する重点、OKS ライフキャリアプラン等）

1) 教育課程の編成ポイント：「進路学習を学習の柱とする」「進路学習の充実を図る」

2) キャリア発達を支援する重点：5つの項目

「人間関係づくり」「コミュニケーション」「働く環境」「将来設計」「生きがい」

3) OKS ライフキャリアプラン

指導計画、支援計画、通知表をまとめて1つのカルテ形式になっている帳簿。特に、「本人の進路希望」について各学年の希望を同じシートに書き、その変容が一目でわかるようになっている。

(5) 第4回学習会

「教育課程の見直しに向けて」～各教科中心の話し合い～

2月の第4回全体研修会とあわせて実施した。平成27年度より、本校の教育課程が一部変更になることが決定した。改訂ポイントは3点である。1つめは1単位時間。2つめは国語と数学の時間増。3つめは指導内容（生活単元学習など）の精査である。これらの内容は、教育課程検討委員会が中心となって、職員で全体会議を何度も繰り返し決定した。

これら決定した項目の具現化のため、テーマを2点に絞って話し合いを行ったのが、今回の学習会である。話し合ったテーマは2点。「国語数学の時間増」「生活単元学習などの内容精査」である。具体的には、各教科免許者が中心となり、学校教育目標（マトリックス）や学習指導要領から、教えなければいけない内容と実際の年間指導計画を照らし合わせながら話し合う。

話し合いはグループで行い、約30分間の協議を設定した。協議の内容は模造紙などにまとめ、発表してもらうこととした。

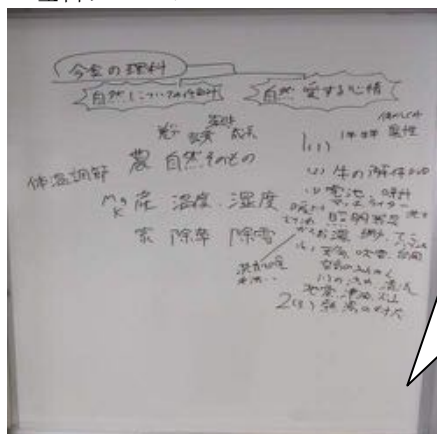
グループ分けについては、「国語」「数学」「社会①」「社会②」「情報」「理科」「性教育（保健体育）」「家庭」の8グループとし、各主免許を軸としてグループ分けを行い、専門性を生かした話し合いを展開させていった。話し合うポイントとして、前述でも示したように学校教育目標（マトリックス）や学習指導要領から、教えなければいけない内容と実際の年間指導計画を照らし合わせながら、本校の生徒に何を教えるべきかを話し合った。「専門性」を意識して、それぞれの立場から意見を出すことが研修機会にもなると考え、このような方法をとった。

右の写真は、グループ協議の場面である。協議においては、グループ構成は専門家が集まった集団であり、専門的な観点からの話し合いが行われた。本校の教育課程構造上、同じ免許所有者同士が同じ分野での話し合う機会が少ないこともあり、幅広く意見が出され、本校の教育課程を考えるよい機会ともなった。提案された内容は、来年度の教育課程改訂に反映されることも視野に入れ、掲示する予定である。



以下は、各グループで書き込んだ模造紙と提案内容である。

① 理科グループ

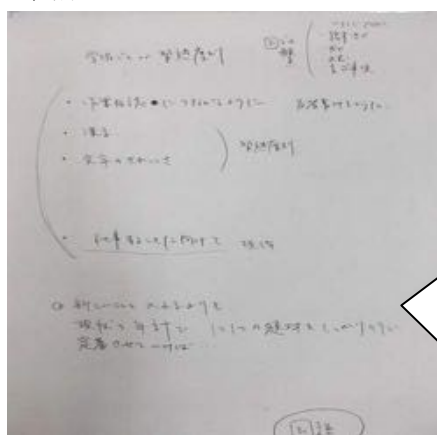


本校の目指す理科とは、大きく言えば2点あると考える。

①「自然についての仕組み」②「自然を愛する心を育てる」ではないか。学科としては農業科で取り入れやすいと考える。他の学科（作業学習時間や教科などと連動させて）でも、取り入れていく必要があるのではないかな。

その他にも、人体の仕組み（体温調整や器官の仕組み）、固体や気体の変化（氷、水、水蒸気など）など、より生活に密着した理学的内容を学校教育課程のなかで網羅していく必要があるのではないかな。

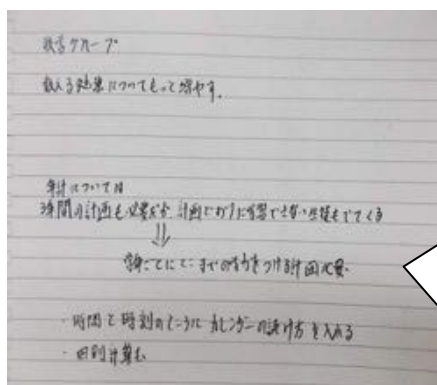
② 国語グループ



作業日誌の反省を正しく書ける、習った漢字を書ける、文字のきれいさなどといった日々の取り組みを大切に、普段の学校生活や家庭、地域生活で常にできたら良いのではないかな。

又、3学年は各学級単位で取り組んでいるが、話し合い活動を行っている。時数が増えることで年間指導計画を大きく変えるのではなく、今の年間指導計画をしっかりとこなし、活動の充実を図るように取り組むべきだと考える。

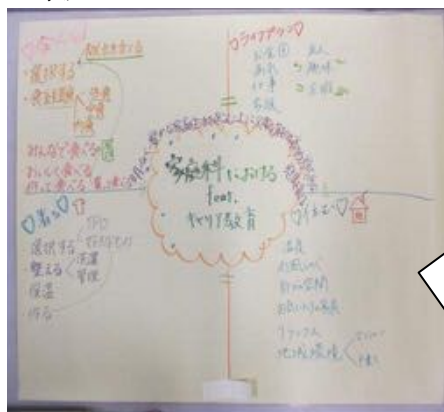
③ 数学グループ



年間授業時数が増えることで、生活や将来に活用できる知識を習得する取り組みを増やすことがいいのではないかな。例えば、カレンダーや具体物を数えることに関する学習を増やすなどが考えられる。

又、1学年段階では四則計算をしっかりと行うことで、1～3年でステップアップできる年間指導計画ができればいいが、生徒の実態が様々であり、当てはまらない生徒が出てくることが予想され、難しさもあると考える

④ 家庭グループ

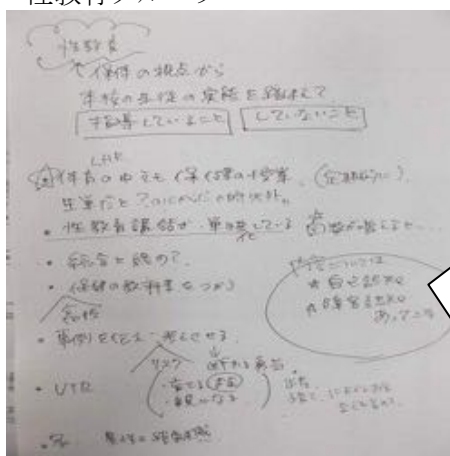


衣食住+ライフプランを教えられればと考える。

食では、食経験を増やす。衣では、着る物への意識（洗濯、整える）。住では、住環境の構築（どこに住むか、どんな部屋か）などが考えられる。

ライフプランでは、お金にかかわる知識や問題、人生の中でいろいろな事象（家族、結婚、余暇、趣味なども含め）が起きたときにどういった選択をして行くかを考えさせるのも、家庭科として大切ではないかと考える。

⑤ 性教育グループ



現在、各学年年一回性教育講話を行っている。

それ以外にも、今後は保健体育の授業や LHR を活用して指導の継続性を考えながら指導を展開していくことが必要であるとする。

指導内容としては、①自己認知②障害認知がベースとなるが、異性とのかかわりかた、実際に子どもを産んで養う力があるかなど、自分の将来や人生設計を考えさせながら展開していく必要がある。

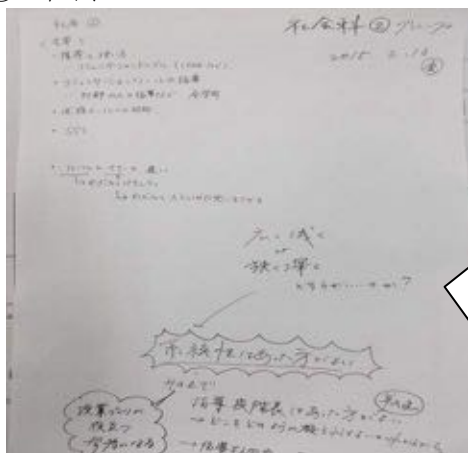
⑥ 社会 A グループ^o



公民分野は生活単元学習で取り扱う内容が多い（年金、手帳など）。また、義務と責任、自由といったところは日々の学校生活の中で教えていく必要があるが、担任裁量で収まっている可能性がある。

反面、地理や歴史についてはあまり取り沙汰されてないのが現状である。先代があって今があるというつながりを教えていくべきであり、地理の広い世界観を持たせるといっても、本校生徒に足りない観点であると考ええる。

⑦ 社会 B グループ^o

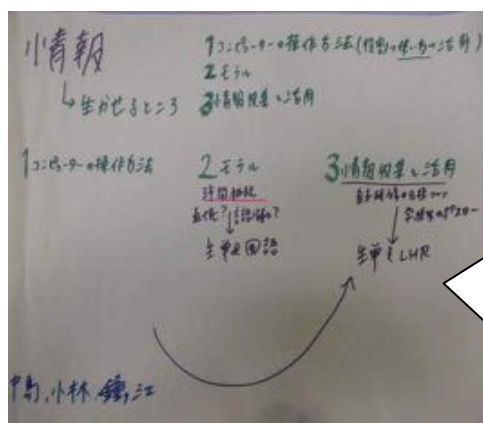


生活単元学習や学級活動などの時間を使用して、広く浅く、内容や方向性を迷いながら教えているのが現状である
と考える。

系統性を持たせながら取り組んでいくことが大事であり、さらに社会的分野の各単元で、指導段階表があったらどうか。

指導段階表などは、授業づくりの参考にもなるだろうし、誰にでもわかりやすいことが重要である。

⑧ 情報グループ



教えるべきは「コンピューターの操作方法」「モラル」「情報収集と活用方法」の3つ。

モラルに関しては、進路指導部の卒業生の実態報告でもあったように、3年間通して指導すべきである。その基礎となるのは道徳的なものであったり、言語活動的なものである。生活単元学習や国語の中で学習できるのではない。その他の視点に関しては、修学旅行の自主研修について調べたりや学校祭ポスターづくりなど、生活単元学習やLHRでできるのではないかと考察する。

(6) その他の学習会

また研究推進委員会が企画したキャリア教育学習会と似たような取り組みではあるが、研修部が企画し勉強会を不定期で行った。日々授業実践で活用できる内容からキャリア教育の考え方など、多くのテーマを設定し取り組んだ。忙しい中、若手の先生方中心に勉強会に参加し、多くの意見を出し合うことができた。このような機会を設けることで、明確な答えは出ないにしても、研究に対する意識や意欲を持ってもらうことができたため、一定の成果があったと考える。

(6) 学習会の成果と課題

全体研修会と合わせたり、長期休業中の時間を利用して学習会を実施することで、時間的な負担を抑えながら効率的に学習を進めることができた。一方で、他の分掌企画の学習会と内容が一部重なることもあり、今後精査が必要になってくると考える。

また、学習内容を考える際に過去2年間の経過を加味したうえでの計画だったので、内容に苦慮することがあったことも事実である。その中で、研究の進み具合や職員からの声、本校の課題を受けて、タイムリーな内容を計画し実施することができた。また、講義形式と協議形式を組み合わせることで、学習会後は研修部だよりで復習できるような記事を掲載し発行するといった流れを作ることで、定期的にキャリア教育や研究のことを意識して指導に当たることができたと思う。

このように、学習会の実施は、研究への意識喚起、キャリア教育の必要性や考え方の共通理解を進めるために大変効果があった。しかし、学習会の内容を振り返ると、職員間の共通理解と本校の課題解決にむけた取り組みが主になった内容であった。そのため、あらためて「キャリア教育の考え方」「障がいそのものの理解」という観点が薄らいだ内容でもあった。次年度はこの学習会がマンネリ化しないよう、新たな工夫が必要になると思われる。このような成果と課題を踏まえ、次年度以降も学習会を実施していきたいと考えている。

第 2 章

課題研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した実践的研究②

～生活単元学習と作業学習を中心に～

(2) 設定理由

第6次研究の中で、キャリア教育について教職員一人一人がその内容を研修し、その必要性を共通理解したなかで研究に取り組んでおり、今後もその意識が引き続き必要である。その中で、昨年度の課題研究では今養版キャリアプランニングマトリックスをもとに、生活単元学習部会（以下生単部会）では指導段階表を、作業部会では評価様式を作成することができた。そこで今年度は、昨年度からの指導段階表や評価様式の修正を加えながら、授業実践中心に取り組んでいくことを研修部、研究推進委員会と確認している。作成した指導段階表や評価様式を今養版マトリックスに照らし合わせながら、授業を展開し助言等を受けながらPDCAのサイクルに繰り返し取り組んでいくことで、生徒が自己認知を深め自分自身で課題を解決する能力がより身につけられるとともに、職員の生徒理解が深まり3年間を見通した系統立てた指導が可能になること、また、より一層の授業における指導力向上にもつながることが考えられる。

以上のような観点から学校教育の目標を達成し、授業実践を行うことに重点を置き、キャリア教育実践を深めるべく、本主題に設定した。

(3) 研究の内容と方法

- 研究組織は生単・作業部会とし、部会の教職員全員でマトリックスに基づいたキャリア教育実践教育を進める。
- 具体的には授業実践をしながら生単部会では指導段階表、作業部会では評価様式を見直し、修正を加える。修正したものを使って授業実践し…というサイクルで展開する。いずれの場合でもマトリックスを見ながら取り組む。授業参観をし合ったり、研究に関する話しをする機会を設けたりするなど工夫しながら取り組む。
- 学年部会においても研究に関して情報・意見交換をする時間を設ける。

(4) 推進日程

生単部会	作業部会
5月	5月
研究計画作成	研究計画作成
1～2学期	1～2学期
昨年度作成した指導段階表を使った授業実践、見直し	昨年度作成した評価様式を使った授業実践、見直し
2～3学期	2～3学期
見直しをした指導段階表を使った授業実践、公開	見直しをした評価様式を使った授業実践、公開

2 生活単元学習部会の研究

(1) 研究の目的

今年度の第1回全体研修会にて、今年度の指針について、昨年度は指導段階表をまとめ、PDCAサイクルのPを整備することができたこと、今年度はDなどの整備していない部分の整備を行っていくことが確認された。そのため、生活単元学習部会（以下生単部会と略す。）では指導段階表について検証していくことで、今後の授業に生かすことができることを研究で行うこととした。

(2) 研究の内容と方法

「心とからだの学習」は1、2学年は前期に1回、後期に1回の計2回、3学年は前期に1回のみ設定されている。前期に指導段階表を用いた単元計画や指導案の作成、授業の実施、反省・次回に向けての内容の検討を行い、後期は前期での検討事項を踏まえ、同じく単元計画や指導案の作成、授業の実施、反省・来年へに向けての内容の検討を行っていくこととした。

(3) 推進計画

- 4月 形態部会（研究の方向性についての話し合い）
- 10月 形態部会（中間確認）・中間発表
- 1月 形態部会（まとめ）

(4) 研究の実際

第1回全体研修会後、生単部会で具体的にどのように研究を進めていくか検討した。異性間で問題が多く出ていることから、「異性とのかかわり方」について絞って研究を進めていくこと、更に、系統立てた指導ができているかを確認することが必要であることから3学年とも前期の「心とからだの学習」で指導段階表内の「異性とのかかわり方」という内容について触れた授業を行い、その結果を参考に後期の「心とからだの学習」を行うこととなった。その取り組みを通して昨年度に作成した指導段階表を見直していくこととなった。

その後の研究推進委員会にて指導段階表とマトリックスの関連性について検証するよう指針が出された。また、マトリックスの文言を単元計画や指導案に入れるなど、マトリックスを活用していることを明らかにすることになり、その件についても検討していくこととなった。

前期の心とからだの学習では、3学年とも指導段階表をもとに単元計画や指導案を作成し、授業を行った。単元終了後に各学年で指導段階表への追加項目や修正点、マトリックスとの関連性について検討した。その後臨時生単部会を開き、全学年で検討事項について確認を行った。指導段階表について、書かれている内容が「生活単元学習」の学習内容として適切ではないのではないか、というものがいくつか出された。（表1参照）

表1 指導段階表 1 学年一部抜粋

1 学年	
【自分と社会】 ・自己理解①⇒長所、短所など ・パーソナルスペース ・コミュニケーションスキル①⇒聞く（返事、体を向ける、相手の顔を見る、<u>相づち</u>、<u>評価</u>、最後まで聞く、復唱する）など ・人との距離・関わり ・大人としての行動と責任⇒高校生になってなど ・清潔の保持⇒清潔って？など ・身だしなみ周りからどう見られてしまうのかなど	「スキル」は生単で教えるべきか？
【健康について】 ・健康とは？⇒健康な状態とは？などを考える ・生活習慣病について⇒日本人の三大死因や肥満・糖尿病にも<u>触れる</u> ・健康の保持増進のために⇒食事・運動・休養などの大切さ（健康管理）	「心とからだ」の指導内容として適切か？ 1 学年で指導すべきか？ 病気・ケガの対応 運動余暇に触れる

また、3 学年は後期に「心とからだの学習」が設定されておらず、「社会人としての暮らし方」という単元が設定されている。この単元は「心とからだの学習」と「生活する力を身につけよう」の2つの単元の内容が含まれるものであり、その学年の生徒の実態に合わせて内容を柔軟に盛り込めるようにしている。これについて指導段階表ではどのように扱っていくべきかという疑問が上がってきた。これについては「心とからだの学習」、「生活する力を身につけよう」の内容を含む単元が「社会人としての暮らし方」であることを共通理解すべきであることがわかった。

マトリックスとの関連性については、「心とからだの学習」の指導段階表は、マトリックスを参考につくったものではあるが、「マトリックスの指導観点や指導の柱を盛り込もうとすると、（中略）不具合が出てくるため、あくまでもマトリックスの達成を目指すという観点で話し合い、題材一覧の中にはマトリックスの文言を盛り込まないこととした。（昨年度研究紀要より引用）」ことから、整合性がとれるものではないことを再確認した。更に「マトリックスは指導者側の押さえであるということ」を共通認識できた。（昨年度研究紀要より引用）」ことから、生徒視点での目標が記載されている単元計画や指導案にマトリックスの文言を入れ、生徒の評価の参考にすることは昨年度同様難しいという判断に至った。

その後、どのような方法でマトリックスを活用することができるのか話し合いを行った。その結果、「指導者側のおさえ」であるという共通点から、年間指導計画にマトリックスの観点を盛り込み、前期評価や年度末評価で指導者側の評価として用いて授業実践につなげるのが良いのではないかという提案が出され、各学年で試案としてマトリックスの観点で前期評価と年度末評価を行うこととした。学年で検討した後、全学年で行った結果をもちより確認を行った。マトリックスの観点に合わせて評価を行うと、観点と指導している内容が合わないものがあることや、1 学年ではマトリックスの文言を観点として評価を行うことが概ねできたが、学年があがっていくにつれ、観点の表記が具体的になり、評価が難しいものが増えていくことがわかった。（表2、3、4）

表2 マトリックス1 学年段階（一部抜粋）と評価（試案）

指導観点	観点の中身（解説）	指導の柱	1 学年段階 （学びを通して気づく・知る）	評価
心と体	・元気 ・体力 ・健康 ・食生活 ・睡眠・休養 ・規則正しい生活 ・ストレスコントロール	心身の健康	●健康でたくましい心と体の必要性に気づかせ、身につけることができる。	（前期） ・「相手との距離」「自分の発達段階」を知るスライドを取り入れ生徒にわかりやすく指導ができた。 ・なぜ清潔にすべきか考えさせ、必要性に気付かせることができた。 （後期） ・前期で行った内容を取り入れ、発問しながら深く考えさせることができた。 ・健康とはどのような状態のことをいうのか考えさせ、働く上での必要性を気付かせることができた。 ・養護教諭の講義で、より専門的な言葉を使うことで、体の大切さを感じることができた。
		基本的生活習慣の確立	●生活リズムを整え、望ましい食生活や規則正しい生活ができるよう指導する。	（前期） ・生徒の年齢に応じた生活習慣を知ることができるスライドを取り入れ、生徒の理解度を高めた。 （後期） ・スライドの中で例題を出しながらどのように生活するといけないうかを考えさせることができた。 ・健康な生活をおくるためにどのようなことを行うべきか考えさせた。
		感受性	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを知り、経験や疑似体験を通じてその価値に気づいたり認めたりできる心を育む。	（前期） ・未指導 （後期） ・様々な表現を見たり、行ったりすることで育むことができた。 ・劇を通して表現力を育むことができた。
				（前期） ・未指導 （後期） ・言葉から自分なりに表現を考えることができた。 ・舞台発表を通して、表現力を高めることができた。
感性	・発想力 ・表現力 ・感受性	表現力	○真・善・美として感じたことを言葉・造形・音楽・行動などで表現できる力を育む。	（前期） ・未指導 （後期） ・言葉から自分なりに表現を考えることができた。 ・舞台発表を通して、表現力を高めることができた。

表3 マトリックス2 学年段階（一部抜粋）と評価（試案）

指導観点	観点の中身（解説）	指導の柱	2 年生段階 （将来を意識し、自ら学ぶ・行動する）	評価
心と体	・元気 ・体力 ・健康 ・食生活 ・睡眠・休養 ・規則正しい生活 ・ストレスコントロール	心身の健康	●自らの心と体の変化をとらえ、心身の健康を維持できるよう指導する。	（前期） ・「心とからだの学習」では生徒の成長に合わせた授業内容や性教育講話を通して学習の深化を図ることができた。 ・指導はできたが個人差への対応には課題がある。 （後期） ・たばこと飲酒では自己の判断、薬物は絶対使ってはいけないことを映像も用いながら指導できた。 ・心とからだでストレスについて扱ったため、ストレスがたまったときの解消法などを考え、心の健康について指導できたと思う。
		基本的生活習慣の確立	●自立した生活を意識し、望ましい生活習慣を身につけることができるよう指導する。	（前期） ・前期に当てはまるものがなかった。 （後期） ・朝食をつくろうという題材で調理を行い、自らが材料を選択し、工夫をしながら取り組ませることができた。 ・生活する力で朝食について触れ、仕事を意識して食事を考えることができた。
		感受性	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを知り、経験や疑似体験を通じてその価値に気づいたり認めたりできる心を育む。	（前期） ・考え方を交流する発表など活動に入れることができた。 （後期） ・心とからだで生命について扱った際にたくさんの考えがあることに気付かせることができた。
				（前期） ・生単ではあまり関わりが無いように思う。 ・生徒が自身の理想や思い、希望を表現できるような場が無い。 （後期） ・後期でふれていなかったように思う。
感性	・発想力 ・表現力 ・感受性	表現力	○真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて言葉・造形・音楽・行動などで適切に表現できる力を育む。	（前期） ・生単ではあまり関わりが無いように思う。 ・生徒が自身の理想や思い、希望を表現できるような場が無い。 （後期） ・後期でふれていなかったように思う。

表4 マトリックス3 学年段階（一部抜粋）と評価（試案）

指導観点	観点の中身（解説）	指導の柱	3 年生段階 （将来を見据え、自ら学ぶ・行動する）	評価
心と体	・元気 ・体力 ・健康 ・食生活 ・睡眠・休養 ・規則正しい生活 ・ストレスコントロール	心身の健康	●卒業後の生活を見据えて、自ら心と身体 の健康が保てるよう、望ましい生活を組み立てる力を育てる。	（前期） ・『見学旅行』では規則正しい生活というところで、『心とからだ』では性教育の内容というところで全般的に当てはまる。 ・『心とからだ』は性教育が中心だったので、マトリックスとは合わせにくい。
		基本的な生活習慣の確立		（後期） ・後期にはあてはまらない。生単以外では HR や行事が近付いたときなど、指導場面に応じて伝えた。
感性	・発想力 ・表現力 ・感受性	感受性	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを理解した上で、柔軟に物事を受け入れる心を育む。	（前期） ・内容の解釈が難しい。色々な考え方があことを受け止められるようにするということか。
		表現力	○卒業後の豊かな生活を目指し、真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて適切に表現できる力を育む。	（後期） ・物事を受け入れる場面は多くなった。相手を尊重したり、相手の意見を参考にするなどの指導をする必要がある。
				（前期） ・どのような表記を行えば適切な評価となるかがわからない。 ・「自身の理想や希望を込めて適切に表現できる力を育む」の箇所については学校際での掲示物に活用できる余地がある。 （後期） ・将来の夢について、就労先や生活の場所なども考慮してまとめることができた。

後期では授業公開や、前期と同様に指導段階表の修正点や追加点などを検討し、マトリックスの観点をういた年度末評価を試案として行った。授業公開では指導内容が2 学年段階として適切であったこと、指導段階表に基づいて計画を行うが、学年・生徒によってねらいが異なるため、学年間での共通理解を図ることが必要だとわかった。

（5）成果と課題

指導段階表を用いたことによって単元の計画や授業の計画がしやすくなった。また、この指導段階表を用いて今後も授業を行っていくことで、系統的で効果的な指導ができることが期待できることを部会で確認することができた。しかし、今後全て指導段階表のとおり授業を行ってしまうと、指導段階表にしばられてやりづらさが出てくることが予想される。そのため、生徒の実態や学年の状況に応じて内容を選択して行うなど、担当者や学年間で調整しながら使っていく必要がある。

2 学年 生活単元学習「心とからだの学習④」授業公開資料

1 本時の展開

単元・題材名	心とからだの学習④ 「喫煙・飲酒・薬物について」	生 徒	2学年 生徒27名	
		場 所	視聴覚室	
日 時	平成26年12月11日(木)3・4校時	指 導 者	T1:鈴木貴史 T3:渡邊雅都 T5:村瀬はるな	T2:後藤倫弘 T4:鈴木絢子 T6:高橋詩織
本時の目標	① 体に与える影響を理解することができる。 ② 将来、健康を維持するために必要なことを理解することができる。 ③ 薬物の恐ろしさを知ることができる。			

学習内容	学 習 活 動	教材・教具	指導上の留意点
【導入】 挨拶	・家庭科の日直が始まりの挨拶をする。		
本時の説明	・流れを説明する。	・パソコン ・テレビ	
前回の振り返り	・前回やったことの振り返りを行う。	・ワークシート	・数名に質問する。
【展開】 喫煙、飲酒	・喫煙者の肺と非喫煙者の肺がどれほど違うか画像を見て知る。 Q両方の肺を見てどう思いますか。 ⇒ワークシートに記入する。 ・飲酒を続けた肝臓とキレイな肝臓がどれほど違うか画像を見て知る。 Q両方の肝臓を見てどう思いますか。 ⇒ワークシートに記入する。 ・喫煙時の血管収縮と血液の流れの様子を映像を見て知る。 ・飲酒をすることで体温が上がる、血液の流れが良くなることを口頭で伝える Q喫煙と飲酒を一緒に行うとどうなってしまうか。 ⇒ワークシートに記入する。 ・画像、映像を見た上で	・パソコン ・テレビ ・ワークシート ・パソコン ・テレビ ・ワークシート	・必要に応じて書けない生徒の支援をT2～T6は行う。(※) ・※ ・※

あいさつ	・家庭科の日直が終わりの挨拶をする。		
------	--------------------	--	--

2 生徒の実態（学級経営案より）

- ・意欲的に取り組む生徒が多く、文字の読み書きや簡単な計算、単位の換算などは理解できる。しかし、集中力を持続することは難しい。
- ・日常会話についてはおおむね成立しているが、自分が困っているときに助けを求められない様子や、人の気持ちを考えていない行動、発言が見られる。
- ・生徒全員が知的障害、発達障害があり、IQ は 40～90 位と幅広い。

3 題材設定の理由

昨年度作成した指導段階表（2 学年段階）に記載されている内容を取り扱う。【健康について】という分野は 2 年生である程度指導しなければならず、8 月に実施した『心とからだ③』で実施していないものを今回の単元で設定した。

ストレスや喫煙、飲酒、薬物についての理解を深めることや正しい知識を身に付けることは、将来『健康を維持していく』ために必要であり、自分の身を守ることにともつながる。特に喫煙に関しては、本学年で指導対象になった生徒もあり、体に及ぼす影響を理解させる必要がある。自己理解やコミュニケーションは、昨年度も実施しているが、他者からの評価をもとに自己理解を進めてほしい、命の大切さについては、自分の人生、命を大切にするということとはどのようなことなのかを考えてほしい、という思いがある。

そのため本単元は、①ストレス、喫煙、飲酒、薬物が体に与える影響などの健康に関する知識を深める、②命の価値について考えるとともに命の大切さについても考える、③他者評価をもとに、昨年度との自分の変化を理解し自己理解を深める、④グループで話し合うことで、人によって様々な考え方があることを知る、という 4 つで構成する。

4 指導計画・内容（概要）

本単元「心とからだの学習④」の目標

- これからの生活に生かすための具体的な方法を考えることができる。
- 健康を維持していくために必要なことを理解することができる。
- 命（生命）について考えることができる。

第 1 回 11 月 28 日 : オリエンテーション

第 2 回 12 月 3 日 : ストレスと解消法

第 3 回 12 月 4 日 : 自己理解①

第 4 回 12 月 5 日 : 自己理解②

第 5 回 12 月 10 日 : 喫煙・飲酒について①、薬物乱用について①

第 6 回 12 月 11 日 : 喫煙・飲酒について②、薬物乱用について②（本時）

第 7 回 12 月 12 日 : 前時の振り返り、命の大切さ①

第 8 回 12 月 17 日 : 命の大切さ②

第 9 回 12 月 19 日 : まとめ

指導段階表との関連

5 評価 (A: 大変よい B: おおむねよい C: 努力を要する)

評価の観点	評 価
本時の目標は達成されたか ① 体に与える影響を理解することができる。 ② 将来、健康を維持するために必要なことを理解することができる。 ③ 薬物の恐ろしさを知ることができる。	A・・・B・・・C A・・・B・・・C A・・・B・・・C
指導段階表の内容と授業内容が合っていたか。	A・・・B・・・C
指導段階表の2学年段階として内容が適切だったか。	A・・・B・・・C
本時の目標設定は適切であったか	A・・・B・・・C
導入・展開・整理の流れ、時間配分、教材・教具は適切であったか	A・・・B・・・C
全体・個別に対する働きかけ（手立て）は適切であったか	A・・・B・・・C
生徒の学習に取り組む姿は、自ら学ぶものになっていたか	A・・・B・・・C
<その他>	

心とからだ 指導段階表

H25. 12. 17現在

1 学年		2 学年		3 学年	
【自分と社会】 ・ 自己理解①⇒長所、短所など ・ パーソナルスペース ・ コミュニケーションスキル①⇒聞く（返事、体を向ける、相手の顔を見る、相づち、話を最後まで聞く、復唱する）など ・ 人との距離・関わり ・ 大人としての行動と責任⇒高校生になってなど ・ 清潔の保持⇒清潔って？など ・ 身だしなみ、周りからどう見られてしまうのかなど		【自分と社会】 ・ 自己理解②⇒他者の評価を受け入れる ・ コミュニケーションスキル②⇒伝える（感謝、謝罪、お願い、断り方、伝言、支援を求める）など ・ ストレスと解消法		【自分と社会】 ・ 自己理解③⇒社会に出るために ・ 他者理解⇒他者の気持ちを尊重しよう ・ コミュニケーションスキル③⇒社会に出るために（場を読むなど） ・ 社会人としての行動と責任⇒大人としての判断	敬語、電話対応など
	病気・ケガの対応 運動余暇に触れる		【健康について】 ・ 喫煙について⇒煙の種類、有害物質、体への影響など ・ 飲酒について⇒過度、長期の飲酒の影響 など ・ 薬物乱用について⇒種類、脳への作用など		
	【体の仕組み：性教育】 ・ 異性とのかかわり方①⇒プライベートゾーン、異性への興味関心、性的欲求のコントロール、異性との距離感など ・ 二次性徴⇒思春期の体の変化、男女の体の違い、身体の仕組みなど ・ 妊娠について①⇒受精から出産までの流れなど ・ 性感染症について①⇒H I V・A I D Sについて、その他の性感染症など	予防、正しい知識	【体の仕組み：性教育：命の尊さ】 ・ 異性とのかかわり方②⇒男女交際のルールやマナーなど具体例を出し、行動を選択・決定する。 ・ 妊娠について②⇒確認、振り返り程度（生命の誕生を確認） ・ 人工妊娠中絶⇒避妊方法、心と体への影響など ・ 命の大切さ①⇒実際の例を出し、命について考えるなど	一般論を伝える 事故などの例	
				【卒業後を見据えて】 ・ 異性とのかかわり方③⇒大人としてのかかわり方、マナー、将来（結婚）についてなど ・ 性被害、性加害⇒性犯罪、性的事故などについて ・ 性感染症について②⇒感染の症状、感染した場合など ・ 結婚と家族、家庭を持つ⇒どういったことが必要（法律など）なのかなど ・ 運動と余暇⇒生徒の実態に応じて ・ 命の大切さ②⇒実際の例を出し、命について考えるなど	症状や予防法など 戦争・脳死などの例

※ この指導段階表を目安とし、生徒の実態などに合わせて柔軟に授業を組み立てていく。

本単元で扱う内容

3 作業学習部会の研究

(1) 研究の目的

第6次研究の主題である「社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究」の必要性は昨今の経済・社会情勢(具体的には本校生徒の進路先が多い道南地域の雇用状況など)や卒業生の事例から、喫緊に求められているところである。「社会の変化に対応できる」生徒とは、本校の目指す生徒像である「豊かな心と健やかな体をつくる生徒」、「希望に向かって努力する生徒」「自ら判断し行動する生徒」とし、教育課程の1つである作業学習を振り返り、見直すことに取り組んだ。

昨年度は、日々の作業学習におけるねらいや指導内容、その授業を受けた生徒の変容も含めた授業の様子をまとめて授業後に振り返ることのできる様式を、これまで使用していた授業略案をもとに改善して作成した。その結果、各学科で統一された評価様式を完成させることができた。その中で、生徒の変化にきめ細やかに気づくことができるようになり、各学科の指導重点を授業計画に反映させながら立案し、生徒の課題を常に意識しながら指導できるようになった。そこで今年度は、昨年度作成した評価様式に修正改善を加えながら、授業実践を中心に組み込んでいくこととした。

修正改善した評価様式を今養版キャリアプランニングマトリックス(以下『マトリックス』と略す)に照らし合わせ、授業を展開し助言等を受けながらPDCAのサイクルに繰り返し取り組んでいくことで、生徒が自己認知を深め自分自身で課題を解決する能力がより身につけられるとともに、職員の生徒理解が深まり3年間を見通した系統立てた指導が可能になること、また、より一層の授業における指導力向上にもつながることが考えられる。

以上のような観点から学校教育の目標を達成し、授業実践を行うことに重点を置き、キャリア教育実践を深めるべく、本主題に設定した。

(2) 研究の内容と方法

- 研究推進委員会より示された、本研究の目的、ねらいを部会内で確認し、全体周知を行った。
また、意見交換を行いながら評価の在り方について適宜話し合いを進めた。
(社会の変化に対応できる力を身につけさせるための授業展開と授業改善)
- 各学科で昨年度作成した評価様式を今年度活用し、改善ポイントなどを話し合いながら、前期にかけて評価様式の改善・修正を行っていった。
(各学科の特性もあり、現在の各学科独自の様式を作成)
- 各学科で改善修正された新たな評価様式を作成し、授業で活用したときの使いやすさ、改善点などについて授業者および部会内で検討し、周知を図っていく。
- 実際の授業に活用しながら、適宜、授業者間で話し合いを行い、部会内で進捗状況を確認し、学科内でも進捗状況を共有することに努めた。

(3) 推進計画

- 6～7月 評価様式の改善・修正に向けて
…各学科で昨年度作成した評価様式について、改善・修正に向けて検討し、修正版作成。
- 9～11月 評価様式の改善・修正に向けて
…各学科で改善・修正された評価様式を使用しPDCAを意識した授業を行い、再度改

善・修正に向けて検討し、修正版作成。

12～1月 公開授業・協議会

…各学科、改善・修正された評価様式を活用して公開授業を行い、協議を行う。

2月 研究のまとめ

…評価様式についてまとめ。

(4) 研究の実際

産業科

- 昨年度、2つの評価様式のうちから個別の指導目標を載せた様式を使用して今年度の研究を進めていくこととなった。
- 決定された評価様式には個別の指導目標の他に目標達成のための手だても併記されており、どのような方法で目標を達成しようとしているのかが一目でわかる様式となっていた。
- STの提出した記録を参照しながらMTが評価を記入し、これを個別の指導目標、手立てと並べたことで、その日の指導を振り返ることができる様式であった。
- しかし、次のような課題があった。
 - ①評価欄に表記された文章から作業学習中の作業面と態度面の力の定着度合いを読み取る努力が必要である。
 - ②マトリックスの観点と指導の重点とを表中で対応させ、どの重点について指導できたか指導者が授業後に自己評価するものとしていたが、その自己評価をどのように授業に取り入れるのかが明確に示されておらず、略案には本時の目標を記す欄もないため、ともすれば授業のねらいが見えないまま授業づくりを進めることになる危険性がある。
- そこで、旧様式(資料1)を見直した新様式(資料2)を作成して授業改善を図り、具体的には次のようにして授業改善を意識できるようにした。
 - ①個別の指導目標、手立てを簡潔に記すようにし、作業面と態度面それぞれを評価できる枠組みにする。
 - ②生徒の評価をもとに、前時の授業の目標を評価する。
 - ③前時の生徒の評価、授業の目標の評価をもとに本時の目標を決める。
 - ④指導の重点(マトリックスの観点と対応済)は授業者の自己評価としてではなく、授業者が単元を設定する際にどこに重点を置くかを明確にするためのツールとして活用する。

農業科

- 昨年度作成した評価様式(資料3)を1学期かけて使用し、PDCAサイクルを意識したよりよい授業や評価につながるように評価様式の改善修正点について話し合った。
- 話し合ったポイントとして
 - ①「授業記録と評価について」
 - ②「個別指導目標と重点目標(マトリックスと学科の重点目標とリンクしたもの)の評価について」
 - ③「評価(通知表)との兼ね合い」の3点が上げられた。
- 昨年度の評価様式(資料3)作成時点では、学科の指導の重点を記載し、その日の授業では特にどの重点に重きをおいて指導するのかを明確にした点と、指導の重点に対しての授業者自身の評価と生徒個人個人の評価を3段階評価で行っていた。これらを改善した方がよいという話し合いポイントが上記の①②である。改善ポイントとして、通知表に記載さ

れている作業学習の個別の指導目標に対する評価（到達度）も評価する項目に追加し、3段階評価を5段階評価で数値化して、生徒の変化や指導目標の適正について考える一つの指標となるようにした。（資料4-1）

- 日々の評価の積み重ねが、長いスパンでの生徒の変化や指導目標の適正について考える材料にならないか、また通知表に生かさないかという話し合いポイントが上記の③である。改善ポイントとしては、新たに月別に評価できる様式を作成し、日々5段階で評価を数値化している数値を、月別単位で平均値を出し、月別の平均値を比べることで、生徒の変化を分かりやすい形にし、指導目標が適正であるか考える材料とした。（資料4-2）
- 改善した評価様式（資料4-1、2）を2学期にかけて使用し、公開授業も行いながら活用していった。

家庭科

- 昨年度、学科として統一した評価様式を作成した。生徒全員分の一週間程度の評価を記入する評価様式は、担当する生徒の前時の様子がわかったり、重点的に指導する点や指導方法をまとめて確認することができ指導に生かすことができている。
- この評価様式は Excel ファイルで、その日の授業で担当した生徒の様子を入力している。授業に入る指導者は複数いるが、一人ずつしか入力できないため、同時に入力できる様式の作成を行った。（資料5、6）

（5）成果と課題

産業科

【成果】

- 前時の評価から本時の目標を設定する流れにしたことで、MTはより授業改善を意識し、何を重点に指導したいのかをSTと共通理解した上で授業ができるようになった。
- 個別の指導目標、手立てが簡潔にまとめられており、その内容が理解しやすくなった。
- 見開きの形式であるため、日々の目標の到達度合いを感じることができる。
- 生徒の評価が作業面と態度面に記されていることで、その生徒の定着度がより見えやすくなった。

【課題】

- 単元の設定と、その単元でどこに指導の重点を置くかを定めること。
- この評価・略案様式を使用してよりよい授業づくりを進めるため、継続して指導者が互いの授業を見合ったり、話し合いを重ねたりしていくこと。
- 個別の指導目標と手立てを、作業面と態度面の2つの視点から設定すること。

農業科

- 【成果】 ○昨年度同様、授業の指導重点や個別の指導目標が常に記載されているので、毎時間意識することができる。
- 授業記録をこまめに取り習慣が付き、生徒の作業実態が振り返りやすくなった。
- 生徒評価を数値化することで、目に見えて生徒の課題が分かりやすくなった。
- 授業者自身の評価では、授業の指導重点項目をより明確化することでよりポイントを絞って振りかえることができるようになった。

- 【課題】○生徒評価を数値化したことで、生徒の目標達成度や課題が分かりやすくなったが、評価そのものが、授業者や指導者の主観での判断になっているので、基準が不明確で記録者によって判断基準が変わる恐れがある。(指導者間の評価基準の統一が難しい)
- 昨年度同様、農業科の特性上、天候によって作業種を突如切り替えたり、作業種を分けて行わざるを得ないときがある。そのため、作業種が変わると重点項目が変わったり、指導者が分かれて指導することがあり、評価がつけにくいときがある。
- 生徒の進路別にグループで作業することもあり、現在の評価様式だと一律に重点項目の設定になってしまう。

家庭科

- 【成果】○昨年度同様、個別の目標が記載されていることで、それを見た指導者が個々の生徒の課題とするところを常に意識して授業に取り組めたことに加え、授業後の評価への活用にもつながった。
- 授業によって担当教員が変わっても、生徒の課題とするところを意識した継続的な指導にもつながった。
- 複数の指導者が同時にデータ入力できる様式に改善したことで、業務の効率化が図られた。
- 【課題】○マトリックスにより、指導者はキャリア教育の視点で授業づくりを行うようになった。しかし、そもそもキャリア教育とは、生徒が主体でなければならない。生徒の自立、自発性、自己選択や自己決定などを意識した取り組みでなければならない。そこで、指導内容表(学習指導要領や他校の指導内容を参考に作成した各教科領域ごとの指導内容を本校独自でまとめたもの)をキャリア教育(まずは4領域)のどの部分に当てはまるかを整備していくことで、生徒一人一人のキャリア発達につなげられるのではないかと考える。
- 各授業においての指導の重点の評価は、授業者の自己評価だけではなく、授業に入っている他の指導者も評価をし、記入できるようになると更に授業改善につながると思われる。

このように、本研究を通してのこの一年間は各学科ともに授業改善のための取り組みを行った2年目であった。昨年度の反省を踏まえ、各学科とも創意工夫で評価様式の改善に努め、授業改善に励み、一定の成果をあげることができた。しかし、今後もよりよい授業実践が行われるためには、全職員が同じ目的をもって取り組むことが不可欠である。そのためには、日々確認の場を設け、みんなで知恵を出し合って授業改善に努めていくことが必要である。

平成 26 年度 産業科 2 年 作業学習 (5 回目) 授業メモ

日 時	平成 26 年 4 月 17 日 (木) 13 : 00 ~ 14 : 30		場所	窯業室	指導者	・田中 高橋 小林睦
単 元 名	オリエンテーションおよび復習		題 材 名	粘土練り・粉碎・やすりがけ・木の葉皿の成型		
時刻	学習活動				教材・教具	
13:00	- 作業服 (エプロン持参) で窯業実習室に集合、手洗い 作業の用意 - 始業あいさつ (日直号令) 「気をつけ」「これから作業を始めます。」「礼」「田中先生、お願いします。」 田中 ⇒ 4 日間の作業を終えて 「やる気、元気、根気」 本時の内容の説明 「ほう、れん、そう」は社会人として当たり前! 「手早く」「ていねいに」「声かけ」 + 「応える」「協力して」「状況判断」				<生徒服装・持ち物> - 作業服・作業ファイル - 筆記用具・エプロン	
13:10	<粘土練り・粘土再生> 3 年生側作業台奥にて ※田中先生 B・・・粘土練り (白土)、粘土再生 (赤土) G・・・粘土切り (黒土)、粘土再生 (赤土) H・・・粘土切り (黒土)、粘土再生 (赤土) ※時間に余裕があれば、木の葉皿の成型 <粉碎> 赤土 (50 分間) 作業室 1 にて ※高橋先生 C D I ※時間に余裕があれば、コーヒーカップのやすりがけ。 <やすりがけ> コーヒーカップ 作業室 1 にて ※小林睦先生 A E F					
13:57	<あとかたづけ・掃除> (掃除は 23 分間で、必ず終わらせる!) C D F I・・・作業室 1 の掃除 A E・・・窯業室の掃除に加わる					
14:20	<反省> 全体の反省 日直号令 「気をつけ」「これから反省を始めます。」 「礼」 「田中先生、お願いします。」					
14:30	- 終業あいさつ 「気をつけ」「これで作業を終わります。」「礼」「お疲れ様でした」 - 退室あいさつ、タイムレコーダー					
授業記録						
☆						
作業の様子						
A	やすりがけ途中のコーヒーカップを 2 つ完成。全体的に集中して行っていた。中の側面にできたでこぼこを 180 番で滑らかにすることができず、職員にすぐ聞くことができていた。以降は 80 番で滑らかにすることができた。また、E や F にやすりのかけ方を教えていた。掃除の際にも、周囲を見て指示を出していた。			F	初めてのコーヒーカップのやすりがけではあったが、誰にも聞かず作業に取り組んでいた。A に底からかけることを促されかけているが、以降も自分から聞くことはなかった。A、E の様子を見て行ったり、A の完成させたものを見てやすりがけを行っていた。側面と取手部分を行って終了している。掃除の際にはモップがけを行ったが、ゴミを確認せずにやって残っていたので職員から指摘されている。	
B	赤土のくず粘土を 1.0 ~1.5cm 程度四方の大きさに手で砕く作業 (粘土再生) に 25 分間ほど楽しそうに取り組む。バレンタインデーの手作りチョコのために割っている気持ちだったという。カップの底板と思われるほどに厚い粘土もあったが無言で取り組む。白土の再生 (昨日から続いている粘土練り) も水を加えてから手が滑ってやりにくくなり、田中先生が 20 回ほど煉って交代。その後は順調。粉碎チームが洗い忘れている洗面器類を洗いを買って出る。後片づけに全く問題は見られない。			G	赤土のくず粘土を 1.0 ~1.5cm 程度四方の大きさに手で砕く作業 (粘土再生) に取り組む。「固い...」「手が...」などと言いながら取り組んでいたが、キズ絆創膏がどうのこうのといった言葉も出なくて良い状況である。砕いた後、水に浸した時には興味津々。黒土をそぎ切る作業では、H がやりにくいだろうと判断して立ち位置を替えていた。後片づけにも問題なく取り組んでいた。	
C	粉碎量 630 g。 3 人の中で唯一最初から最後まで片手を洗面器に添え、丁寧にしていた。 自分の使用した道具を洗わず、他の掃除をしていた事に対し注意が入る。また、洗い残しを D に注意されていた。			H	赤土のくず粘土を 1.0 ~1.5cm 程度四方の大きさに手で砕く作業 (粘土再生) に黙々と取り組む。 黒土を削ぎ切る作業では「柔らかい粘土ではないので、できるだけ薄く切り取るように」との指示を忘れていたのか、それとも、それが可能な限りに薄く切っているのか、明らかに力いっぱい切り糸を引いているように見えたので、再度、田中先生から指示を出された。	
D	粉碎量 650 g。 明るく大きな声を意識出来ていたので、今後は「まーす」と語尾高で間を伸ばさない話し方があるといい。作業は残り 1 分となると力強く粉碎出来た反面、机に手を付けていたり、無駄な動作が多い。 準備から片付けまで優しく教え、指揮を取っていた。			I	粉碎量 940 g。途中、避難訓練が入ったものの、すぐに気持ちを切り替え一心不乱に作業できていた。 1 キロに到達したいという意欲が強く表れていた。準備は 2 回目だからと言い訳せず積極的に周りに聞いていた。しかし、掃除では自分の使用した道具を洗わずに別の掃除をしていた事に注意が入る。	
E	時間をかけて 1 つやすりがけし未完成。丁寧に作業をしており、わからないところは積極的に A に聞いて行っていた。やすりがけ自体は手早く行っているが、1 箇所に時間を費やしてしまっている。					

No.	マトリックスの観点	指 導 の 重 点	評価
1	【職業】	正しい手順や方法で作業を行い、集中力や作業に必要な体力などの基本的な能力を身につけさせる。	
2	【職業】 【コミュニケーション】	あいさつ、返事、報告などの作業をするのに必要な基礎となる力を身につけさせながら、仲間と協力して取り組む姿勢を育てる。応対の仕方など基本的な行動様式を育成する。	
3	【心と体】【知識・技術】	健康・安全指導を徹底するとともに、整理整頓、清掃などの習慣を育成する。	
4	【知識・技術】	生産から販売、納品までの流通過程の学習を通し、流通の仕組みを体験させ、働く喜びや意欲の向上を図る。	なし
5	【自己理解】【職業】【自己内省】	「作業強化日」「現場実習」を通し、自ら課題を理解するとともに、課題解決への意欲を高める。	なし
6	【職業】【知識・技術】	販売学習を通し、実践的な態度や勤労意欲を育成する。	なし

評価の基準 ◎…達成できた ○…おおむね達成できた △…改善の余地がある

	個別の指導目標	手だて	評価	備考
A	・時間いっぱい集中して作業に取り組み、製品の細部に至るまで丁寧に扱うことができる。 ・仲間同士で言葉をかけ合い、それに応えたり、時には指示を出すなど、協力して作業に取り組むことができる。	作業における本人の課題を理解させながら取り組ませる。 効率良く仕事を進めるために、仲間と応答し合い、本人から指示を出して協力することが必要であることを理解させて取り組ませる。	やすりがけのような単純な作業では、途中でミズをすることもなく、最後まで集中することができる。 やすりがけは得意な作業であり、仲間にも余裕を持って説明する力がある。	
B	・返事や報告をする際の声の大きさを意識しながら作業に取り組むことができる。 ・仲間へアドバイスするなど仲間同士で協力しながら作業を進めることができる。	将来の自立とともに作業の際の本人の課題を意識させながら、改善に向けて取り組ませる。 一緒に作業を進めている仲間とともに、助ける場面も考えながら作業に取り組むことができる。	粘土練りや粘土の再生作業は前回から楽しく取り組むことができています。 自分たちの後片づけ以外にも気持ちを向けることができるほど、周囲に目を配る力があるため、片づけていない道具を見つけるとそのままにしておくことができないほど積極的である。	
C	・作業での自分の課題を理解して、その課題を意識しながら作業に取り組むことができる。 ・仲間同士で声をかけ合い、それに応えながら協力したり、状況を見て作業や後片づけを自分から取り組むことができる。	本人の課題を掲示するなど、作業時間中にいつでも意識できるようにして取り組ませる。 いろいろな作業場面において、本人が必要だと判断する作業を教師とともに考えながら取り組ませる。	使った道具から目を離して他の作業に取り組むような場合、洗わなければならない道具の存在を忘れてしまう。 気づくような支援（視覚的な）方法が必要な生徒である。	
D	・作業工程中の細かな作業をていねいに行いながら、作業場に合った声の大きさを返事や報告をすることができる。 ・仲間同士で言葉をかけ合い、それに応えながら協力して作業に取り組むことができる。	作業に最後までていねいに取り組ませるとともに、報告や返事の声の大きさが求められる理由を教師と考えながら改善できるように支援する。 早く作業が終わるために、仲間と応答し協力することが必要であることを理解させ、取り組ませる。	本日の粉砕はそれほどではなかったようであるが、全体的に見ると、作業中に一生懸命取り組みようとする意欲がほとんど感じられない。むしろ、辛い作業から速さで楽をしようと考えているように見受けられる。	
E	・製品の完成までの時間を短縮するように意識して取り組むとともに、大きな声で返事や報告をすることができる。 ・仲間同士の言葉に応えたり、自分から提案したりして、協力して作業に取り組むことができる。	作業の仕上げまでの時間を短縮したり、返事や報告の声の大きさが必要とされる理由などを考えさせながら取り組ませる。仲間からの声かけを待つだけでなく、自分からも声をかけて作業に取り組む理由を教師と考えながら繰り返し取り組ませる。	ようやく「手早く行う」ことに意識を向けることができるような雰囲気を出してきた。しかし、連日、そのような様子を出出できるようにならないといけない。	
F	・他人の作業を気にせず、よそ見をしないで作業に取り組むことができる。 ・仲間同士で声をかけ合い、それに応えながら協力したり、状況を見て作業や後片づけを自分から取り組むことができる。	他人のことよりも自分の作業に意識を持たせて取り組ませる。 いろいろな作業場面において、本人が必要だと判断する作業を教師と一緒に考えながら取り組ませる。	わからないことに対して素直になれないのか、聞かずに取り組む場面は本日に限ったものではない。本人が見て理解する能力が確にあるため、その範囲内では良いだろうが…。それよりもコミュニケーションを取らずに仕事をしている様子は、いかがであろうか？	
G	・体調に影響されずに、最後まで集中して作業に取り組むことができる。 ・仲間同士で言葉をかけ合い、それに応えながら協力して作業に取り組むことができる。	体調の善し悪しで仕事の結果が左右されると、一緒に取り組んでいる仲間がどのように感じるのかを考えさせながら取り組ませる。 仲間と協力して仕事を進めて、効率良い仕事の流れを生み出すことにつながるよう意識させる。	「手が痛い」「足が疲れる」など、いろいろな方法で存在を認めさせるが構わないでいると、そのうちにお喋りをしなくなる。 黙って仕事に取り組むことができる生徒であるので、お喋りをしないで取り組む価値を教えていきたい。	
H	・時間内に多くの仕事ができるように、できるだけ手早く作業をすることができる。 ・仲間同士で言葉をかけ合い、それに応えながら協力して作業に取り組むことができる。	以前の取り組み結果と現在のものを提示して比較させ、自信を深めて取り組ませる。 仲間と応答し合うことが、早く作業が終わるために必要であることを理解させて取り組ませる。	指示された方法や仕方に沿って取り組むことができる反面、意外に間違っ取り組む場面もみられる。	
I	・困ったことやわからないことがあった時には、すぐに相談することができる。 ・仲間同士で声をかけ合い、それに応えながら協力したり、状況を見て作業や後片づけを自分から取り組むことができる。	すぐに相談して、わからない不安を打ち消すことができる経験を繰り返させる。 いろいろな作業場面において、本人が必要だと判断する作業を教師と一緒に考えながら取り組ませる。	今日は意欲的に取り組むことができたが、連日、意欲を見せながら仕事ができないので残念である。気持ちがぶれずに力いっぱい取り組むことが続けば、それが本人自らを奮い立たせる方法になるのだが…。	

資料2

温度…℃湿度…%

新提案

平成26年度産業科2年作業学習（100回目）授業メモ

日 時	平成27年1月29日（木）13：00～14：30	場 所	窯業室	指導者	田中 高橋 小林睦
単 元 名	販売実習に向けて	題 材 名	やすりがけ・鑄込み・成形		
本単元の指導の重点					
指導観点	① 正しい手順や方法で作業を行い、集中力や作業に必要な体力などの基本的な能力を身につけさせる。				◎
	② あいさつ、返事、報告などの作業をするのに必要な基礎となる力を身につけさせながら、仲間と協力して取り組む姿勢を育てる。応対の仕方など基本的な行動様式を育成する。				◎
	③ 健康・安全指導を徹底するとともに、整理整とん、清掃などの習慣を育成する。				○
	④ 生産から販売、納品までの流通過程の学習を通し、流通の仕組みを体験させ、働く喜びや意欲の向上を図る。				○
	⑤ 「作業強化日」「現場実習」を通し、自ら課題を理解するとともに、課題解決への意欲を高める。				
	⑥ 販売学習を通し、実践的な態度や勤労意欲を育成する。				
本時の目標	①成形、やすりがけ、泥しょう作りなどの作業に最後まで集中して取り組むことができる。 ②仲間の存在を意識しながら、その仕事ぶりに合った行動をするなど、常に協力して作業に取り組むことができる。				
時 刻	学 習 活 動			教材・教具	
13：00	<始業前準備> ・入室、道具準備、身だしなみの最終確認 <始業> ・始業の挨拶、田中先生より作業内容と分担、目標の確認、次に他の先生方から何かあれば一言			<生徒服装・持ち物> ・作業服、エプロン、タオル ・作業日誌ファイル ・メモ帳（必要な者のみ） ・筆記用具	
13：10	<作業開始> <やすりがけ> 作業室1 ※田中先生 C・・・長皿（黒土） <鑄込み> ※田中先生 F・・・丸小鉢・六角小鉢・丸皿・湯呑み <成形> ※ 田中先生 高橋先生 小林睦先生 A・・・八角皿（白土） B・・・コーヒークップ（白土） G・・・茶碗（赤土） E・・・カフェオレカップ（白土） D H I・・・プレート皿（白土） <清掃> 25分で完了するように、協力して取り組ませる。				
13：55					
14：20	<反省・終業> 田中先生から → 高橋先生 → 小林睦先生				

記録

A	八角皿を2枚完成させる。2枚とも丁寧で、集中力も続いていた。効率よく時間を使っており、隙間の時間で使わない道具を拭いたりするなど、常に考えて行動していた。返事などは気を抜いてしまう時があり、勿体ない。	F	前回はずした鑄込み製品を修正するが、時間を要する。取り組み具合を見ている指導者と視線が合った時には、指先で指し示して確認する仕草をして取り組みを繰り返す動作が見られる。けっして怠けているのを隠す動きではないが、何か不自然に見える。
B	途中経過のカップが柔らかく、乾燥させている間に別のカップを最初から作り始める。何度か板が入らないと苦戦していたが2個を完成させた。コツも掴んでおり、上から下にかけて力を抜いて行くようボウズを滑らせるという工夫をしていた。	G	側部分の高さ(80mm 以上)を意識して作り始め、深さ(65mm 以上)と直径(120～130mm)を意識しながら仕上げていく。ここ3回ほど、同じサイズで仕上げる事ができている。口縁を切り取る際、切針の深さが不十分だったために苦戦したが、何とか修正して仕上げた。
C	掃除の時にモップを絞ろうとしたが人手が足りず困っていたものの、隣にいたBのやり方を見て自分から真似しようとする場面があった。自分にはできないと判断してすぐに小松Tに「持ってください」と言えたのはかなりの進歩。	H	(実習中)
D	報告や返事など、声の大きさに関して「悪い」とはいえない。動きの面でも悪い箇所は目立たないが、次週から実習に出る人間の働きぶりには見えない。「実習先から良い評価をもらおう」と考えていないような感じがする。	I	(欠席)
E	1個完成。トースカンで上部を切り取る際にぶれてしまい、そこから立て続けにミスを起こす。しかし、本人納得いかない出来だと言うものの、作品自体は持ち直しており綺麗な仕上がり。声の大きさなどとても良い。		

前時・平成27年 1月28日(水)の記録・評価 【単元：販売実習に向けて】

		目 標	手立て	記録・評価	備考
A	作業	製作では最後まで丁寧に 作業中は最後まで集中して	・言葉がけして意識させる ・なごませる言葉をかけて気づかせる	作業までから3枚以上作ると言っていたとおりの作り上げ ることができた。	
	態度	言葉をかけ合って協力する	・言葉がけの必要性を伝える	仲間を軽視(?)する様子が見られる。考え方が少し変 化してきているのだろうか。	
B	作業	将来の生活を思い描きながら、 作業の終了まで全力で取り組む	・言葉がけして自立した姿を意識させる	毎回意識していたであろう「側板が少し傾いたコーヒ ーカップ」に見られる製品を作りだした。	
	態度	アドバイスや支えるなど援助す ることができる 互いに協力して作業を進める	・仲間と協力するよう言葉がけする	体調が悪い中でも、力を抜かず最後までしっかりと取 り組むことができた。	
C	作業	作業を成し遂げるために必要な 自分の課題を意識しながら	・課題や注意点を示す ・メモさせる	理解不足もあり、やすりがけの方向を間違えた。しかし、 落ち込まずに次に指示された部分をかけ続けた。	
	態度	仲間に言葉をかけ合いながら 状況を判断して取り組む	・判断するヒントを与える ・うまくできたらほめる		
D	作業	常に丁寧に 作業場に合った声量や明るさで 返事や報告	・声量や明るさが不適切な時は指導	指押しの線が太いまである。押し込む力量と回数が不 足している。	
	態度	誰とでも言葉をかけ合って協力 効率よく作業に取り組む	・常に言葉がけして意識させる	板伸ばしの場面、手早さが少し見られている。実習へ出 る直前の気持ちの表れであろうか。	
E	作業	正確に手早く取り組む 作業場に合った声の大きさや明 るさで返事や報告	・目標の時刻を設定する ・常に言葉がけして意識させる		
	態度	誰とでも言葉をかけ合って協力 効率よく作業に取り組む	・不適切時は例示しながら指導	周囲の動きと実習へ行く意識のため、自分の仕事がおろ そかになっていた。後半は持ち直していたが・・・。	
F	作業	指示内容を正しく理解 不確実には再確認をしながら	・正しく理解したかどうか確認する ・不適切時は指導	比較的、手早さはない。コンテナに保管している修正前 の製品を一番奥から取り出して修正しようとして制止さ れ、一番手前の製品を不平なく修正し始める。	
	態度	仲間に言葉をかけ合いながら 状況を判断して取り組む	・言い方や表情が不適切なときは例示し ながら指導	取り組んだ作業種の結果を聞かれるまで報告しない。ダ メな面が見られ続けているので、そんなことではいけな いという指示には、元氣よく「ハイ！」。	
G	作業	体調や気分に関わらず 最後まで気持ちを集中させる	・言葉がけして意識させる ・できた時はほめる	一時、手に負えるかどうかギリギリの場面ではアピール は見られなかったが、今は「なんとか乗り切れる」状況 なので、そこからくる気持ちの高まりなのではないか？	
	態度	誰とでも言葉をかけ合って協力 効率よく作業に取り組む	・効果ある言葉をかけた時はほめる		
H	作業	手早く正確に取り組む 返事や報告は適度な間隔で	・常に言葉がけして意識させる ・できた時はほめる		実習中
	態度	仲間に言葉をかけ合いながら 状況を判断して取り組む	・言葉がけがたりないなど、不適切な時は 例示して指導		
I	作業	困った時やわからない場面で は、すぐに相談する	・メモさせる ・正しく対応できたときはほめる	安定してほぼ正確な製品を作り出すことができている。	
	態度	仲間に言葉をかけ合いながら 状況を判断して取り組む	・言葉がけがたりないなど、不適切な時は 例示して指導	状況の変化にも揺さぶられることなく、仕事に取り組む ことができていた。	
前時の 目標		① 最後まで集中してやすりがけ作業を続けたり、新たな製品の成形工程を覚えることができる。＜授業者評価：○＞ ② 仲間の存在を意識しながら、その仕事ぶりに合った行動をするなど、常に協力して作業に取り組むことができる。＜授業者評価：△＞			

資料 3

3 学年 農業科作業学習 略案 (78 回目)

日 時： 平成 25 年 12 月 10 日 (火) 5～6 校時

場 所： 農場やハウス周辺

指導者： 近藤(MT) 後藤 T 早坂 T

農業科指導の重点 (平成 25 年度)・本時の重点ポイント (最重点◎、重点○)

(1)	(1) 自立に必要な基礎的学力や社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身に付ける。(知識・技術)
(2)	(2) 栽培から販売までの過程を学習することを通じ、やりがいや生きがいを見だし実践的な労働意欲を高める。(職業)
(3)	(3) 整理・整頓・清掃の生活習慣を身に付けるとともに、健康・安全に気を付ける。(心と体)
(4)	(4) 姿勢の保持、集中力、持続力、集団行動などの基本的作業態度を身に付ける。(職業)
○ (5)	(5) 「作業強化日」「現場実習」を通して自己の課題を理解し、卒業後の職業自立に向けて自ら課題解決をしようと努力する姿勢を身に付ける。(自己内省)
◎ (6)	(6) 様々な作業体験を通して自己の理解力を高め、卒業後の職業生活への見通しを持たせ、自立への興味・関心を持つ。(自己理解)
○ (7)	(7) ホームルームや他教科との連携を図りながら、社会人として必要なコミュニケーションの取り方を身に付ける。(コミュニケーション)

本時の活動：来年度・販売活動の準備

本時の目標：自分の仕事に責任を持ち、基本的な働く力が身についているかを意識しながら取り組む (4 & 6)
：個々の課題が達成できるように努力する (5)

本時の展開

配時	指導内容	学習活動	教材教具・留意点
5 分 (13:00)	集合・内容確認	・班長の号令 ・本時の作業内容と目標の確認。	
80 分 (13:05)	ハウス片付け 校内向け販売会準備	・ハウス片付け A、C、D、F ・校内向け販売会準備 B、G、H 予定していた作業が終わった場合には、担当の先生に報告し、指示を あおぐ。 ・作業場の後片付けを協力して行う	各鉢花、草花灌水は最初 に各自行う。
5 分 (14:25)	集合・反省	・班長の号令 ・本時の振り返りと反省	作業日誌は、帰りま でに提出

評価の観点

○自分の仕事に責任を持ち、基本的な働く力が身についているかを意識しながら取り組むことができたか (4 & 6)

○個々の課題が達成できるように努力することができたか (5)

授業記録 指導重点(4&6)→(Δ) (5)→(Δ)

出来るだけ最初の説明で、極力説明を少なくして取り組ませている。

個別記録 (個別指導計画後期目標)

A	・周囲の状況を「見て・話しをして」確認し、手早くいいいに作業を進めることができる。 評価の観点(4&6)→(○) (5)→(○)	E	・見通しをもち、粘り強く最後まで集中して作業に取り組むことができる。 評価の観点(4&6)→() (5)→()
	1つ1ついいいに作業を進めていた。友達から何をしたらよいか?の質問にも的確に答えていた。		特別指導中(欠席)
B	・作業内容や工程を自分で確認しながら、一つ一ついいいに取り組むことができる。 ・移動時は小走りを意識する。評価の観点(4&6)→(×) (5)→(Δ)	F	・周囲の状況を見ながら自分の考えを的確に伝え、手早く適切に作業を進めることができる。 評価の観点(4&6)→(○) (5)→(Δ)
	自分の担当でない花のせい、いま 1 つ灌水の注意が足りず「ちょっと水をあげました」など理解不能な行動になる。雨が降っているのに、外に花を置きっぱなしにする。		時間と友達を気遣う様子が常にあった。灌水は一人で根気よく取り組んでいた。
C	・作業内容や工程を自分で確認しながら、一つ一ついいいに取り組むことができる。 評価の観点(4&6)→(Δ) (5)→(Δ)	G	・作業内容をしっかりと理解し、いいいに手早く作業することができる。 ・自己確認をどんな場面でも行うことができる。評価の観点(4&6)→(Δ) (5)→(Δ)
	とりあえずみんなと同じ行動をしておけばいいかなという感じで、自ら考えて動こうという意思はみられない。		レジ練では緊張してしまい作業中だがトイレに行きたいと申し出てきた。レジ練はすぐに操作を理解出来た。
D	・周囲の状況を「見て・話しをして」確認し、手早くいいいに向上心をもって作業を進めることができる。 評価の観点(4&6)→(Δ) (5)→(○)	H	・周囲の状況を「見て、話しをして」確認し、工夫しながら手早くいいいに向上心をもって作業をすすめることができる。評価の観点(4&6)→(Δ) (5)→(Δ)
	みんなをまとめつつ効率の良さを発揮していた。時間の経過とともに雑になる場面もあった。		準備中の友達に対する言葉遣いが乱暴で注意を受ける。他は、場面事に知恵を働かせて活動し、みんなと分担協力できた。

農業科指導の重点(平成26年度)・本時の重点ポイント(最重点◎、重点○)

本時の重点ポイント	(1) 自立に必要な基礎的学力や社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身に付ける。(知識・技術)
	(2) 栽培から販売までの過程を学習することを通じ、やりがいや生きがいを見いだし実践的な労働意欲を高める。(職業)
	(3) 整理・整頓・清掃の生活習慣を身に付けるとともに、健康・安全に気を付ける。(心と体)
	(4) 姿勢の保持、集中力、持続力、集団行動などの基本的作業態度を身に付ける。(職業)
◎	(5) 「作業強化日」「現場実習」を通して自己の課題を理解し、卒業後の職業自立に向けて自ら課題解決をしようと努力する姿勢を身に付ける。(自己内省)
	(6) 様々な作業体験を通して自己の理解力を高め、卒業後の職業生活への見通しを持たせ、自立への興味・関心を持つ。(自己理解)
○	(7) ホームルールや他教科との連携を図りながら、社会人として必要なコミュニケーションの取り方を身に付ける。(コミュニケーション)

本時の活動: 来学期&次年度準備

本時の目標: 将来(自立)を意識しながら、基本的な働く力が身についているかを意識しながら取り組む(5)

: 様々な場面で、適切ななかかわり方でかかわることができる(7)

本時の展開

配時	指導内容	学習活動	備考
5分 (9:05)	・集合 ・内容確認	・班長の号令 ・本時の作業内容と目標確認	
110分 (9:10)	シクラメン灌水 & 手入れ ミニシクラメン灌水 & 手入れ 大掃除	・シクラメン灌水 & 手入れ → 丁寧に、一つ一つ B、E、F ・ミニシクラメン灌水 & 手入れ → 丁寧に、一つ一つ A、C ・大掃除(第三回) 窓など → 丁寧に、一つ一つ D、G 予定していた作業が終わった場合には、担当の先生に報告し指示をあおぐ。 ・作業場の後片付けを協力して行う	各作業終了後 除雪 その後 合同授業 準備
5分 (11:20)	・集合 ・反省	・班長の号令 ・本時の振り返りと反省	作業日誌は、帰りに提出

教師	評価の観点(本時の目標から)	評価	授業記録
	・将来(自立)を意識しながら、基本的な働く力が身についているかを意識しながら取り組むことができた(5)	4	最初に時間の見通しを持たせたことで、クラスとしての動きはスムーズであったが、個に頼って動いている生徒も多い。
	・様々な場面で、適切ななかかわり方でかかわることができた(7)	3	
	個別指導目標と評価の観点		生活習慣形成目標
A	・全体説明されたことを適切に理解して、正確に手早く長時間取り組むことができる。	2	授業記録
	評価の観点(5) (7)	2 3	朝会で除雪をするとかけていたが、軽装で来て、寒さで除雪の動きが鈍かった。終了後、指導を行ったので次回へ期待。
B	・時間と仕事のペースを考えて、効率的に作業に取り組むことができる。	4	授業記録
	・卒業後の就労を意識した、立ち振る舞いができる。	3	除雪の動きそのものは悪くはないが、声出しが少なかつたために、除雪道具をもったままぶつかりそうになる場面があった。
	評価の観点(5) (7)	3 2	
C	・全体説明されたことを適切に理解して、正確に手早く長時間取り組むことができる。	3	授業記録
	評価の観点(5) (7)	3 4	除雪を頑張ろうという意識は高かった。しかし、道具の使い方など、昨年度の経験を活かしていかれていない場面が多くあった。
D	・内容をえり好みせずに、どんな作業にも最後まで取り組むことができる。	3	授業記録
	・仲間と協力して作業に取り組むことができる。	3	説明していないことまで取り組もうとした。その場合、自分の考えが正しいか確認する必要があることを指導する。指導を受け入れる心の変化は感じられる。
	評価の観点(5) (7)	3 3	
E	・時間と仕事のペースを考えて、効率的に作業に取り組むことができる。	3	授業記録
	・卒業後の就労を意識した、立ち振る舞いができる。	4	灌水をする、除雪をするなど、段取りや見通しがある仕事への意欲はすごく高い。しかし、効率や工夫といった面では、弱さが見られる。
	評価の観点(5) (7)	4 3	
F	・全体説明されたことを的確に理解し、説明されたとおりに作業を行うことができる。	4	授業記録
	・卒業後の就労を意識した、立ち振る舞いができる。	3	シクラメンを早く終わらせて除雪という意識が高く、移動なドススムーズな動きができていた。しかし班長としての全体をまとめる時、必ず焦ってしまう。
	評価の観点(5) (7)	3 3	
G	・全体説明されたことを適切に理解し、説明されたとおりに、手早く作業を行うことができる。	2	授業記録
	・移動時は走るなど、時間を意識する。	3	掃除の場面、窓拭きの仕事はガラスのみ拭くなど、日頃の取り組みも含め、経験を重ねさせる、手順を確認振り返らせることが、やはり必要である。
	評価の観点(5) (7)	2 2	
			授業記録
	評価の観点()		

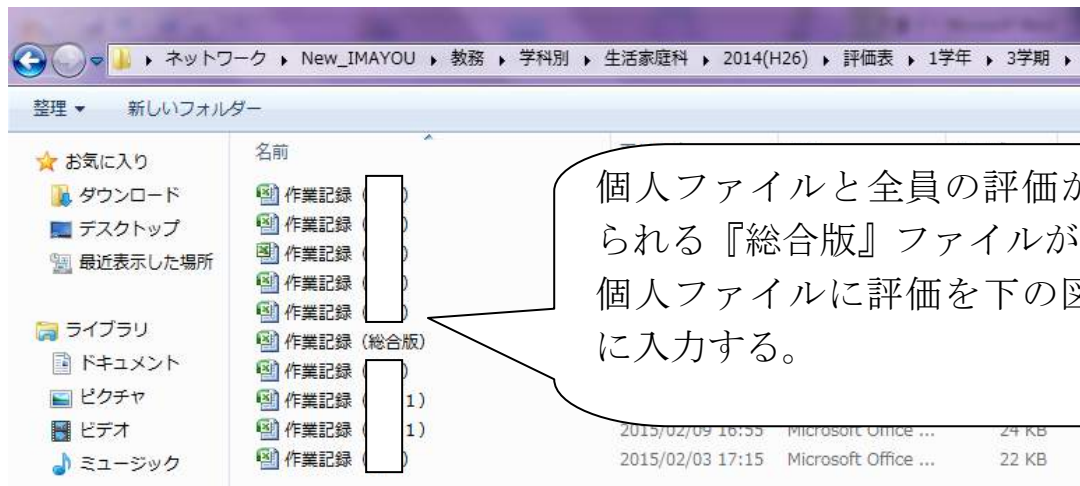
個別目標月別評価(10月) 農業科3年

名前	個別目標	月別評価 (1～5)	記述
A	・全体説明されたことを適切に理解し、説明されたとおりに、手早く作業を行うことができる。		前提実習のため授業は不参加
B	・時間と仕事のペースを考えて、効率的に作業に取り組むことができる。 ・仲間に声をかけ協力することができる。	3.833333333 3.5	実習直前もあり、特にコミュニケーション面の意識が高かった。しかし、コミュニケーション意識が高すぎるのか、スピードへの意識がいまいちだった。
C	・全体説明されたことを適切に理解し、説明されたとおりに、正確に手早く作業を行うことができる。	3	説明されたことに対して、わからないときはその場で聞く姿勢が身についてきた。しかし、他へ説明する場面では言葉足らずで、説明不足。
D	・内容をより好みせずに、どんな作業にも最後まで取り組むことができる ・仲間と協力して作業に取り組むことができる	3.833333333 3.833333333	説明されたこと、指示されたことは冷静に行うことができる。しかし、鉢の手入れなど、仕事の丁寧さに欠けることがあった。
E	・時間と仕事のペースを考えて、効率的に作業に取り組むことができる。 ・仲間に声をかけ協力することができる	3.5 3.5	基本的にはどんな仕事にも積極的に取り組む。しかし、ちよつと気が緩む雰囲気があるとのかかり、自分で修正することができない。
F	・全体説明されたことを的確に理解し、説明されたとおりに作業を行うことができる。 ・仲間に声をかけ協力することができる。	3.333333333 2.833333333	少しずつだが、大まかな指示でも理解できたり聞き直す場面が増えた。しかし、説明された事以外はなかなか頭に入っていない。
G	・全体説明されたことを適切に理解し、説明されたとおりに、手早く作業を行うことができる。	3	基本的にはものぐさ。指示や注意された場面では集中が少し続くが、長くは続かずもとのだれた姿に戻ることが多い。

資料 5

マトリックスとの関連		指導の重点					12月4日	12月5日	12月6日	12月10日	12月11日	12月12日	改善の方向
(1)	職業	縫工、リサイクル、紙造、環境整備等の作業を通して興味関心の幅を広げ生活経験を豊かにすると共に、働くことの意義や喜びを理解する気持ち	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
(2)	自己理解	現場実習・作業強化日などを通して自己の長所を知り課題を理解し、他者から受ける評価を受け入れる気持ちを育てる。	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
(3)	自己内省	働くために必要な態度・習慣・集中力や注意力、課題解決に向けて努力する姿勢を育てる。	△	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
(4)	知識・技術	作業学習や日常生活に必要な基本動作及び巧み動作、協働動作の向上を図ると共に、社会のルールやマナー、礼儀を身につける力を育てる。	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
(5)	知識・技術	安全に作業に取り組めるよう、道具等の取り扱いに気をつける力を育てる。	△	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
(6)	心と体	ホームルームや他教科との連携を図りながら、望ましい生活習慣や健康を維持できる力を育てる。	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
(7)	コミュニケーション	場の状況に応じた挨拶・返事・報告をする力や、必要な支援を他者に求めることができる力を育てる。	〇	〇	△	〇	△	〇	△	〇	△	〇	
		12月4日	12月5日	2013/12/6 紙すき55枚 液体9	2013/12/10 紙すき33枚	12月11日	2013/12/12 紙すき	特記事項					
氏名	石けん作り	石けん削り	紙すき55枚 液体9	紙すき33枚	封筒作り(56枚)	紙すき							
A	目標・どんな作業にも意欲的に取り組む。・同じことでもいろいろなやりかたがあることを知りながら作業に取り組む。	目標・自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言えていた。	準備は削りの後でおいて見ながらやっている。石けん削りは1時間手を休めること1集中してできた。掃除・片付けも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけローラーのかけ方をしっかり理解してスムーズに動いていた。失敗もなく仕上がりがきれいにできていた。返事・報告も大きな声でできた。	手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言うと次は言った通りにできていた。報告はしっかりで	ローラーかけ							
氏名	出停	出停	出停	出停	出停	出停							
B	目標・丁寧さと手早さを意識して取り組む。・作業と集中力を発揮して作業を早く終わらせることができる。	目標・自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言えていた。	準備は削りの後でおいて見ながらやっている。石けん削りは1時間手を休めること1集中してできた。掃除・片付けも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけローラーのかけ方をしっかり理解してスムーズに動いていた。失敗もなく仕上がりがきれいにできていた。返事・報告も大きな声でできた。	手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言うと次は言った通りにできていた。報告はしっかりで	ローラーかけ							
氏名	石けん作り	紙すき	紙すき	紙すき	紙すき	紙すき							
C	目標・自分の作業を早く終わらせる。・作業と集中力を発揮して作業を早く終わらせる。	目標・自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言えていた。	準備は削りの後でおいて見ながらやっている。石けん削りは1時間手を休めること1集中してできた。掃除・片付けも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけローラーのかけ方をしっかり理解してスムーズに動いていた。失敗もなく仕上がりがきれいにできていた。返事・報告も大きな声でできた。	手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言うと次は言った通りにできていた。報告はしっかりで	ローラーかけ							
氏名	出停	出停	出停	出停	出停	出停							
D	目標・自分の作業を早く終わらせる。・作業と集中力を発揮して作業を早く終わらせる。	目標・自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言えていた。	準備は削りの後でおいて見ながらやっている。石けん削りは1時間手を休めること1集中してできた。掃除・片付けも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけローラーのかけ方をしっかり理解してスムーズに動いていた。失敗もなく仕上がりがきれいにできていた。返事・報告も大きな声でできた。	手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言うと次は言った通りにできていた。報告はしっかりで	ローラーかけ							
氏名	石けん作り	紙すき	紙すき	紙すき	紙すき	紙すき							
E	目標・自分の作業を早く終わらせる。・作業と集中力を発揮して作業を早く終わらせる。	目標・自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言えていた。	準備は削りの後でおいて見ながらやっている。石けん削りは1時間手を休めること1集中してできた。掃除・片付けも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけローラーのかけ方をしっかり理解してスムーズに動いていた。失敗もなく仕上がりがきれいにできていた。返事・報告も大きな声でできた。	手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言うと次は言った通りにできていた。報告はしっかりで	ローラーかけ							
氏名	出停	出停	出停	出停	出停	出停							
F	目標・自分の作業を早く終わらせる。・作業と集中力を発揮して作業を早く終わらせる。	目標・自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言えていた。	準備は削りの後でおいて見ながらやっている。石けん削りは1時間手を休めること1集中してできた。掃除・片付けも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけローラーのかけ方をしっかり理解してスムーズに動いていた。失敗もなく仕上がりがきれいにできていた。返事・報告も大きな声でできた。	手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言うと次は言った通りにできていた。報告はしっかりで	ローラーかけ							
氏名	石けん作り	紙すき	紙すき	紙すき	紙すき	紙すき							
G	目標・自分の作業を早く終わらせる。・作業と集中力を発揮して作業を早く終わらせる。	目標・自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言えていた。	準備は削りの後でおいて見ながらやっている。石けん削りは1時間手を休めること1集中してできた。掃除・片付けも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけローラーのかけ方をしっかり理解してスムーズに動いていた。失敗もなく仕上がりがきれいにできていた。返事・報告も大きな声でできた。	手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言うと次は言った通りにできていた。報告はしっかりで	ローラーかけ							
氏名	出停	出停	出停	出停	出停	出停							
H	目標・自分の作業を早く終わらせる。・作業と集中力を発揮して作業を早く終わらせる。	目標・自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言えていた。	準備は削りの後でおいて見ながらやっている。石けん削りは1時間手を休めること1集中してできた。掃除・片付けも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけローラーのかけ方をしっかり理解してスムーズに動いていた。失敗もなく仕上がりがきれいにできていた。返事・報告も大きな声でできた。	手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言うと次は言った通りにできていた。報告はしっかりで	ローラーかけ							

新しい様式

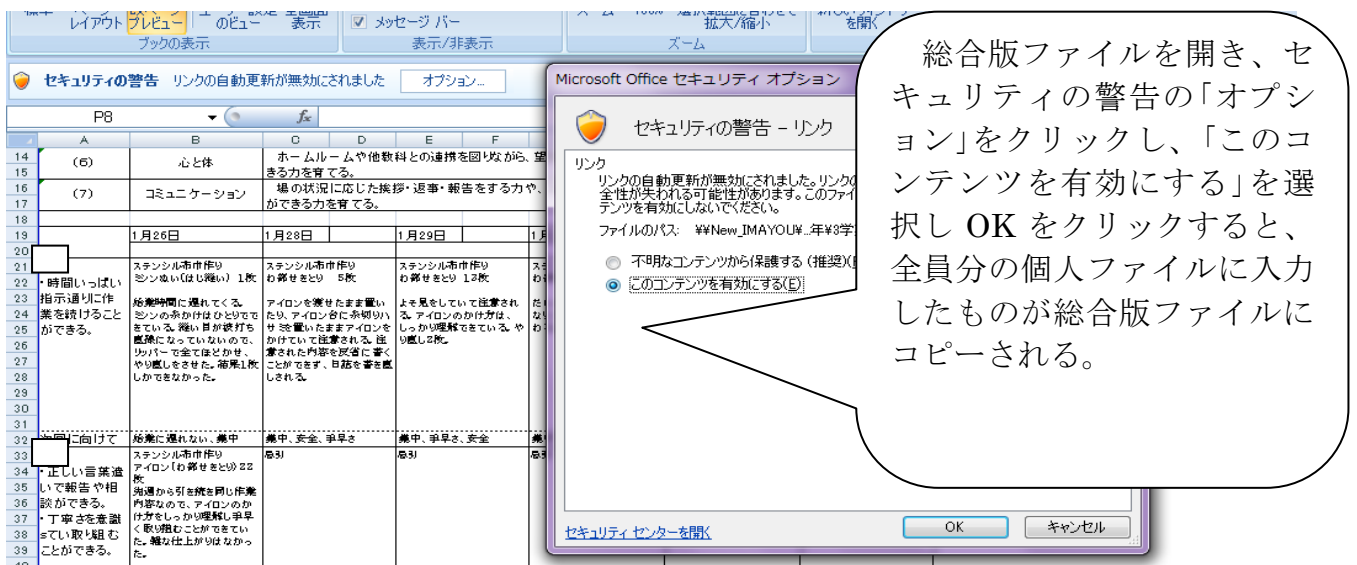


- ・個別のファイル(個別の指導目標を記載)

[illegible]

- ・総合版ファイル

本時での様子を踏まえ、次時で重点的に指導することを入力する。



44

4 成果と課題

今年度の課題研究は、昨年度と同様に授業を担当する指導者チームを中心として、キャリア教育の観点から授業づくりを行っていくことに焦点を当てた。生活単元学習と作業学習において、これまでの授業・指導をマトリックスに照らし合わせ、また昨年度までの研究の成果と課題を踏まえ、学校教育目標を達成するための具体的な授業実践が成されることを目指した。

生活単元学習部会の研究では、マトリックスの各学年段階・各指導観点における教育方針も踏まえた上で、「心とからだの学習」単元において生徒に身につけさせたい力を各学年段階にまとめた「指導段階表」を昨年度完成させた。今年度はこの指導段階表を用いた研究授業を行い、指導段階表の中身が適切であるかどうかを検証した。おおむね適正であり、授業の計画がしやすくなったという成果もあった。こうしてマトリックスを活用できている側面がある一方で、使いにくいという声もあった。昨年度からマトリックスの生かし方がよくわからないという意見が出されていたが、具体的には次のとおりであった。

- ・マトリックスは指導者の目標であるため、生徒視点で目標が記載される単元計画や指導案にマトリックスの文言を入れることは困難である。
- ・指導者の目標であるマトリックスを用いて年間指導計画を立て、前期・年度末評価を行うことで授業改善へとつなげることはできる。
- ・しかし、観点と指導内容が結びつかないものがある。また、学年が上がるにつれて観点的文言が具体的になるため、評価が難しくなる。

一方、作業学習部会の研究では、こうした声は一切聞かれない。昨年度から続く各学科における評価様式の見直し、これに付随して学習指導略案の様式の見直しも一層進め、より生徒の実態に即したキャリア発達を促す効果的な指導を実践することを目指した。学科経営案の「指導の重点」がマトリックスの観点で立てられていることから、この指導者側の目標をもとに単元や作業内容、題材を工夫することができている。さらに生徒の変化にきめ細かく気づくことができるような日々の記録と合わせることで、PDCA サイクルによるよりよい授業づくりが機能してきた。これは、この2年間の大きな成果と言える。

このように、両部会とも「これまでの授業・指導をマトリックスに照らし合わせ、よりよい授業づくりをする」ことを目指していたにもかかわらず、マトリックスの使いやすさの認識は両部会で異なるものとなった。このことについて、マトリックス作成当時の研究推進委員会メンバーと生活単元学習部会で12月に話し合いを設けた結果、主に出された見解は次のとおりであった。

- ① マトリックスの位置づけの共通理解が成されていない
- ② マトリックスの使い方が明確に打ち出されればよい
- ③ 生活単元学習や作業学習以外の授業も、マトリックスの観点を踏まえて作りたいが、それを検証していない状況で、マトリックスの位置づけを固めてしまっているのか

①については、第6次研究を開始する時点で位置づけを打ち出している（第1章2の(5)図3「目標への道」のイメージや、資料2のマトリックスそのものを参照）。しかし、これが不十分であったほか、研究を進めるうちに③のような疑問も生じてきた。マトリックスを作成した当時の研

究推進委員会では、あらゆる学校教育場面において指導の指針とすべきものとして作成を進め、そうした理解のもと各学年・学科でも検証を重ね、完成に至ったものである。しかし、本当に全ての授業場面において適正な指針として機能するものかどうかを検証することは、完成から2年が経過した現在も十分とは言えない。今後見直す可能性が十分あることから「試案」としているが、こうした状況ではいつまでも「試案」のままであり、「〇〇年度版」という格好にできないだろう。これを打開すべきと言わなければならない、②のような要望が昨年度から続いている。マトリックスと普段の教育活動やそのねらいがどのように結びついているのか明確に示されたものがなく、マトリックスのどの部分を意識してどの授業で何を指導するかという基準は個人あるいは一部指導者間のイメージに頼るところなのが現状である。よって、マトリックスの使い方そのものに混乱が生じているのである。

さらに、今年度から「指導内容表」についての意見も目立つようになった。平成21～22年度のプロジェクト研究で整理されたものだが、生徒の実態の変化により内容に不足が生じている、またマトリックスとの関連が一切議論されていないなどの指摘があった。このことについても、①～③とともに、同時並行的に議論を進める必要があるだろう。

このように、第6次研究終盤という時期に遅ればせながらも、様々な問題点に気づくことができたのは成果とも言える。しかし、具体的な解決策や対案を出すことはできなかった。このことも踏まえ、今後の本校の在り方に関わる次のような大きな課題が浮き彫りになったとも言えるだろう。

- ・学校教育目標、マトリックス、指導内容表をはじめ、様々な目標や計画を「教育課程」という大きな視点からも見つめ直し、関係性を明らかにし、日々の実践の改善につなげること
- ・そのために必要な研究と修養を職員一人一人が積み重ね、論理的・建設的な議論を進められるようになること
- ・物事（研究や各授業など）を行う理由やその計画などを確実に共通理解し、組織的にそれを進めること

ちなみに、今年度の1学年の総合的な学習の時間では、①～③についての議論を自然と行っていた。研究として取り組んだものではないが、年間指導計画（単元構成）や単元・授業の計画、指導の在り方など様々な見直しを行ったことで、実質的に検証・検討を行うことにもなったのである。単元計画作成時にマトリックスの観点の中から重点的に指導したい要素を抜き出し、それをもとに単元目標を立て、授業づくりを行った（詳しくは別冊『キャリア教育のすすめ』p32～33を参照）。1つの単元を考えるにあたって、マトリックスの観点の中から重点的に抜き出すところはどこが適切なのか、生徒の実態は踏まえているか、題材や指導内容はこれらに合ったものかなど、様々な要素を並べて複合的に考え、単元計画を立てることは大変な作業だった。しかし、指導担当者全員で協議・共通理解しながら計画を完成させ、指導し、どの単元でもこれらが不十分だったという反省は残らなかった。しかし、学校全体としてこの結果を検証・議論するには至っていない。

こうした動きが国語や数学など他の教科、あるいは領域・教科を合わせた指導においても行われ、学校全体としてこれを検証・議論することが理想ではないだろうか。その過程において、マトリックスを見直す必要性についての具体的な理由と改訂案が出され、マトリックスの使い方や位置づけについても次第に明確となり、結果として「〇〇年度版マトリックス」に基づいた今養版キャリア教育が本格的に機能し始めることになるだろう。

第3章

プロジェクト研究

1 プロジェクト研究（教育課程検討委員会）

研究主題

キャリア教育の視点を通した「教育課程（週時程表等）の見直し」

～今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した研究～

（1） 研究の概要

①設定理由

昨年度のプロジェクト研究でワーキンググループ（学年・学科・その他の3班）が分担しキャリア教育の視点を通した「教育課程（行事）の見直し」を行うことができた。そこで、今年度はそれぞれの行事について話し合われたことを踏まえ行事を推進していく。

今年度は昨年度と同様にキャリア教育の視点を通した「教育課程（週時程表等）の見直し」を行っていくこととした。開校当初とは生徒の実態も変わり、現在の生徒の状況に合わせた教育課程にすることが必要と考える。また、近年の生徒の実態を踏まえて作成された「今養版キャリアプランニングマトリックス」に沿って見直しを進めることで、「学科ごとに取り組む作業学習が中心で、勤労の体験を豊かにし、職業自立など社会自立に必要な基礎的、基本的な能力を高め、実践的な態度を育成する」という高等養護学校の教育内容に沿った教育課程やカリキュラムを作り上げることができるのではないかと考える。このような考えから、本主題を設定した。

②研究の内容と方法

- 研究組織は教育課程検討委員会とする。
- カリキュラムに関するアンケートを実施して単位時間や時間割の配列、各教科の課題や在り方などの調査を行う。その結果を教育課程検討委員会で検討し、その後職員全体会議を設定しキャリア教育の視点を通して「教育課程（週時程表等）の見直し」を行う。
- 全体会議で出された意見を教育課程検討委員会が再度精査して、全体会議で報告し、共有、意見交換をする。提案され決定した部分について関係部署は、平成26年度内にその決定事項を検討して課題解決に努めるとともに平成27年度には改善させるものとする。なお、平成26年度内に改善可能なものについては改善を進めるものとする。

③推進日程

平成26年 9月19日	第1回教育課程検討委員会：アンケート内容確認
平成26年10月 7日	アンケート集約（全教職員対象）
平成26年11月 7日	第1回教育課程全体会議：アンケート集計結果報告
平成26年11月28日	第2回教育課程全体会議：アンケートによる原案提示、協議
平成26年12月 4日	第2回教育課程検討委員会
平成26年12月12日	第3回教育課程全体会議：意見交換
平成26年12月24日	第3回教育課程検討委員会
平成26年12月25日	第4回教育課程全体会議：意見交換、協議
平成27年 1月21日	第4回教育課程検討委員会

平成 27 年 1 月 23 日 職員会議：次年度に向けた方向性を提示
平成 27 年 2 月 13 日 全体研修（校内研究報告会）

（２） 研究のまとめ

アンケートを実施するに当たり、項目が 15 項目と多岐にわたっていたが忌憚のない意見を頂いた。集計結果を全体会議へ提示し、本校の教育課程をどうしていくことがベストなのかを協議を繰り返し、意見を集約していった。方向性、協議した結果等を後頁に参考資料として掲載しているため、ご確認願いたい。

（３） 成果と課題

まずは、本プロジェクト研究のためのアンケート、全体会議への積極的な参加に感謝を申し上げます。本校では、前年度のキャリア教育の視点を通して教育課程（行事）の見直しに続き、教育課程（週時程表等）の見直しの研究を進めることができた。単位時間や課題学習、生活単元学習の題材配列や内容、作業学習の時数など問題点や改善点はあがったが、見直しまでにはいたっていなかった。職員それぞれの意見をアンケート形式で集約することで、それぞれが抱えている疑問、課題を再認識することができた。生徒の実態や卒業生の状況を踏まえ、教育課程を改めるという意見が多く、実際に協議を繰り返しながらよりよい教育課程にするために話し合いを実施することができた。

平成 26 年度内に見直せる部分は各担当部署で見直し、次年度から可能な範囲で運用し、キャリア教育の視点から教育課程の課題解決に努めるとともに平成 28 年度には決定事項をスムーズに運用できることを期待する。

（４） 資料

- ① キャリア教育の視点を通した「教育課程（カリキュラム・週時程表）の見直し」に係るアンケート
- ② アンケート集計結果
- ③ 教育課程全体会議 1 議事録
- ④ 教育課程全体会議 2 議事録
- ⑤ 教育課程全体会議 3 議事録
- ⑥ 教育課程全体会議 4 議事録
- ⑦ 週時程表（案）

キャリア教育の視点を通した「教育課程（カリキュラム・週時程表）の見直し」に係るアンケート

教育課程検討委員会：金子

今年度のプロジェクト研究は、教育課程検討委員会がキャリア教育の視点から「教育課程（カリキュラム・週時程表）の見直し」を行います。そこで、色々な反省が挙げられておりますが、それ以外にも具体的にカリキュラム・週時程表のどういう点に課題があるのかを委員会で再度調査して討議を進めたいと考えています。つきましては、忌憚のない意見、感想、今金高等養護学校がどう変わっていけばよいかなど、生徒の実態や最近の情勢なども踏まえつつお答えください。また、28年度に道南に1間口増となります。今金か五稜郭が1間口増えます。もしかしたら今金が増えるかもしれないということも頭に置きながら考えてみてください。他校の週時程表（貼付）も参考にしてください。よろしくお願いします。

締切：10月7日（火）全員提出をお願いします。

記入者名（ ）

1. 運用時間45分について（本来は50分）
中標津、今金45分：豊明、白樺40分
後の学校は50分授業（併設高等部も50分）
臨時休校になった場合、1050時間を下回る可能性有り。このまま45分でよいか、50分に変更するか。中学校の授業は50分

具体的にどういう点に課題（メリット・デメリット）があると思いますか？

（ ）

それはどのように改善したらよいと思いますか？

（ ）

2. 国語・数学が1時間しか無く削られることが多いことについて。課題学習のあり方について。

具体的にどういう点に課題（メリット・デメリット）があると思いますか？

（ ）

それはどのように改善したらよいと思いますか？

（ ）

3. 作業の時数について

1, 2年10時間、3年11時間実施。本校3年間で1100単位時間以上実施している。
（学習指導要領には875単位時間以上）

具体的にどういう点に課題（メリット・デメリット）があると思いますか？

（ ）

それはどのように改善したらよいと思いますか？

（ ）

4. **体力づくりのあり方。毎日帯であることの必要性について。**

具体的にどのような点に課題（メリット・デメリット）があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

5. **「情報」の必要性について
パソコン能力の向上。事務的な就職先も視野に入れたらすべき？現場実習や教育相談でも話題になっています。**

具体的にどのような点に課題（メリット・デメリット）があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

6. **「キャリア学習」「進路学習」について
1学年は総合を進路学習として行っている
新篠津も「作業」を週1時間「キャリア」として行っている。「職業」という教科の兼ね合いも考えながら取り入れるべきか？**

具体的にどのような点に課題（メリット・デメリット）があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

7. **「生単」について：単元配列、内容の精査
上記（6）との兼ね合いを考えながら。**

具体的にどのような点に課題（メリット・デメリット）があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

8. **学科転換、学科増について
28年度に間口増になる可能性有り**

具体的にどのような点に課題（メリット・デメリット）があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

9. **教科学習（新設校は教科でカリキュラムを組んでいる）の必要性について：週時程表を参考にしてください。**

国数社理英音美体家職情道総 作業

具体的にどのような点に課題があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

10. 学力検査を実施している学校が数校ある
千歳、鶴野、五稜郭、紋別で実施
教科学習の学校で実施し、試験は到達度を測
るために実施しているとのこと。本校での必
要性は？

具体的にどのような点に課題があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

11. 「自立活動」のおさえについて

具体的にどのような点に課題があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

12. 「委員会活動」について

水曜日の7時間目の扱いは今のままでよい
か？LHRの中に全校集会を含めることも可
能、委員会をやっていない学校もある。

具体的にどのような点に課題があると思いますか？

()

それはどのように改善したらよいと思いますか？

()

13. その他に何か気がつく点があればご記入くだ
さい。今金高等養護学校がこうなって欲しい、
こうなればよいなどの視点で。

()

()

14. 教育課程全般についてご意見・ご要望があれ
ばお書きください

()

()

()

ご協力、ありがとうございました

アンケートのデータは、「いまようローカル→共
有フォルダー→教育課程委員会」の中にあります。
データの場合は名前を付けて保存してください。
よろしく願います。用紙がよい場合は、直接
金子に提出してください。

回答者 寄宿舍指導員 14名 養護教諭 2名 栄養教諭 1名 介護員 1名 実習助手 6名 教諭 32名 計 56名

1

「学校としての方向性を管理職にゆだねる」 1

○管理職の考えでよい

「50分に変更」 23

理由

○50分がよい。

○今後のことを考え、臨時休校になったことを考えると変更した方がよい。

○本来50分であるなら50分授業がよいと思います。

◎基本が50分なら50分で良いと思う。(バス通学の生徒の通学時間が大丈夫か?)

○卒業後、長時間働くことを考えると、50分の設定がよい。なぜ45分授業で行っているのか知りたい。

◎職員の勤務時間の変更が可能なら、本来50分ならその方がよい。

○学習する幅が広がり、余裕を持った授業作りができる(時間変更が可能なら。寄宿舍との連携。)

○50分は高校でも普通だと思います。(1時間目の開始時間を早める。)

○前任校で45分授業だったときインフルエンザで学校閉鎖になり時数の補填に苦労したことがあり50分の方が良い。(休み時間を無くす。1校時を35分(0,7コマ)とするなど対応し、給食と金曜日の下校時間をなるべく変わらないようにする。)

○本来50分なら50分にして良い。(今まで45分に慣れている在校生に対してどのように変更を伝えるかが心配。全校集会やHRで説明する機会が必要。)

○50分が正規ならば、50分に変えたほうがよい。(必要に応じて生徒に説明。)

○本来の形(50分)であることが望ましい(休み時間が無くなる、移動時間やトイレ時間の確保が難しくなる。)

○中学から進学してきて、授業時間が減るのは違和感を感じる。

◎寄宿舍の日課変更など対応が可能ならば50分。

○50分にしていこう。(45分でも休み時間が無く早めに終わる現状。やりたいことが限られてしまう。)

○50分対応にしてもらいたい。(卒業後の働く時間を考えると必要なこと。寄宿舍、通学生のバス時間で可能な範囲で対応するのがよい。)

○生徒に合わせた時間設定がなされれば50分にしても問題はないかと思います。また、先に変更を行った学校の状況を知り参考にできればよいかと考えます。(放課後及び余暇活動に影響してくるのではないのでしょうか。また、新入生からでなく在校生も同時に変更されるのであれば突然日課が変わるので戸惑う事もあると思います。)

○生徒への大きな影響はないと考えます。生徒への教育的効果が望めるものであれば、50分に変更しても良いと思います。

○臨時休校になった場合(仮定)ですので、当然、長期休業をつぶして授業をしなければならなくなると思います(デメリット)。上記のようなデメリットを改善するために、運用時間を50分にすると思います。会議等の開始時刻が遅くなりますが、覚悟の上です。

○50分にし、登校が早まったり、下校が遅くなってもいいので、授業合間のせめてもの5分程度の準

備時間があるとよい。(ただし、作業学習の授業などは連続で行うなどにする) 休憩時間が確保できるかどうか。

○50分単位にすべき。教育課程編成届けの計算がややこしくなる。

○臨時休校になった場合の対応(3年生が特に心配なため50分に。)

○50分へ(下回るのはよくない。)

「45～50分」6

理由

△授業でできること、教えられることが増える。(1集中力を持続させ要点をまとめて教える技術が必要。2帰省帰舎への影響が出る。3休み時間の確保。 が解消されるなら50分にしても良い。)

△2・3時間続きの授業となると生徒の集中力が続かなくなる(授業作りの工夫や集中力が続くような言葉がけ等の支援が必要。)

△7時間目の対応。他校のように自主的な活動に位置づける、放課後の活動になり委員会活動が衰退していくと思う。(評価をするということであれば、今まで通り時間割に組み込めたら組み込む。)

△生徒達の現状に合わせた設定ができればよい。

△中学校と同じように過ごせるが、職員の勤務時間にいろいろ不具合が出る。

△生徒の実態に合わせた時間設定がよい。

「今まで通り45分」12

理由

□現状で特に問題ない(45分)×3

□50分になると長く感じ、始めから生徒のスイッチが入らない。

□50分が正規ではあるが、授業は45分の方がやりやすい。

□45分でも集中できていなさそうなのに5分延ばす意味はあるのか?

□生徒の集中力を考えると45分がよい。

□45分は生徒の集中時間には適当。

□授業を行う上で、45分という時間は特に問題ないと考えます。しかし、授業の間に空き時間がなく生徒にメリハリの指導を行う場面が少ないと考えます。

□生徒に時間を意識させ、早め早めの行動で時間を確保する意識が求められる。現行の運用で特に問題はないが、休み時間を確保させたい。(そのためには、始業時間を守る、時間内に授業を終えるなど教師が見本を見せる必要がある。また、できるなら更衣の時間を確保して授業を終わらせたい。(特に午前中の作業の後など。)

□生徒の集中力や休み時間の確保を考えたら、現状維持でよいと思います。

□45分で良い(休み時間、トイレ休憩を設ける、集中が続くのは15。)

「記入なし」14

「今まで通り」 1

理由

◎生活に必要な最低限度の基礎的なことは教える必要がある。(これまで通りでよい。)

「疑問」 3

理由

☐週1で生活するために必要な力を付けてあげられるのか？

☐個別の課題に取り組む時間が少ないと感じる。

☐系統付けが難しく単発授業になってしまう。

「週1で時数を確保(削られたら補填する)」 1 2

理由

△作業や単元に生かすことができる。

△基礎的な学力・知識の低下(補う形で。)

△削った時間は必ず補填する(知識定着のため。)

△4月の段階で年間の時数を確保する(年間のカウントをあらかじめ数えていないから足りなくなる。)

△1時間でも国語や数学は大切だと思う。社会に出たときに役立つ(削らないようにできないか。)

△削られていくことは多いが、なくさない方がよい。

△将来を見据えた教育に充てることができればよい。

△国数の学力をもっと付ける必要がある中で、削らない方向で検討して欲しい。

△実質的な知識の獲得という点に置いて、卒業後を考えると重要だと思う。(削られた分を補えるように組む。)

△削らない対応で(国数は社会に出ても必要。)

△現状では授業内容の工夫で対応している。将来的には時数の確保や家庭学習を行わせる等が考えられる。(前回の授業内容を覚えていない生徒が多い。時間が空くとさらに生徒の数は多くなる。)

△生徒のニーズもあり削らない方がよい。

△週1コマでも生活していく上で必要な学習だと思う。元々少ないの削られると評価しづらい。(コマ数が少ない授業をもっと慎重に扱うべき。)

「時数を増やす」 1 9

理由

○時間数を増やす(1週間に1度しかなく学習の定着を図ることができない。特別日課等でなくなることが多く、授業を行っている意味がなくなってしまう。)

○時数を増やす(学習機会が少ない。)

○時数を増やす(系統的に学習を進められないため。)

○時数を増やす。週2〜1.5時間など(積み重ねがなかなかできない、作業学習などとリンクした内容ができればもっと良い。)

○体力づくりなどの時間を国数に置き換える(定着させられない、実態別の授業形態は継続して行った方がよい。)

- 漢字や計算が苦手な生徒が多いが1時間という限られた時間では、力がなかなか定着しない（作業は減らしたくないので、美術を隔週にし、時間を確保する。）
- 週2回計2時間を確保したい。（週1回で行事等で削られると継続的な学習が困難で力を身につけさせることが難しい。グループ別で行っていても個人差や課題が個々に異なるため一斉授業の困難な場合もある。課題学習として学級ごとに個に応じた課題をさせるのも一つの手かと思う。）
- 時数を増やす、週2程度に（週1だと継続的な指導が難しく、忘れるため積み重ねができない。）
- 他から回せるなら増やした方が良い。
- 週2回に増やす（知識が定着しにくい。）
- 本当に必要ならば時数を増やす。（体力づくりか作業を削るかして。週1時間だと継続性がない。単発的になってしまう。）
- 時数を増やす（作業を減らし国数に充てる。国数を削らない約束事を作る。）
- 1時間というのはやはり少ないように感じる。漢字の読み書きや計算力などもう少し伸ばしてあげたいと思う。
- 数学・国語は作業や卒業後・日常生活等でも大変重要となる科目ですので、できれば十分な学習をさせるのが望ましいと思います。現在在校生のレベルを考えると、国数を優先にした方がメリハリがあってよいと考えます。
- 授業が単発になりやすく、定着がはかられにくい。他の学習との繋がりが見えづらい。（ある程度、教科での指導を増やし、生単を減らす。）
- 学級には「わ」や「は」の使い分けができず、平仮名の書き間違えが多い生徒や時計の読み取り・計算に時間のかかる生徒など、日常的に使われる読み書きを苦手としている生徒が非常に多く存在します。そのため、国語・数学の授業の必要性を感じています。（体力づくりや委員会の時数を減少することや1単位時間を50分に長くする必要があるのかもしれませんが。）
- 時数の増加。国語、数学をせめて週2回ずつ。（指導の継続性を維持できず、単発の内容に限られてしまう。）
- 単発の教科学習が、はたして必要なのか。もしくは、週に2～3回程度あるべき。（系統性が持たせにくい。）
- 必要な教科指導なので、削らないように対応しながら可能であれば時数を増やし週に2時間実施するのがよい。

「記入なし」 17

3

◎良い 10

<理由>

- ・仕事が始まったときにギャップを感じない。
- ・就業にむけて働くために必要なことを繰り返しの学習で身につけられる。
- ・ほぼ毎日あることで働く意識づけができる。
- ・3学年としては現場実習のため少人数での作業が多く、製品製作に授業時数が多く必要のため。

- ・生徒の定着度合いからよい。
- ・ほぼ毎日あるので働く環境を意識させる条件がある。
- ・単調な仕事に慣れさせる。
- ・働く上でのしつけを体に覚えさせるためにはよく、忍耐力や対応力もつく。
- ・集中力等が培われ、就職した後の作業率につながる。
- ・作業に対する姿勢と集中力は高く身についている。

○現状維持、どちらかというとよい 8

<理由>

- ・働く上で必要な力を身につけられる。
- ・他の授業では見られない生徒の様子が見られる。
- ・活動内容と生産品の量は妥当である。
- ・生徒の実態に合わせて継続的に指導をすることができ、就労を見通して仕事を意識させながら取り組める。
- ・「合わせた指導」で身につく力は大きい。
- ・体験的に学ぶことで、生徒が成長している部分が大きい。

△減らしてもよい 7

<理由>

- ・他にまわしたい教科があるのならよい。
- ・現場実習が長い分、1～2コマ削ってもよい。
- ・他領域や教科の時間を増やすなら減らしてもよい。
- ・卒業後に必要な力は作業能力だけではない。
- ・1・2学年は作業学習よりも教科学習や生単などで早い段階で学ぶべきことがある。
- ・他の学習時間を確保してもよい。

×削減 6

<理由>

- ・他の教科の時間が取りにくく現在の生徒の実態にそぐわない。
- ・他の授業時数を増やす際に時数が足りない。
- ・3学期だけ国語や数学の時数を増やす。
- ・生徒に進路を意識づけできるような学習を設定する。

◆回答なし 22

[メリット]

- ・職場的な体験を多くすることで実践力が身につく。
- ・定められている単位時間より多く実施することで作業（仕事）を続ける力がより多くついている。
- ・集中力が養われる。
- ・生徒の働く上での力を伸ばすことができている。
- ・長時間、働く力をつけるという点においてよい。

- ・働く力を養うのに役立っている。
- ・卒後の就労に対する意識向上。

[デメリット]

- ・指導要領の基準よりもはるかに多くの時数で設定しているにもかかわらず残業が多い。 2
- ・働く力以外の力（コミュニケーション力、自己理解など）を学ぶ時間が少ない。
- ・なぜ作業学習を多く取り入れているか明確になっていない。
- ・他の教科指導の希望も出ている。
- ・作業では力を発揮できるがその他の場面になると応用の利かない生徒が増えている。
- ・作業能力の向上だけではなく、各教科の必要性も考えた方がよい。
- ・作業を重視するあまり、他の授業が軽視されることはないのか。

[改善点]

- ・授業自体の見直し。 2
- ・到達度の見直し。
- ・作業学習のあり方を改めて考える。
- ・総合的な学習の時間を効果的に組み入れてみてはどうか。（現場実習など。）
- ・週時程の配分。
- ・各学年とも1日分（2単位時間）を削り、他の教科を割り当てることが可能か検証してみてはどうか。
- ・題材の見直しや計画的な生産といった見直しが必要。（現在の題材・計画のままで削減は生産品の確保が困難。）
- ・他学科は将来選択のための体験として時間を限定して行くとよいかもしれない。（学校祭後など。）
- ・教育課程編成の見直し。
- ・国数の授業を作業と振り替える。

4

◎良い 20

<理由>

- ・2～3日運動しなければ体力が落ちる。
- ・継続的に行うことで体力をつけられる。
- ・毎日続けるという習慣のためによい。
- ・毎日同じ日課を過ごし、少しずつ体力をつけていけるので毎日することはいい。
- ・体力がつき、卒業後にみんな太りはじめるため。
- ・地道にコツコツ継続することがよい。
- ・目標にむけて努力する機会になり体力も確実についていて帯が分かりやすい。
- ・継続による習慣づけ。
- ・毎日記録が残るので具体的な目標を立てやすく生徒のモチベーションを保つことができる。
- ・生徒の取り組み方で特徴が見えてよい。
- ・働くための体力向上。
- ・仕事をしていく中で、健康を第一と考えたときに体育だけではなく毎日少ない時間でも継続して運動をしていることが大事。

- ・目標を意識させ意欲的に取り組ませることができる。
- ・毎日あるからこそ意味がある。
- ・精神面の強さを鍛える、生活リズムの安定も考えると帯であったほうがよい。 2
- ・高校生のメンタルを考えると、体を動かす時間の確保はとても重要。
- ・今養生徒はゲームばかりが多く体力づくりは多いので必要。
- ・体力づくりがあることで、ようやく運動する機会がとれている子が多いので毎日でよい。
- ・健康な体づくりという面で毎日継続することは必要。
- ・入学後、体力づくりにより諦めないことや目標達成のための努力も身につき体力向上のためには必要。
- ・毎日でなくなると運動不足になる生徒が出てくる。

○現状維持 6

<理由>

- ・運動が嫌いな人間には理解できないと思うが、体力がつき、辛さを克服する経験ができる。
人生にとって貴重な体験。(運動面以外の克服経験ができれば運動面にこだわらない。)
- ・体力強化。
- ・就労に重要な体力の向上、自己記録更新等の達成感を得る。

●どちらでも良い 3

<理由>

- ・他の時数次第で決めてよい。
- ・体力づくりのために課題学習や作業がつぶれるということは今までなかったので問題ないが、必要によって他授業に充てても問題ない。
- ・他校の時程を見る限りでは毎日でなくてもよい。

△なんとも言えない 4

<理由>

- ・朝に長距離を走るのは健康的に余りお勧めできないことがある。
- ・精神面の向上など必要だと思うが他に必要な授業もある。
作業を減らすなど他の授業と調整できるのであれば現状のまま、できないのであれば毎日に行わないで他の授業で行う。
- ・健康の保持増進や精神的な発達をしていく上で必要であるが、就労のためにもその他の授業時数を確保する必要がある。
- ・体を動かす習慣をつけるという意味では効果があると思うが、朝の時間帯でなくてもよい(午後や帰りのHR終了後など。)
- ・他の学校でも見られるように、週何時間かは体力づくりの時間を確保しつつ、他の学習を取り入れてもよい。
(マナー講座、コミュニケーションの学習など)

×必要なし 5

<理由>

- ・正直、体力がついているようには思えない。

- ・体力づくりと体育の授業が同日になくていい。
- ・これからの職場が求める人材として体力だけではない一面もあり、固執して帯で取る必要はない。他の教科教育の時間に振り替える。
- ・毎日するのではなく、週2回程度は朝から作業や教科などの時間にする。
- ・体力、健康づくりは必要だが、(昔ほど)体力勝負な進路先は多くないのではないか。
- ・1日おき、週3回や週4回などで検討してもよい。

◆回答なし 10

[メリット]

- ・体力の向上。 4
- ・自己記録の向上。
- ・体力強化・維持できる。
- ・運動することが日常習慣化し、3年間で体力や持久力がついている。
- ・体を確実に動かすことができる。
- ・本校の生徒には体力づくりで体力向上、健康増進に努めるのは有意である。
- ・集中力の向上。
- ・体質改善につながっている。
- ・グループ別で行うことは個に応じてよい。

[デメリット]

- ・目的意識をしっかりと持たずに、ただ単に体を動かす時間になっている。
- ・卒後につながらないケースがある。 2
- ・疲労が週末になると目に見えるように分かる。
- ・3年生は水曜日作業のように、学年でねらいを明確にし、効果的な配置にすることが必要。
- ・「体育」と「体力づくり」など体育系に多くの時間がとられる。
- ・他の授業が削られる。

[改善点]

- ・指導者への体力づくりに対する明確な目的を確認する必要がある。
- ・時間数が減っても毎日やることが大事。
- ・体力がついたことで、他の活動に自信がつくような機会があるといい。
(体を動かすことが苦ではない、体力がついて体育に参加しやすくなったなど。)
- ・授業プログラムの工夫。
- ・学年で変える(1学年:帯、2学年:週4回、3学年:週3など)他の比重を変える必要が出てくる。
2
- ・「記録日」の設定もなくし、「安定して行えるように」指導していくことが必要である。

5

◎よい 11

<理由>

- ・企業からPC操作できた方がいいと聞いたことがあり、携帯電話を含めた情報モラルの勉強の機会に

もあるのではないかな。

- ・PC使用することが多くなってきてネットでのトラブルも多いため。
- ・これからの情報社会を考えると必要な教科ではあるが、いわゆる「情報」の学習のみならず、スマートフォンの使い方も含め、情報処理の観点も大切。
- ・進路学習の1つとして取り組んでもよい。
- ・ワードでの文章入力、文書作成はできた方がよい、余裕があればエクセルも簡単な計算式やグラフ表示などもできたほうがいい。
- ・今後、必要な能力である。
- ・進路希望先によっては必要になってくるので、PC技能を身につけることは大事。
- ・社会の中で情報教育は今後必要だと思う。
- ・最低限の操作方法を身につけられたらよい。(能力に応じて。)
- ・個々の能力を見極めて、能力向上が見込める生徒はPCスキルを身につけてさせてほしい。
- ・舎の様子では、情報の授業で得た知識が舎のPC使用につながっている様子が見られるのでよい。

△なんとも言えない 18

<理由>

- ・国数の勉強にもなるため、HRの時間でたまにやるべきである。
- ・タイピング程度でよい。
- ・事務的な就労は対象者がまれなので考える必要はないが、情報リテラシーの向上を考えれば必要。
- ・大事だと思うが全員に必要なのか、固定してコマをとるのではなく授業の中で積極的に活用する。
- ・どの程度の処理能力なのか、技術を身につけるためにはそれなりの時数が必要、特化したものであれば学科になる。
- ・ネット犯罪等の観点からは必要。
- ・全ての学科に必要なと考えたらそうではないが、LINEやFacebookとかのモラルは必要。
- ・8台しかないため学年で1コマやるのは難しく、生活家庭科の生徒の実態に合わないのではないかな。
- ・技能としては役立ち、得意な生徒もいるが、進路先としてどのくらいの需要があるのか。
- ・生徒の視野は広がるが、有害かどうかの判断の問題でフィルタリングをしっかりと行う。
- ・メディアリテラシー教育は必要、ただし携帯電話の所持を許可してから。(本校のみが禁止されている。) 事務能力については、個別対応でもよい。
- ・情報活用能力などは大半の生徒に必要なと思うが、PCスキルは必要な生徒に限られている。
- ・授業の中でタイピングやネットの活用方法など情報教育に取り組んでもいいが、生徒の実態に合わせて取り組まなければならないのでクラスによって内容の差が生まれてしまう。
- ・それ相当の力量がある生徒にとって事務的な就職先も適していると思うが、PC能力があるだけなら今養の生徒以外でも就職できる。就職しても状況判断ができない、人間関係を築くことができないなどの点を克服できる方向の力をつけなければならない。
- ・一般就労する生徒にとっては必要なことだが、福祉的就労の生徒(特に生活家庭科の生徒)たちには必要なことではないように感じる。
- ・現状、事務作業を目指せるレベルの生徒が本校にどれだけいるのかによる。
- ・行っても良いと思うが、単発にならず生徒に系統性を持たせることが大切。
- ・必要だと思うが、漢字が読めない生徒に疑問が残る。

- ・ワードやエクセルなどの能力向上はよいと思うが、インターネット等の使い方については注意が必要特にSNSなどに手を出している生徒が増え、職員の知らないところで生徒同士がやりとりしているという実態は避けたい。
- ・PCを使用する方面への就職の要望に応じて個別、クラス単位などで取り入れればよい。

×必要なし 2

<理由>

- ・他の時間を削らなくてはいけない、事務的な就職に就く生徒（就けそうな生徒）はほんの一部でほとんどの生徒はそれほど必要としないのでは。
- ・カリキュラムに入れなくても必要に応じて個別の指導でよい。

◆回答なし 16

[メリット]

- ・情報処理能力を身につけることが大きな力になる。
- ・簡単なPC操作ができることで仕事の幅が広がる。
- ・今後の時代の流れに応じた仕事の力が高まること。
- ・スマホなどを高確率で所有すると思われる機器の扱いを知ることができる。
- ・事務的な就職にも日常生活にも大切。
- ・就労先に限らず、余暇や生活する上で、IT技術や情報リテラシーは必要。

[デメリット]

- ・台数が確保できていない。 5
- ・情報をやることで、どこかの授業数が減らされるのではないか。
- ・PC能力だけではなくネットリテラシーやスマホの使い方、個人情報に対する考え方など教えるべきことはたくさんあるが、本校の教育課程には特に記載なく「実態に応じて」やっている程度
- ・全員は難しいので、必要な生徒を中心にはじめてもよい。
- ・全生徒対象はむずかしいと思われるので個別での指導が必要。
- ・機器が古い。

[改善点]

- ・台数の確保。 4
- ・ハード面の整備や予算との関連。
- ・指導ができるような人材の確保。（研修を行う。） 2
- ・PCへの興味を持たせる。
- ・作業内容として扱い、自分たちの作ったものの売上や集計などをPCで行ってみてもいいのではないかな。
- ・既存と生活科で分ける。
- ・人と関わる力は実際に体を動かしながら、ペア活動等の携帯を工夫した作業で身につける。
- ・PC操作でも報告、質問等のコミュニケーションは意図的に設定した方がよい。
- ・必要であるかもしれない生徒（一般就労）においては、国語で取り組むことでよいのでは。
- ・数学や生単に少しだけPC利用について触れる。 2
- ・生徒の実態に合わせて教材を使いながら段階を踏んで取り組んでいけばよい。

- ・国語の作文を書かせるときにP C使用する、作業学習の中でP C操作を取り入れるなど。
- ・機器には予算が必要で、高等養護学校では就学奨励費にI C T機器購入向けに別途5万円の拡充制度がある。H26入学者からの対応ではあるが、学習に必要であれば各自で購入する方法もある。
- ・二年次後期から就労にむけ、選択科目という形で受講できるとよい。
- ・体力づくりや作業学習の時数を削減した分を充てる。
- ・必要と考えられる生徒、またはそちらの進路を選びたいという生徒のみに絞って放課後学習や宿題等で補う、資格取得の勉強をさせるという集団をとるほかないのではないか。
- ・短時間だけP Cに触れる機会や遊ばせる機会を設けても事務レベルに達せさせるのは難しい。
逆に事務能力がない生徒にP Cを使用する職務への希望や興味を不本意に持たせると進路選択の際に齟齬が発生する可能性がある。
- ・生単や作業の題材・年計を見直して組み込む。
- ・学習内容は保護者や舎とも連携して組み立てる。
- ・要望に応じて改善していけばよい。
- ・実態に応じてモラル等を教えていってはどうか。
- ・古い機器でもできることから取り組むとよい。

6

◎よい 10

<理由>

- ・働くことへの意欲を高めるためにも大切な教科だと思う。
- ・進路については、1年次から意識できるようにしていった方がよい。
- ・「仕事」を意識付けする必要性があるので取り入れた方がいい。
- ・時代の流れに合わせて取り入れる。
- ・働くことへの意識が高くなる。
- ・1学年の取り組みをどの学年も行っていけばよいのでは。
段階を踏んで卒業後の見通しを持たせることで将来のイメージを持たせやすい。
- ・前提実習を終えた生徒を見ていると、就労先での作業と学校での作業を区別しているように見える。
様々なことで結び付きを苦手としている生徒たちであるからこそ、「作業」と「キャリア教育」を併せ指導すると、より生徒の理解も深まっていくのでは。
- ・将来を考える時間として、ネーミングは別にして1つの時間としてとらえてもいい。
- ・職業観、勤労観の学習を1学年から行うことには意味がある。
- ・進路を意識づけする時間はもっとあってもよい。

○現状維持 2

△なんとも言えない 2

<理由>

- ・「職業」という教科を入れて仕事に対する意識を高めるのにあってもよいが、農業科のように天候に左右される場合は毎週とはいかない。

- ・ といった学習をさせるかによる。ネタがなくて他学習と内容が重複したり似通ったりするならばあまり意味がないのではないか。

▽どちらでもよい 2

<理由>

- ・ キャリア学習や進路学習は大切であり、年間計画をしっかりと組み立てて実施してほしいが生単の中でもよい。
- ・ やってもよいが、総合学習で行うと生単で使用する時数が少なくなってしまう。

◆回答なし 24

[メリット]

- ・ 進路学習は重要で、どの時間を使っても行うべきである。
- ・ 通年で職業に関することを指導できることはより「仕事」を意識できる。
- ・ 進路選択のためには必要。
- ・ 働くことや生きることについてより明確に整理できる時間になる。
- ・ 社会生活していく上で意識づけができる。
- ・ 意識づけにおいては必須である。
- ・ 生単のようにある期間に集中的に学ぶのではなく、定期的に取り組むべき内容として「職業」という授業のメリットが大きい。
- ・ 1年の今の取り組みは、生徒に常に「進路」や「生き方」を考えさせていく意識をもたせることができている。

[デメリット]

- ・ 準備が必要。
- ・ 「職業」と言われてもピンとこない。
- (前々任校では「職業」という教科がありましたがキャリア・作業の違いは何なのか分かっているのか疑問。)
- ・ 新篠津は中止を検討している。
- ・ 週1の座学で身につくかは疑問。
- ・ そもそもキャリア教育は特設するものではないのでは、全ての教科において身につけるものではない。
- ・ この頃、離職や挫折が多いと思うので何とかならないのか。
- ・ 作業に取り組みながら働くことを学ぶが、技術と態度を同時に教えるだけではなく、働く人としての知識を教えることに特化した授業は必要。
- ・ 手探りなので2年次どうするかといったことは未定であり、行事や生単との兼ね合いがまだ整理できていない。

[改善点]

- ・ 総合で行うのであれば、生徒が興味をもって自主的に取り組める内容の精査してみてもどうか。
- ・ 進路指導部との連携が必要、学年によって年計を立てるところから始めるのが先決。
- ・ 3年のみ行う形にして、調整していくのも手ではないか。
- ・ キャリアや進路という単独で実施するのであれば、他の授業でのカウント扱いはしないほしい。
- ・ 総合か作業学習から1時間とる。

- ・進路に対する職員の意識改善が必要。
- ・総合学習以外の時間にできればよい。
- ・生徒の実態に合わせながら教材などを工夫する。
- ・作業時間の週1、1時間を「職業」に充てる。
- ・キャリア学習に類する要素を作業学習の時間に扱っている場面は皆無でしょうか。作業時間に役立つ学習「職業」を取り入れるべき。
- ・生単の指導計画と調整が必要、国語や数学と同じように削られる可能性がある。
- ・定期的に校内実習を行い、日頃行っている作業とは異なる作業で生徒の力を確認する。また福祉的就労先（例えばあすなろ学園）の方を講師として招き、「求めている力」などについて実際に作業を行いながら、生徒が見てわかるような形で説明してもらいなどの「生徒参加型のガイダンス」のようなのであれば、生徒により「身につけなければいけない力」が分かるようになるのかと思う。
- ・1年間行ってみて、どのような効果や課題があったかを検証する必要がある。その上で1学年は次年度も継続して行うか、また新1年生や3年生など、他学年も行うかを検討してみたらよい。また4つの能力を指導するにはこの学習ではこのような効果がねらえる、というような学習・意見交換の場を設け、授業改善につなげるのもよいのではないか。
- ・より具体的に一人ひとりの進路にむけた個別学習等を取り入れるのであればさらに有効ではないかと考える。（例えば、あすなろ希望者にはあすなろの現状や状況・必要となるスキルをより詳しくレクチャーするなど。）
- ・計画的・系統的に指導できるよう整理して全学年、もしくは1・2年、もしくは1年のみとかで総合を「キャリア学習」「職業」のようなものとしてやっていけたらよい。作業は働く力、生単は生活する力をつけるとして昔から生徒におろしているの、総合はその両方から自分の生き方を考える時間にすればよいと思う。ただ頭の中がややこしくならないように何曜日の何時間にするかよく考えた方がいい。（1年の水4Hはあわただしい。）

7

◎よい 1

<理由>

- ・単元配列について、とてもよく考えられている。

○現状維持 1

<理由>

- ・現場実習単元もあるので上手く対応しながら行っている。

◆回答なし 38

[メリット]

- ・今までの資料が残っているのでやりやすい。
- ・生徒の実態に合った内容を行うことができる。
- ・社会的自立に特化した内容で生徒には必要である。
- ・臨機応変に対応することができる。
- ・比較的整備されている。

[デメリット]

- ・生徒の実態に合った内容であるのか。
- ・3年次の社会人としての暮らし方の配列の組み方。
- ・配列、精査は必要。
- ・社会に出たときにオープンになり過ぎないように学習も必要（スマホやネット、男女関係）。
- ・職員の意識で質の優劣があるのでは。
- ・指導内容が確定していないこと。
- ・何を生徒が学んだのかわかりにくいこと。
- ・「卒業後の生活」が卒業間近になり駆け足で通り過ぎるような配列になっているため見直しが必要。
- ・計画的、継続的な学習効果を狙うためにも他の単元内容を見比べ、単元内容の移動や精査が必要。
場合によっては、単元内容を他の教科、学習場面に置き換える必要があるかもしれない。
- ・単元名は決まっていて、内容もだいたい固定しているが、授業を作る人は毎年何をすればいいか困っている。

固定とは言わないが、きちんとした整理や引き継ぎが必要。

- ・男女交際、携帯電話の知識をつけてほしい。

[改善点]

- ・生単部会での検討。（生単担当者での話し合い。） 2
- ・全職での検討事項になる。
- ・キャリアもしくは進路学習を生単から独立するのであれば、生単で再び学習する機会がなくてよい。
- ・生単の研究で行われている単元の指導内容表が完成されると授業の準備がしやすく、学年ごとの個別の手立てなどを考える時間もできる。
- ・校内研修および校外研修への促し。
- ・各教科で必要な内容を定期的に継続的に指導していくのはどうか。
ただし、見学旅行、学校祭などは特別日課で、生単としては単元を組む。
- ・生単は学校行事に限定し、その他の要素は教科等で指導、カウントしてもよい。
- ・「心とからだ」「生活する力（衣食住）」「行事単元」に特化して、あとは総合にまわしてはどうか
また生単とは何かを今一度しっかり押さえた方がよい。

8

○現状維持 1

◆回答なし 2 1

[メリット]

- ・注目されることで今養の位置づけがはっきりする、宣伝チャンスである。
- ・他の学校では徐々に変わっている。
- ・生徒の選択肢が増える。
- ・学科が増えることで様々な作業を経験できる。
- ・新しい学科の創設になるだろうが、福祉、環境関係の新しい内容の学科を増設し、多様な職に適応し

た実践的な指導を行うことができる。

- ・多様な生徒を受け入れる本校であるゆえ、コース制度もあり。
- ・2年になるときに産・農・家を変えるというのもよいかと思う生徒が多い気がする。

[デメリット]

- ・増設する期間、体制の確保。
- ・職員の専門性の強化の必要性。 3
- ・施設。(詰め込みは生徒の精神的余裕をなくす。) 1 1
- ・新設学科の専門者の不在。
- ・進路先の開拓や実習先の開拓など、生徒が増加することで受け入れ先も見つけなくてはいけない
- ・2学年展開の限界がある。
- ・新設する学科との授業内容の棲み分け。
- ・実態多様な生徒が増加しているため学校全体で実態を把握。
- ・色々と変わること、生徒指導部、支援部、実習助手など安定した指導者の体制を保てるのか。
- ・生徒の受け入れ態勢。
- ・校舎(特別教室の狭さなど)、寄宿舎というハード面で問題あり。 5
- ・職員数が増えても期限付きばかりが増えてしまうのではないか。
- ・指導力の向上。
- ・増築・改築など工事になると授業に影響が出る。
- ・ソフトの面の課題。(職員人材、寄宿舎指導員の職員定数。) 2
- ・増員に伴い、職員も増えるため共通理解できるかどうか。
- ・都市部から離れ、交通や公共施設が不十分な場所にある学校なので、規模が大きくなると対応できるのか。
- ・帰省帰舎に伴う交通手段の確保。

[課題]

- ・入学する生徒の実態次第。
- ・教室、教材等が不足。
- ・調整が必要。
- ・増設。 5
- ・各学級の生徒の実態について学年・学校全体で把握できる機会がより必要。
- ・本当に本校が必要とする教科を厳選する必要がある。
- ・就労先と関連のある作業ができる学科になるのであれば生徒のためによい。
- ・就職先に関しては、学科がそのまま結びつくことは現実問題少ない。
学科そのものは今の流行にのる必要はないと考える、大事なのは社会人としてどのように生きていくか、働いていくかであり、現在の学科システムで十分に対応できる。
- ・寄宿舎定員がどうなるのか気になる。
- ・就労先、地域、保護者は、生徒に何を学んでほしいのかを知り、生かす。

[改善]

- ・2校目以降の教員を増やす。
- ・資金面。
- ・H28もどれぐらいのニーズがあるのかを段階を踏んでアンケートや調査をしていく必要がある。

- ・先進的な実践を行っている高等支援学校見学等、研修の実施。
- ・教室の問題は技術室で対応するとして、寄宿舎の受け入れ許容人数、スペースも関係してくる、通学生を多くする、町内に下宿を作るのかなど。
- ・2年になる前に教育相談で変更すると生徒の身になるかと思う。
- ・寄宿舎定員の関係で本校に入れない、または退学するといった問題を起こさないように少し余裕を持たせた定員にできればよりよい。
- ・どんな生徒が増え、どんな教育が必要なのか情報収集しないと考えにくいと道教委に言う・
- ・連絡は必ず行うとともに学舎で行き来し、生徒の様子を見ていく。
- ・函館バスとの調整、協力依頼。

[意見]

- ・どのように考えているのか（校長）、我々が言えることではない。
- ・仮に増えるとしたら木工科が現実的なのでは。

9

○現状維持 4

<理由>

- ・生徒の実態によるが、今はこれ以上の必要性は感じられない。
- ・社理英などを増やすと生単や作業の授業数が減る。
- ・「合わせた指導」を中心とする現状のスタイルのままでよい。
学ぶことが教科で細かく分かれている方が本校に入学する生徒にとっては負担が大きく力が身につけられない。

△どちらとも言えない 4

<理由>

- ・現状通りでもよいが、道徳部分もあってもよい。
- ・最低限の教科のみの実施でよい。
- ・行ってもよいと思うが、単発にならず生徒に系統性を持たせることが大切である。

×必要なし 4

<理由>

- ・現在取り組んでいる課題学習を継続的に取り組める環境を作ることが大切。
- ・特別支援の生徒に対して教科学習に力を入れるメリットが分からない。
- ・生徒の実態を考え、現在同様「社会」「理科」「英語」は必要ない。

×条件付きの必要なし 2

<理由>

- ・生活科はなくてよい。
- ・国数はともかく、社理英の意義がみえてこないため。

◆回答なし 28

[メリット]

- ・教科で教えることで、生徒にとっては何を学ぶか分かりやすい。生単の授業で教えていた内容で、教科等に振り返られるものは振りかえて行う方が生徒にとって明確である。
- ・情報の授業はあった方がいい。
- ・言語面、知識面など社会性を培うためにも教科学習は必要。
- ・卒後に必要な力には、生単・作業に重点を置いた現在のカリキュラムの方が有効的である。

[デメリット]

- ・座学の増加。
- ・理科、社会の内容がほとんど扱われていない、一般的な社会的事象に関心をもたせず、知識もないまま卒業させてよいのか。
- ・専門性の質に課題。
- ・系統立った指導がどこまでできるのか。
- ・MTができる人が少ないと一部の教員に負担が増えるのではないか。
- ・領域教科をあわせた生単では指導内容において、国語としてはどの力を、数学としてはどの力をなど各教科のどの内容を含めて指導しているのか分かりにくい。
- ・何に重きを置くかによる。
- ・本校の週時程は古いタイプである。色々な教科を学ぶと働く力が備わるのかという疑問が残る。
- ・衣食住、福祉、消費生活、被服、調理など生活に必要なことを学ぶ機会も少ない。
- ・現在の本校時程とはかなりの変更が必要。
- ・教科学習が難しいから「合わせた指導」があり、教科ができる生徒は普通校に行くのではないか。
- ・教科学習を個に応じつつ一斉授業できる指導者も確保できない。
- ・社理などの知識は生徒の実態によっては、理解が難しい場合が多いのでは。
- ・教科学習にすると卒後に必要な力が薄れる。

[改善点]

- ・検討が必要。
- ・生徒の実態次第。
- ・教科を導入するときの生徒が不利益にならないような対策が必要。
- ・生単の中で取り入れるか、教科の新設。
- ・研修の充実。
- ・確実に3年後、5年後も継続できる計画を立ててから取り組むべきである。
- ・現在取り組んでいる課題学習を継続的に取り組める環境になってから。
- ・各教科学習にし、「心とからだ」は保体、「生活する力」は家庭科など指導内容を細分化しはっきりさせる。もしくは生単ならば、各教科のどの内容を併せて授業を構築しているのかを簡単ではあるが、おさえるようにする。
- ・学校としての方向性。
- ・到達度確認検査は必要になってくる。
- ・産業科・農業科にも「学級生単」があってもよい。各担当が生徒の実態に応じて、授業内容を設定できるので生徒の成長を促す時間が増えてよいと感じる。
- ・情報を新設するか、生活単元学習の時間に組み入れる。(生単も時数ギリギリなので厳しい、また単

発になるのできちんと身につくかも知れない。)生活に必要なことは生単で対応するとしたら本当に必要なかどうか確認→生単だけで対応できるかどうかの判断→内容精選と段階を踏んでいくのでしょうか。

- ・本校生徒の現状に沿った時程であれば問題ない。
- ・社理に関しては、HRで新聞等を使って、天気の見方や社会の動きについて、リアルタイムの情報から生徒に分かりやすく伝えていく。
- ・現在のカリキュラムを基に、卒業後に必要な力を育てるための教科内容を生単へ取り入れる。

10

◎よい 1

<理由>

- ・定着度合いをみることはよい。

△どちらとも言えない 5

<理由>

- ・生徒の実態に応じてあってもよい。
- ・達成度を知るという点では実態に合わせたテストがあってもよい。
- ・生徒や習熟度別グループの実態によっては筆記試験の形ではなくてもよい。
- ・学力検査を実施して、それが何に役立っているのかその情報を得てから考えるのがよいのではないかな。
- ・教科の授業を増やすのであれば必要であるが、現状は必要ない。
- ・結果を見て、意欲を持って次につなげることができるのであれば実施を考えてみてもよいのでは。

×必要なし 15

<理由>

- ・単元によっては実施しているところもある。
- ・週1の本校では、やる意味が感じられない。
- ・落とす試験ではないし、その試験で厳密な到達度ははかれない。
- ・学力だけつけても、社会に順応する力の方が大切である。
- ・国数ではプレテストを実施しているため、ある程度の到達度ははかれることから特別必要ない。
- ・本校に入学している生徒達は、紙の考査ではない実技的な到達度の確認が合っている。
- ・生徒が試験実施を受け止められるのか。
- ・課題学習を継続的に取り組めていないので実際に行っても意味がない。
- ・到達度を測るための方法は試験だけではないと思うが、生徒に対して緊張感をもたすためにはよい。
ただ特別支援学校の生徒の中には、理解しても文章で表現できない、表現しきれない、文章を読みとれないという生徒もいる。それを筆記試験で評価してよいのか。
- ・生徒の到達度を測る必要はあるが、定期試験は知的の特別支援学校には必要ない。
それぞれの担当教諭が生徒に応じた指導内容または教材を設定するために「プレテストを行う」という取り組みでよい。
- ・本校に適さないため。

☆管理職の考えによる 1

◆回答なし 2 3

[メリット]

- ・目標について設定しやすい。
- ・自分の到達度が理解できる。
- ・試験を行うことで授業に緊張感が生まれる。
- ・数値の評価は客観的に判断しやすい。

[デメリット]

- ・実態により考える必要性はある。
- ・何のために行うのか目的がはっきりしない。
- ・評価する際にインフォーマルな評価になる。
- ・何に重きを置くかによる。
- ・試験の目的を明確にし、試験結果を授業にどのように反映していくのか。
- ・教科学習をしっかりと取り入れている学校では有効であるが、本校は週1であり、しかも他の学習等との兼ね合いで削られている状況では有効とは言えない。
- ・国数をグループ別で指導していても個人差が大きいため、各グループ内でも個に応じた指導をしている。
- ・実施してもよいが全く参加出来ない生徒もいるのでは。
- ・評価の基準が統一か個人別かで大きく異なる。

[改善点]

- ・試験を行うことにつながる授業を行うべきである。(回数や内容。)
- ・時間割の見直し。
- ・授業後にミニテストをするなど達成度を確認する必要がある、ただしテスト期間を設けるなどをせず指導者の裁量による。
- ・学校としての方向性。
- ・試験実施するならなおさら教科部会の役割を明確化、機能化する必要がある。
- ・教科学習が万全とは言い切れない本校で学力検査を定期的実施するよりは、学年・教科ごとに区切りがついたところで到達度を測った方が有効。
- ・実施となれば教科学習をもっと取り入れる必要がある。
- ・本校に有効なのか検討する必要がある。

1 1

[課題]

- ・指導内容表があるため、そこを徹底できればよいが、見直しも必要になってくることも考えられる。
- ・どこまでが自立活動か不明確な部分がある。(評価等。) 2
- ・具体的な活動にならない。
- ・自立活動を考え、この時間をスポット的にキャリア学習(進路学習)を各学級の計画に入れてはどうか。

- ・今養のおさえが分からない。 2
- ・基礎基本ばかりやっている時代ではなくなったのでは。
- ・生単や作業のように授業としてあるわけではないため、目標などが意識しづらいのでは。
- ・個別指導のために、自立活動の独立した時間があるとよい。(特に生活家庭科。)
- ・現在の高等養護の実態から考えて曖昧になりがち。
- ・自立活動の時間がないため、実際のところやっていない。
- ・コミュニケーションや人間関係の形成など、多様な課題が見られるが、その場その場での必要に応じた指導にとどまっている。
- ・学習活動全般で明確なおさえがあれば問題ない。
- ・現在、生徒の実態に応じて適切に行われている。
- ・コミュニケーションの部分では進路学習と絡めながら「自己認知」のような学習活動も必要。
- ・本人、家族に自立活動の意味をもっと説明する必要がある。
- ・自立活動という視点に立った指導をなかなか行えていないのが現実。
- ・本校では生徒一人ひとりの課題解決に概ね取り組んでいる。
- ・指導内容表には「教育活動全体を通して行う」と位置づけられているが、先生方の意識が薄い。
- ・社会経験が少ないため、卒業後に困りそう。(買い物、余暇など。)
- ・本校における自立活動は何に置き換えているのかが分からない。

[改善点]

- ・生活家庭科で週1コマ程度設定し、個別指導できるような時間を設定。
- ・体力づくりの帯で行わないのであれば自立活動の時間を週1回設定するなど。
- ・体力づくりの時間を削るなど、意図的に毎週1～2回「セルフチェック」の時間として、SSTを通してコミュニケーションや人間関係の形成、心理的な安定などの課題について指導する時間を作る
小学校でいえば、通級で行われている内容のイメージ。(自分としては最優先で必要と感じる部分である。)
- ・全体周知を改めて行う。
- ・小平は「自立活動」を1時間実施していますが、教育活動全体の中で指導する形態がよい。
- ・本人、家族に自立活動の目的や意味を伝えるには家族の了承と本人の障害理解と受容が条件となるので、計画的にできるだけ早い段階で(1学年終了時まで)伝える必要がある。
- ・保護者との連携を図りながら、生徒にとっての課題認識を行っていく必要がある。
- ・自立活動のここをどういった場面でどう指導するということを学級・学年で押さえられればよい。
(帯で時間を設ける必要はない。)と考える。
- ・出来るだけのことはしているが、職員数により難しい部分もあるため職員数の確保。

◆回答なし 3 2

1 2

○現状維持 8

<理由>

- ・学年をまたいで学習ができ、交流にもなるため。

- ・生徒の主体的な活動は大切。
- ・LHR、委員会、全校集会の取り扱いでよく、異学年活動はあってもよい。
- ・委員会活動は自治活動へのステップとして必要、民主主義および市民教育の場として必要。
- ・委員会に参加することで、自分も学校活動に携わっているという自覚が持てる。

△なんとも言えない 3

<理由>

- ・毎回、やることを作るのに大変な委員会もある。
- ・委員会活動の時間が多すぎるように感じる。(毎週でなくてもよい。) 2

▽なくともよい 2

<理由>

- ・縦割りの活動があると、先輩・後輩としての活動があるのでよいと思うが、寄宿舍でも教える・教えられることができるのでなくともよい。

◆回答なし 22

[メリット]

- ・LHRとしてどのような内容でも対応できるのでよい、委員会も生徒の役割を明確にして責任感もできるのでよい。
- ・委員会は3学年またいだ教育ができる。
- ・自治活動として意味がある。
- ・責任をもって取り組む観点からも必要。
- ・縦割りの活動は学習活動に必要。

[デメリット]

- ・LHRの中に何種類かあって、継続性がない。
- ・委員会によって活動のバラつきがある。
- ・教師のお手伝いみたいな委員会活動になっているところもある。
- ・委員会によっては同じことをするなどマンネリが生まれている。
- ・生徒が主体的に取り組むことができているのか分からない。
- ・50分授業にするなら7校時はいらない。
- ・授業時数にカウントされないからやらない学校がある。
- ・7校時を6校時に減らしても舍務会議には影響は出ないのか。
- ・生徒が委員会活動自体をどのように感じているか確認したい。(生徒による学校の自治の意識はあるのか、学校をよくできているかなど。)
- ・活動内容が限られていて、生徒が目標を持って取り組むことができていない。
- ・完全に週1というわけではないが、全校集会やLHRで削られることがない期間等で、週1で行う必要のない委員会もあるのではないかな。
- ・生徒会、委員会は生徒自身に自治を考えさせながら活動させるということがあまりできていないのでは先生方が指示して生徒が動くということが多く、生徒自身にどう動くべきか考えさせていることが少ないのではないかな。

[改善点]

- ・LHRの充実を考え、この時間をスポット的にキャリア学習（進路学習）を各学級の計画で入れてはどうか。
- ・LHRではなくSHRとして行う。
- ・自主的な活動がもっと増えればよい。
- ・生徒の実態に合わせながら生徒の意見や考えを踏まえて取り組んでいったらよい。
- ・無くすと生徒が主体的に活動する場面が少なくなるため、時間割に組み込まれたら組み込んだ方がよい。組み込めないなら無くす
- ・他の学習の時数がクリアされているのなら、水曜日を会議日にする考え方もある。
- ・週時程に組み入れるのではなく、普通校と同様に放課後の実施でもよい。 2
- ・現在の活動内容であれば、隔週に実施して残りの半分の時間を他に振り分けることも必要。
- ・生徒達で学校をよくしていこうという気持ちを確認する上で、委員会活動を奉仕の時間として自由参加にしてみてもどうか。（委員会活動の意味、奉仕活動の意味などの説明をした後で。）
- ・全校集会の実施は賛成。
内容は全校的な課題（携帯電話マナー、集団生活など。）4月の早い段階で行うといい
- ・他の授業に充てるのが妥当である。
- ・委員会は月1回にしてその分を部活動にしてはどうでしょうか。
- ・これまで通り7時間目の扱いとして、委員会がない人は清掃活動等に従事する、委員会で人手不足のところへ手伝う等はどうか。（委員会間で事前打ち合わせが必要になってくるため現実的ではないが。）
- ・部活動以外で縦割活動があると良い。

13

- ・職員間の人間関係も大事であるが授業をする態度や生徒を第一に考えられる学校になってほしい。
- ・部活動のおさえ。（先生方のボランティアでは限界がくる。）
- ・規正をかけていくのは、よいことであるが、卒後の現実社会に出たときにギャップがあり過ぎても困るので難しい問題が山積みである。
- ・与えられたことは行うが、自ら生き生き取り組む姿がもっと見られるようになってほしい。
生徒が自分で試行錯誤して取り組む時間があればよい。
- ・安定した職場環境をつくるために経験のある先生を増やしてほしい。
- ・アンケートの中身から、作業学習を減らして教科学習を取り入れたい意向なのか。
以前、檜山北高校の先生から話を聞いたが、北高の（特別支援に該当するような）生徒が、本校生徒も実習で受け入れてくれている企業に実習に行かせたときに、高等養護学校の生徒の方が働くと言われたことがあるそうです。これは、教科学習中心ではなく、作業学習を取り入れているからこそその結果だと思う。進路が就労に直結しているからこそ作業学習を多く取り入れている本校のカリキュラムでよいと思っている。
- ・多岐にわたる生徒の特性に応じた生徒への支援を行う。
- ・生徒自身の自己有用感が高まるような授業を行う。
- ・社会は厳しく支援は受けられないため、学校でも厳しくびしびしと指導するというのは、学校の必要性があるのかを問われる。それなら中学校卒業後、すぐに社会に出た方がいいのではないか。社会

が厳しいからこそ、せめて社会で困ることが少なくなるように生徒自身が自分自身を助けることができるように手厚く、社会に必要な技術、代替行動を教えていく学校であってほしい。

- ・現状にプラスアルファする形がベターと考える。
- ・職場とGHが整備され今金町に在住希望の生徒が卒業後に安心して生活できるようになってほしい。
- ・高校生の有り余る体力と勢力をもう少し発散させる必要がある。その意味で課外活動（部活、寄宿舎の余暇時間など）の充実が必要。本校の地域性を考えたとき努力を発揮できる場所は数少ないが、卒業後の余暇をつなげる意味でも、大切な取り組みだと考える。しかし、課外活動は先生方の勤務体制にも絡んでくるので難しい問題かもしれない。
- ・今金の生徒は他校の生徒に比べ、素直で一生懸命である。自分もこのような生徒を育てていきたい。
- ・部活動を含め、生徒の余暇活動を充実させる必要がある。卒後、仕事以外の部分で苦しんでいる生徒が多い現状を考え、学校でも学習時間以外での活動を増やすことは出来ない。
- ・本校進学希望者が普通高校への進学を余儀なくされる、または逆に普通高校への進学が望ましい生徒が本校に進学するという現状を解決することが一番の課題である。そのためには本校に進学した場合の教育課程について、卒業後の進路、生徒自身の状況をさまざま加味し、保護者の方と相談した上で慎重に選考を行う必要があると考える。現在も教育相談や学校見学等で上記のことを行っているが、それでも最初に挙げた問題が現れるということは、どこかで何かが不足しているということなので、今後も検討・更新していく必要がある。
- ・マトリックスは教育方針。教育活動がどの方針に沿って行われているかが整理・確認できればよい。キャリア教育は全て新しくするという意味ではない。
- ・会議等があり難しいと思うが、部活動の時間を増やすことはできないのか。生徒も意欲的に取り組むことができるのでは。
- ・やむを得ない事情がないのであれば掃除の時間に間に合うように下校させてほしい。17時から掃除の時間のため5～10分前がよい。
- ・教務の先生方（特に新採用の先生、期限付きの先生、特別支援に初めて携わる先生）の中には、舎の体制や日課を知る意味で、普段の生活の様子をもっと見に来ていただきたい。
- ・生徒や保護者への最前線に立つ担任が、学級のこと重点を置いた仕事ができる組織。

◆回答なし 37

14

- ・部活動を週1回から週2回程度にならないか。（望んでいる生徒も多い。）
- ・大きな変更をいきなり行くと現場が大変混乱するので、少しずつやってほしい。
- ・継続して取り組んでいけるのであれば新たな取り組みをしてもよい。
- ・授業の始・終業時間がわかりにくい。
- ・新設校の新しい学習内容は新鮮に映る。しかし、その卒業生が社会で活躍している例が少なすぎる。今養で取り入れられている作業学習を通して身につけようとしている能力が新設校でのそれと大きく違うのでしょうか。
- ・今年度はキャリア教育の視点から「学校行事」や「教育課程（カリキュラム・週時程表）」の見直しを行っている。しかし、それ以外にもいろいろな検討がなされているようです。取り組みが可能なことから順次取り組んでいければよいです。

- ・教育課程を改善する必要があると理解した。変えるべきもの、変えなくてよいものをしっかりと考え、この議論に参加していきたい。
- ・学習活動の様々な場面で、自分は何を生徒に教えているかという意識を持っていないとこのような話し合いには参加できないと実感した。このような話し合いが自然とできるような職場になるとよい
- ・学科増の話もあるので、早急に変えるのではなく、できそうなことから変えればいいし、変えなくていいものは残すべきである。ただ、何を狙ってその授業があるのか、その授業で何を教えるかについてはマトリックスを見つつ整理したり、共通理解したりする必要がある。
- ・この地域の子ども達の身の丈に合わないことをやっても意味がない。中学までの教育歴を踏まえつつ、本校として身につけさせたい力をはっきりさせて教育課程を組むことが大切である。
それを実現させるためならば、学科転換やコース制（クラス替えや作業種選択制）なども考えられるが、職員側の対応が追いつかないのでは。
- ・時代や流行等よりも、本校へ来る生徒にとって有効なカリキュラムを検討したい。

◆回答なし 45

平成 26 年 教育課程全体会議 1 議事録

開催日時	平成 26 年 11 月 7 日（金） 14 時 00 分～16 時 00 分
会 場	本校格技場
運営者の説明および出席者の意見交流の事項	
〈教育課程全体会議にあたり〉 ・今回の教育課程全体会議にあたり、教育課程を変更する、変更しないに関わらずに今回の全体会議を行っていることを前提としてほしい。 ・本日の流れは、趣旨とアンケート状況の確認、グループ別に 20 分間の意見交流、グループごとのまとめを発表の項目ごとに繰り返して行う。 項目は、①授業時間の設定について（現状の 45 分授業なのか、50 分授業なのか）、②教科学習（国語、数学）について、③情報、職業（キャリア）の新設教科についての 3 点である。この 3 項目が重要となってくると考えている。 ・アンケート結果を基に全職員で話し合い、教育課程の改善・充実につなげたい。結果は反映できるところから、次年度の教育課程（週時程表）に盛り込んでいきたい。 〈授業時間の設定について〉 （1）趣旨とアンケート状況 ・本来行うべき 50 分授業の実施、現状の 45 分授業の実施、条件付きでの 50 分授業などの様々な意見がある。 ・50 分授業を実施するのであれば、寄宿舎や厨房の関係が問題となってくる。確認しているところでは、女子生徒の登校時間 8：35 から 8：25、男子生徒の登校時間 8：40 から 8：30 と、登校時間の 10 分間の変動が可能である。また、通学生の登校時間に関しては影響ない。給食時間では、12：10 から 12：15 の 5 分間の変動が可能である。生徒が登校後から給食時間を除くと流動的に変更は可能であることを了承してほしい。 ・50 分授業を行う中で、休み時間を設けるためにはどのような工夫が必要なのかを考えてほしい。現行では、2 校時目と 3 校時目の間に 5 分間の休み時間を設けている。 ・5 分間の授業時間を延長することで、どのような教育的効果があるのかを考えてほしい。 作業学習などで考えると、3 学年の水曜日の 1 校時から 4 校時の授業が現行の 185 分間から 200 分間の時間を確保できる利点がある。しかし、教科などの 1 コマのみの単発授業を行うときには移動時間などのデメリットがあるため、対応策が必要である。 （2）グループ別意見交換 ○1 グループ ・50 分授業と 45 分授業の 2 つの意見が出た。50 分授業では長い時間取り組むことで働く力を身につけることができるのではないか、45 分授業では休み時間を 5 分でも確保できた方がよいのではないか、教科であると 45 分授業で十分であるという意見が出た。今後、教科の時間が増えることになれば、50 分授業の中でメリハリをつけた授業が大切になり、指導者の力が必要となってくるのではないかと結論になった。 ○2 グループ ・不測の事態の対応を考えると 50 分授業がよいのではないかと意見が出た。50 分授業となると、更衣	

などの学習時間以外の時間が短くなることが懸念される。朝の登校をジャージ登校にするなどを視野に入れなければならないのではないか。

- ・休み時間は、生徒指導や移動教室などに活用していることもあり教員側の裁量になる。

○3 グループ

- ・45分授業がよいという意見が半数を占めた。45分授業では、移動時間を含めた休憩時間を設けることでメリハリがつくため必要であるという意見があった。50分授業としても、45分の授業を実施し、5分間で移動時間に充てるという考えもあるのではないかという意見があった。

○4 グループ

- ・50分授業がよいのではないかという意見が占めた。5分間を確保することが生徒への還元につながると思う。現在45分授業を行っているが、45分間の授業時間を確保できていない現状がある。休み時間はあれば生徒のためにはよいと考えている。

○5 グループ

- ・1コマの授業であると45分授業は短い、2コマ以上続く授業での50分授業は効果的ではないか。教員側の授業の組み立て方が重要になってくる。弾力的に授業を組み立てられるところが特別支援学校のよいところである。本校の実態を踏まえた上での授業の組み立て方を行っていくことが大切である。また、更衣やトイレの時間などの休み時間を確保していくべきではないか。

〈教科学習（国語、数学）について〉

（1）趣旨とアンケート状況

- ・1時間のみでは不足、何らかの理由で無くなってしまった場合は補填してほしい、2時間は必要だという意見が大半である。

○1 グループ

- ・増やした方がよいという意見が多い。国語と数学は働くためには必要な力であり、継続的に行い、定着させるには2時間は確保すべきであると考えられる。必要に応じては、放課後の活用も視野に入れるべきではないか。
- ・教科の時間が増加すると、何らかの授業は削らなければならないが、生単が対象ではないかと考えている。生単の内容を今一度、精査を行い、コミュニケーションに関わる分野は国語に含まれてもいいのではないか。また、既存学科と生活科のすみ分けも必要ではないか。

○2 グループ

- ・現在は、学問としての教科よりも社会生活に属したものが多く、系統的よりは単発的な内容ではないか。教科を増やすよりも生活する力を伸ばすことが大切なのではないか。また、作業学習との関連づけることも大切である。教員側の質の高い授業に重点を置いた方がよいのではないか。

○3 グループ

- ・現状のままでよいと考える。定着を考えると、4時間の確保がなければ難しいのではないか。現状では、計算ができてはかりを使用できないなどの生徒が多いように感じる。定着させるという観点で考えると、朝学習の導入がよいのではないか。登校時間を早めることで毎日実施すると5時間の確保ができるのではないか。

○4 グループ

- ・系統的な授業ができていないのが現状である。クリアするためには、2時間が必要ではないかと考える。国語と数学は就労で必要であり、その2時間を確保するためには、体力づくりや作業学習の時間を削る

ことになるのではないか。

○5 グループ

- ・2時間を確保するためには、現在の授業の中から2時間削ることになる。美術、体育、生単、作業学習が対象となるのではないか。
- ・時間を増やす前に、まずは国語と数学を時数通りに1時間しっかりと確保することが重要ではないか。確保できた上で、やはり時間が不足しているようであれば時数を増やすなどの話し合いを行うべきではないか。

〈「情報」や「職業（キャリア）」などの新設教科について〉

(1) 趣旨とアンケート状況

- ・まずは新設教科の必要性の有無について討論していただきたい。
- ・導入を仮定すると、1時間の単発の授業となるため継続性が必要となる。
- ・次年度からは時数カウントを開始する。何らかの理由で無くなってしまった場合は補填することを考えている。
- ・現1学年では、「職業（キャリア）」を総合の授業で行っている。現1学年は3年間継続して行い、どのような成果があるのかを見ることも必要なのか、もしくは、総合とは別に行った方がいいのかなどを含めて話し合ってほしい。現2学年は現行のまま生単で行うこととする。
- ・新設教科を設けると、必然的に時数が削られる教科が生まれる。現在検討しているのは、作業学習と体力づくりである。3学年は、作業学習を11時間から10時間、体力づくりは4時間から3時間。2学年は、作業学習を10時間から9時間、体力づくりを5時間から4時間。1学年は、作業学習を10時間から8時間、体力づくりを5時間の継続を考えている。水曜日の7校時目の委員会活動を授業とする。委員会活動、全校集会、HRを1つの時間として使うことを考えている。

(2) グループ別意見交換

○1 グループ

- ・「情報」ではローマ字、タイピング、情報モラルを学ぶ機会があり、よいのではという意見が出た。情報モラルを取り入れることで生徒指導にも役立つとも考えている。反面、就労先で必要な場面が無いために取り入れなくてもよいという意見もある。
- ・「職業（キャリア）」では、単発ではなく継続的に行うことが大切であり、1学年の総合の時間を使用して行ったことでどのような効果が見られたのかを知ることが必要ではないか。
- ・他の教科が入ることでは何らかの教科が減ることになるが、本校では作業学習を売りにしていることもあり、作業学習を減らすことに疑問を感じている。

○2 グループ

- ・「情報」は必要だという意見があった。PC操作よりも情報モラルやマナーなどのトラブル防止の観点からの指導が大切ではないか。PC操作については、就労先で必要な生徒のみの個別対応でよいのではないか。
- ・「職業（キャリア）」も必要であるという意見があった。将来設計や将来について見通しをもてるということはよいことではないか。ただし、1時間などの時間を設定するのではなく、卒業間近のような期間限定的で、短期設定のように集中的に行うのはどうか。

○3 グループ

- ・「情報」や「職業（キャリア）」に関しては、はじめに生単の単元で設定し、有効的だと判断できた場合

に教科として設定してもよいのではないか。

- ・「情報」は、生徒の実態に合わせて携帯電話について取り扱った方がよいのではないか。

○4 グループ

- ・「情報」は、卒業生の実態などを踏まえて情報リテラシー教育が必要ではないか。1年間の実施ではなく半期での実施でもよいのではないか。
- ・「総合」は、卒業生の離職率を考えると、3年間の系統的な指導を行っていくべきではないか。

○5 グループ

- ・「情報」は、Lineなどの生徒指導上の問題も起こっていることもあり授業の一環として取り組むことが必要なのではないか。また、どの教員が指導を行い、年間計画を立てるのかというハード面だけではなくソフト面でも課題があるのではないか。
- ・「職業（キャリア）」は、生単とのすみ分けが必要となるのではないか。

〈総括〉

- ・「情報」や「職業（キャリア）」については、「情報」と「職業（キャリア）」の両者を半期ごとで実施することも検討している。
- ・新年度からどのように運用できるのか、2学期いっぱい意見集約を行っていききたい。教科を実施するにあたり、免許保有者の力が必要となってくる。全職員で協力して行っていきたい。
- ・次回の教育課程全体会議でも活発な意見交流を行っていただきたい。

上記のとおり会議を開催した。

平成26年 11月 7日

北海道今金高等養護学校長 高嶋 利次郎 印

平成 26 年 教育課程全体会議 2 議事録

開催日時	平成 26 年 11 月 28 日（金） 14 時 00 分～15 時 45 分
会 場	本校格技場
運営者の説明および出席者の意見交流の事項	
〈教育課程全体会議にあたり〉 ・ 前回の会議の結果を受けて、他校と比較しながら「今金高等養護学校として」どのようにしていきたいのかという観点を持ってほしい。 ・ 指導者の利点も大事だが、「生徒にとって何が一番良いのか」、「卒業後のイメージを持って」検討してほしい。 ・ 全職員で教育課程について考えてほしい。 【検討 1 単位時間の設定について】 <原案> ・ 現行の 45 分授業から 50 分授業の実施とする。 ・ 資料の裏面参照。以上から 50 分授業が実施可能である。休み時間の確保はできていない週時程表となっている。新篠津高等養護学校、札幌高等養護学校、中札内高等養護学校、雨竜高等養護学校、伊達高等養護学校の 5 校で実施している。 ・ 本来なら、運用の観点から考えなければならない。資料の裏面を参照すると、1 学年の水曜日だと 1 コマ続きの授業となっている。フルに 50 分授業を行うと、次の授業に支障をきたすことになる。そこで、45 分授業の実施、5 分の移動や更衣などの時間を確保するというような前後の授業での配慮が必要となってくる。これは、職員間で周知していかなければならないことになる。 <意見> ・ 移動や更衣の時間の確保ができるのかが心配である。（岩城 t） ・ 移動時間などが確保できるのであれば問題ないのではないか。（野呂 t） ・ 資料の週時程で特に問題がないのではないか。やれと言われたらやります。（鈴木貴 t） ・ 現行の 45 分授業がよいのではないか。移動や更衣の時間を別に設定してほしい。（工藤 t） ・ 教務（学校側職員）の勤務時間に変更になるのが、個人的には好ましくない。 生徒の登校をジャージ登校可にすると、朝の日生の時間を短縮できるのではないかと。 前任校で資料のような週時程で行っていたこともあり 50 分授業で支障ないと感じている。（祐川 t） ・ 正直、イメージがつかない。一度変更してしまうと、またすぐに変更できないため、慎重さも必要ではないか。（小松 t） ・ 移動や更衣の時間が確保できるのであれば問題ないのではないか。（中川 t） ・ 登校時間を早めると作業学習が校外に出る授業が行いやすくなるのではないかと。 運用上、45 分授業となると思うが、卒業生を見ているとチャイムを使った生活をしていることが多く感じる。1 回のチャイムで始業と終業を意味することになると生徒が混乱するのではないかと。 45 分間でチャイム（終業）、その 5 分後にチャイム（始業）をしたらよいのではないかと。（近藤和 t） ・ 中学校で 50 分授業を実施していることもあり、実質 45 分授業になってしまうが 50 分授業に設定したいと考えている。現状にすると、40 分授業で 5 分間の移動や更衣の時間の確保となってしまう。（金子 t）	

- ・現状の45分授業でよい。1校時目の授業に合わせた服装での登校でもよいのではないかな。
今後、作業服以外の服装での配膳となることも考えると、朝の更衣についても考え直してもよいのではないかな。(後藤 t)
- ・現状と暫定の時間割の日生に使っている時間は同じであるが、現在も不備を感じているということなのだろうか。そうであるならば、理由を聞かせてほしい。(金子 t)
- ・50分授業に対して、生徒や教員が対応できるのか。(後藤 t)
- ・前後の授業によって、早めに終了することや考慮した授業内容にすると教えた中身を減らしている。
チャイムがあればメリハリはつくが、作業学習などを行っているときにチャイムが鳴ると困惑するのではないかな。(山口 t)
- ・清掃時間が曜日毎に異なっていることが気になる。50分授業実施の際に教員側のおさえが必要となるが、本当におさえてもらえるのだろうか。50分間フルに活用した授業をしてしまうことがあり得るのではないかな。(初山 t)
- ・移動時間などを含めた50分授業であればよい。50分授業になると、更に細やかな指導ができるのではないかな。(石黒 t)
- ・50分授業を実施し、教員側で移動時間などを確保すればよいのではないかな。チャイムに関しては、作業学習中に鳴ったとしても、それで集中力が切れるようであれば社会に出ても困る。チャイムがある・ないに関わらず集中できるようになってほしい。(田中 t)
- ・50分間フルに授業を行ってしまうことに心配を感じる。教員側でしっかりと時間を守ることが大切ではないかな。(佐々木 t)
- ・50分授業がよいと言われているが、45分授業でよいと感じている。生徒の実態を考えると、明確にした移動や更衣の時間を設定した方がよいのではないかな。50分間にそのような時間が含まれてしまうと、生徒が動きにくいのではないかな。(泉谷 t)
- ・給食時間や日生の時間などの支障がなければ50分授業でもよいのではないかな。チャイムを鳴らすことで1コマずつ行う授業だとけじめをつけられてよいのではないかな。(高橋 t)
- ・50分授業を実施しなければいけないのであれば、始業はチャイムを鳴らすと統一すればよいのではないかな。チャイムが鳴って動くのではなく、時間割を考えて時計を見て判断できるようにならなければいけないのではないかな。(山田 t)
- ・50分授業の実施でよい。寄宿舎の日課と照らし合わせて、落ち着かないまま登校することにならないようにした方がよいのではないかな。(小林睦 t)
- ・50分授業を実施することで生徒に成果が出るのであればよいのではないかな。(出村 t)
- ・45分授業でよい。始業のチャイムはあった方がよい。(藤倉 t)
- ・職員間でしっかりと時間をおさえるような流れになっているが、現在でもしっかりとおさえられていないこと、新任者が来ても理解できるのだろうか。(林谷 t)
- ・朝の落ち着かない日課で、消化不良のまま登校するような生徒が増えないか心配である。(橘 t)
- ・給食時間が遅れている現状から本当に暫定の日課でできるのかが疑問である。(吉本 t)
- ・50分授業の実施でよい。暫定の週時程表での体力づくりで50分間を確保されているが、現状では確保されている時間いっぱい行っていないため、体力づくりで50分間を確保しなくてもよいのではないかな。(青山 t)
- ・現状では体力づくりの中で更衣の時間を含めてできている。体力づくりが終了後の時間は日生の時間として届け出している。(金子 t)

- ・ 1 コマの授業を効果的に行うためには 50 分授業であった方がよい。(松本 t)
- ・ 週 1 コマの授業だと定着ができていない現状がある。50 分授業でよいのではないか。(阿部 t)

<まとめ>

- ・ 50 分授業の運用だと 45 分でチャイムを鳴らして 5 分間で移動などの時間に充てるという形になることが考えられる。45 分授業のままでいくと、40 分でチャイムを鳴らして 5 分間で移動などの時間に充てるのか、もしくは現状のように 45 分間連続した週時程でいくのか検討が必要となる。(金子 t)
- ・ 体力づくりでは、内容の精査が必要となってくるのではないか。現状では、35 分間ぐらいの時間を充てている。カウントの仕方を小平高等養護学校のようにするべきなのか検討が必要となる。(金子 t)
- ・ 最終的にはチャイムの有無に関わらず、生徒自身が動けるようにしていかなければならない。(佐藤教頭)

【検討 2 教科学習（国語・数学）について】

<原案>

- ・ 現状の週 1 コマから週 2 コマに増やす。
- ・ 週 1 コマに毎朝または帰りに 10～15 分間の時間を確保して継続的な学習時間を設定する。継続的な学習時間を設定すると、体力づくりの運用方法を変更することになる。

<意見>

- ・ 教科学習の担当教員を中心に意見を述べてもらいたい。(教頭)
- ・ 無いよりはある方がいいのかもしれないが、朝などの学習時間を設定すると中途半端な内容しかできない。(山田 t)
- ・ 朝などの学習時間だと、学級や個人によって能力や実態も異なり過ぎる。問題を解いて解答までできるかが疑問である。また、教材を用意する教員の労力が大変である。むしろ、週 2 コマに増やす、特別日課の中で教科の授業時間を確保してほしい。(山口 t)
- ・ 朝などの学習時間で問題が解けるのか、それをする中で生徒の喜びがあるのだろうか。週 2 コマの方が効果的なのではないか。(田中 t)
- ・ 習熟度別の授業展開を行っているが、朝などの学習時間では習熟度で行えない。それよりは、週 2 コマに設定し、1 時間目は基礎時間、2 時間目は発展的な時間と分けて行った方がよいのではないか。(工藤 t)
- ・ 繰り返しの学習展開を行っているが、週 2 コマだと更に細やかな基礎から発展へと繰り返しの学習が行えるのではないか。(阿部 t)
- ・ 学校行事などから変更があり 1 カ月ぐらいのあいた時間ができたことがあった。週 2 コマにして定着するためには、担当教員の力量も必要になってくるのではないか。(野呂 t)
- ・ 現状だと単発で終了してしまうことや担当教員によることもある。週 2 コマよりも週 1 コマを充実させた方がよいのではないか。朝などの学習時間だと、新しいことを学習することは難しいが、繰り返しの学習はできる。(初山 t)
- ・ 朝などの学習時間は、何らかの形で活用できたらいいと考えている。朝の読書の時間などで活用できたらよい。(教頭)
- ・ 時数を増やせば良くなるのは間違いなのではないか。個々に応じた朝の学習時間は難しいように感じる。教材の準備など担任裁量に任せられるのは失敗に終わるのではないか。内容の精査、系統的に行うことが大切なのではないか。(渡邊 t)

【検討3 情報、職業（キャリア）の教科新設について】

<原案>

- ・情報は、授業の一環として行う。ハード面、ソフト面などを整備する。暫定的に3年生のみ実施したい。その反省を踏まえて次年度の検討材料とする。内容はワードやエクセルなどの技術面よりは情報リテラシーを重視した内容とする。
- ・職業は、生活単元学習の積み重ねがあるため棲み分けが必要。新2学年は、1年次の計画や結果を踏まえて行う。新3学年は、2年間の流れもあるので生活単元学習の中で取り組む。
- ・何が何でも実施するというわけではない。
- ・進路担当教員から、卒業してから困らない情報リテラシー、職業に特化することではないがコミュニケーション能力は必要であると聞いている。翌年1月16日の職員会議で進路担当から同様な話がある。

<意見>

- ・情報は必要だと感じている。（教頭）
- ・職業に関しては生活単元学習との関係性があるので、生活単元学習の担当教員との綿密な打ち合わせが必要になってくるのではないかと。（岩城 t）
- ・職業については、今までのやり方だと生活単元学習の中に組み込まれていたが、帯の時間帯でできると意識を持ち続けることができるのではないかと。（佐々木 t）
- ・総合に進路のことはいいが、指導者が限られる。3年間、生徒の様子を見てみないと分からない。（初山 t）
- ・総合という授業の中でしっかりと確保できることはよいが、時と場合によっては生活単元学習の時間に振り替えられることがあるため、計画的に行うことが大切になってくるのではないかと。（山口 t）
- ・情報の授業を指導するのは学年になるのか。現在、情報免許保持者がいるから年間指導計画を立ててもらえるが、免許保持者が異動して誰もいなくなってしまった場合はどうなるのか。維持できるのか。保護者や進路担当者から求められていることもあり、やらないということにはならないと思うが、生活単元学習の中で十分に教えることができるのではないかと。専門的な知識がある教員が計画を立案してもらるのであれば、できる範囲では指導できると思う。数年後を見越して計画的に行うべきである。（渡邊 t）
- ・難しい部分があると思う。授業に組み込まれているなら、誰が指導者にあたってもやらなければならない。教科になるのであれば、しっかりと計画的に行わなければいけない。教育課程の見直しの時期かもしれないが、職業については現在の1学年の様子（残り2年間）を見た方がいいのではないかと。（鈴木貴 t）
- ・情報については、技術面、情報リテラシーなどの線引きをしっかりと行うべきではないかと。現在の配属クラスや卒業生（担当クラス）の生徒を見ても、生活単元学習やLHRの中でも対応できるのではないかと。全生徒にとって必要なことなのか疑問を感じる。選択制を導入してもよいのではないかと。例えば、3学年を数学1コマ、情報1コマみたいにしてもよいのではないかと。キャリア教育は必要であるが、情報の導入については迷いもある。
- ・携帯電話などの情報機器の扱い方を知るべきではないかと。（後藤 t）
- ・教科として必要となると、3年間必要だとなるとどうなるのか。（祐川 t）
- ・教科指導が主になると生活単元学習が削られる。美深高等養護学校のように、社会科と理科が合同になった「くらし」の授業のように位置づけられているのであれば生活単元学習でよい。通年でやらなければならないのであれば、毎週必要であり教科として必要になってくるのではないかと。見切り発車や実施

して難しかったからやめるでは行えない。生活単元学習の運用で変更できるのであれば、性の指導などに特化できればよい。段階を踏むべきところで踏まないといけない。その中で、折れる部分と折れない部分がでてくる。3年間必要であれば、作業学習や体力づくりも削減対象になってくる。(金子 t)

- ・平成27年度 北海道立特別支援学校高等部(知的障害)生徒募集要領を参照。「障害の程度が比較的軽い学科(障害の程度は比較的重い学科)では、各学科の特色を生かした作業学習を中心に行うとともに、体力づくりにも力を入れた指導を行う。」と記載されている。作業学習を中心とし、体力づくりにも力を入れた指導が必要となる。ただ走るのではなく、エアロビやサーキットなどを上手く発展させることが大切になってくる。働くために必要な体力とは何なのかということを全職員の意識が大切なのではないかと。社会状況を考慮し、クローズアップしながらやっていくことが必要になる。(金子 t)
- ・情報は技術面のイメージが強い印象がある。情報リテラシーの部分は道徳のイメージがある。(林谷 t)
- ・1コマというと年間35時間の時数を意味しているため、中学校の技術家庭科の情報に近いものをイメージとして持っている。進路担当者がどのようなものを求めているのか見えてこない。(田中 t)
- ・情報リテラシーは必要だと思うが、年間35時間でどのように教えていけばいいのか。卒業生が困っているということは、今までの指導に不足していた部分があったということになる。実施することになればしっかりと行わなければならない。(野呂 t)
- ・なぜ情報を3学年で実施するのが疑問である。3学年での実施になるとその効果が感じられないのではないかと。むしろ見切り発車になってしまう部分があるかもしれないが他校のように1学年で実施した方が様々な面が見られていいのではないかと。ただし、中身や内容をはっきりしないと何とも言えない。(渡邊 t)
- ・自分の担当クラスの生徒が、企業から出された資料を見て実際に資料を作成できるぐらいの技量、パンフレットの作成やレジ打ちぐらいのできるまでの技術を身につけてほしいと言われたことがある。(岩城 t)

【総括】

- ・検討1と2に関しては、方向性が見えてきた。
- ・検討3の情報や職業に関してはまだ議論が必要である。
- ・次回の全体会議は12月12日(金)に実施。今回の内容とプラスとして検討したいことがある。
- ・多くの職員で意見を述べることで様々な観点が生まれてくる。遠慮せず意見や考えを述べてほしい。

上記のとおり会議を開催した。

平成26年 11月 28日

北海道今金高等養護学校長 高嶋 利次郎 印

平成 26 年 教育課程全体会議 3 議事録

開催日時	平成 26 年 12 月 12 日（金） 14 時 00 分～15 時 45 分
会 場	本校格技場
運営者の説明および出席者の意見交流の事項	
〈教育課程全体会議にあたり〉 ・今回は 1 時間内で話し合いをして欲しい。 ・アンケート→1 回目会議→2 回目会議で検討した。全体で共有して作り上げていく形である。 ・意見の多いものを取り上げて進めていくが、育てたい生徒像を出発点にして考えて欲しい。 【検討 1 授業時間の設定について 経過説明】 ・2 回目の全体会議のまとめが配布資料の内容となっている。 ・45 分+5 分を基準としたい。単発授業はこの扱いで、生単・作業はチャイム関係なく連続で行う。 ・チャイムの扱い：開始時、45 分後、開始時、以降繰り返し で決定したい。 【検討 2 国語・数学の単位設定について 経過説明】 ・2 単位時間必要の意見が多かったため、2 単位時間で決定したい。 【検討 3 情報、職業（キャリア）について】 <原案：職業> ・今までの形で運用して、1 年生の形を検証してから教科にしてみても良いのではないかな？ ・新 1 年生は、今年同様。新 2 年生は、1 年生で実施した内容を検証。新 3 年生は、今までの生単を積み上げて行う。 <原案：情報> ・担当する教員の負担過多になる。生単の題材として、3 年間進めてはどうか？ ・これまで出張で参加できなかった、進路担当の意見も取り入れたい。 <意見：進路 上村 T> ・卒業生の実態把握の調査研究をしている最中であり、それを踏まえて提案する。 ・職業について：今までの学習で卒業生に問題が出ているのではない。コミュニケーションが原因で問題が発生している。今の授業の手法を見直すのが良いと思う。授業の工夫で生徒の力を上げていくのが良いのではないかな。 ・総合での進路学習は検証されていないため、身についているか不明。現場実習、個別実習での生徒の意識が変わっているのであれば、効果があると思う。その効果は単年ではなく、複数年の検証が必要。 ・スマホでのコミュニケーション力が喫緊の課題。パソコンソフトの操作は進路先から多く求められているのではない。今はそれではなく、スマートフォン対応が必要。 ・情報が教科か生単かは判断できないが、指導はして欲しい。若い先生の経験が指導に生きると思う。 ・女子生徒の性に関する問題が起きている。異性関係を今以上に指導して欲しい。	

<意見>

1 G 職業：生単で良い

情報：生単で良い。

2 G 職業：科目を起こすと見切り発車になると思う。生単の教材として検討しなおすのが良い。

情報：技術ではなく、スマートフォンのコミュニケーション力が必要。生単への組み込みが良い。

3 G 職業：1年生の総合のままで良い。

情報：科目で立ち上げると免許取得者がいないと困る。3学科まとめた授業は大変。生単で良い。

4 G 職業：今の1年生の総合の形で良い。

情報：学校が携帯電話禁止のため、情報教育が難しいと思う。生単で良い。

5 G 時間：国数はこの形で申請できるのか？中身は45分間を生徒にも伝えるのか？朝読書は効果があるのか？朝はペン字とかも良いのでは？1年生にまとめた形でも良いのでは？国数を増やし、生単、作業の時間を削るのはいかななものか？

教頭 ・朝読書は、単位時間に組み込まない。朝読書の効果はある。

<まとめ>

- ・総合的な学習の時間は、中身の精査が必要。教務側で行う。 $+\alpha$ を検討する。
- ・時間割の29コマは他校も同じである。
- ・今金の強みは何か。作業で仕事する力、体力づくりで体力をつけていることではないだろうか。
- ・作業学習の時間確保のため、国数2単位は生単を削っている。あとは、どこを削るか？
- ・どこを強化するのか？学校としての到達目標はどうやって達成するのか？が、課題である。
- ・生単部会で、中身の精査が次年度必要。職業で教えようとしていた中身を検討しなければならない。
- ・作業部会で、作業時数を検討する必要がある。参考として、あいべつ高のデュアルシステムについて（火曜日に実施し、すぐに反省し、来週の火曜日に生かす、という形で進めている）

【検討4 その他検討事項】

<原案>

- | | |
|--------------|----------------------|
| 1. 委員会活動のあり方 | 本来は課外活動。今後の実施方法について |
| 2. 部活動について | 活動時間をどうするか。週1、2、毎日など |
| 3. 授業担当者について | TT人数は適切か |

<意見>

1 G

1. 継続。中身やあり方を検討すべき。生徒の自治的活動を重視したほうが良い。
2. 顧問と部活動の数、内容も見直しが必要。（顧問：ボランティアでしているのをなくす。）
3. 授業は基本的に指導者1人だが、家庭科にはST必要。たとえ、生徒が困っていてもその生徒が対応できる力を身に付けさせる指導をしていくのが良い。

2 G

1. 月1でも良いので確保。全学年で学年学科の関わりなく活動できる時間は重要。
2. 部活によって、週1か2の選択制で良い。
3. 作業、国数はST必要。生単は、全体学習時には1人、G別は複数など柔軟な形で良い。

3 G

1. 放課後実施の場合は、必要な委員会を精査する必要がある。
2. 各部で検討する。
3. 必要に応じて変更する。

4 G

1. 原案通りで良い。
2. 週1で良い。
3. 個に応じた指導が必要のため、学年ごとに対応が良い。

5 G

1. 通知票の表記はどうなるのか。進路部の話にあったコミュニケーション力は委員会で学べると思うため、必要。
2. 顧問の決め方から考えたい。現在の決め方では、部活動が消滅するのでは？
3. 授業の中身によってT Tが必要だと思う。内容に合わせて、弾力的な運用が良い。教員の個の意識改革が必要。

<まとめ>

- ・教頭 2. 顧問のボランティア精神の体制は変えたほうが良い。教員全員がどこかを担当する。全体で生徒の指導に当たるのが良い。
- ・次は12月25日。それまでに必要があれば、会議日程等調整する。
- ・最終的には28年度1間口増に向けて、変えていく。

【全体として】

<意見>

泉谷T ・今回は、検討3職業と情報を話し合ったが、検討1、2は、検討していないがどうなのか？
・1はいいが、2は多数意見ではなかったと思うが、どうなのか？

教頭 ・最終決定は、職員会議→校長決済。最後決めるのは、校長である。

泉谷T ・職員会議へ提案する形は、どうなるのか？

教頭 ・今の提案かもしれないし、変わるかもしれない。

渡邊T ・これで決定ではなく、今回の協議内容を組み入れてもらえるのか。

金子T ・グループ別で考えた多数意見として捉えている。国数2単位は全体として必要と捉えているのではないだろうか。

泉谷T ・全体の意見を反映させて欲しい。

金子T ・1. 5単位など、弾力的な運用もできるが、どこかで線引きしなければならない。

教頭 ・大多数の意見で組み立てていかなければならない。求めているが、必要があれば対案を出して欲しい。何かあれば、いつでも聞く。

上記のとおり会議を開催した。

平成26年 12月 12日

北海道今金高等養護学校長 高嶋 利次郎 印

開催日時	平成 26 年 12 月 25 日（木） 10 時 10 分～ 11 時 35 分
会 場	本校格技場
運営者の説明および出席者の意見交流の事項	
【教育課程全体会議にあたり】 ・今回、教育課程全体会議は最終回となっている。 ・再来年度（H28）の間口増は 9 割方可能性として高いため、「無理せず、できることから、ちょっとずつ」変更していきたいと考えている。 【①授業時間の設定について】 〈確認〉 ・1 単位時間 50 分（45 分－5 分）。5 分間の休憩時間。50 分届出をする。 ・始業、終業のチャイムを鳴らす。現行よりもチャイムが多くなる。 〈質問・意見〉 ・特になし。 【②国語・数学の単位設定について】 〈確認〉 ・時数を増加する。各 2 単位に設定もしくは学年別での対応。 ・基礎基本の定着を図り、生活するために必要な国語力、数学力を身につける。 〈補足〉 ・全国的に学力の向上が求められている。（教頭） ・現在、1 単位で設定されているが、前回は 2～3 週間前に実施などしっかりとした確保が行われていない。教科学習をしっかりと行うことは大切である。（教頭） ・各学年 2 単位で設定すると、どこかの教科の授業が削減されることを了承してほしい。作業学習は本校の教育活動の中で重要視されていることもあり削減対象にならない。体力づくりでは、しっかりとした働くための体をつくる必要があると考えている。以上のことなどを考慮すると、しわ寄せは教科にくることが考えられる。詳細は、教育課程委員会で検討したい。（金子 t） 〈質問・意見〉 ・水曜日の体力づくりを無くして時数を増加させればよいのではないかと。週 5 から週 4 に変更したことで体力が落ちるとは考えにくい。（田中 t） ・各学年別での対応であると助かる。作業学習を担当して、作業学習の中に教科学習で学んだことを生かす場面を設定していることもあり、作業学習の時間は現状のままであってほしい。生活単元学習も減らすことは現実的に厳しいのではないかと。2・3 学年は弾力的な対応で、1 学年は各 2 単位で行ってもよいのではないかと。（近藤和 t） ・1 学年は教養を学ぶという観点で 2 単位、2・3 学年は流動的な対応を取り入れてほしい。（中島 t） ・学校行事などの特別日課の振替の時数カウントはどのようになるのか。（矢倉 t） → 年間 35 時間は確保したいが、2 単位だと年間 70 時間の確保は他の教科の時数との関係もあるため絶対確保できるとは言えない。現場実習期間は、作業学習でカウントしている。その期間の教科の時数確保は現実的に難しい。（金子 t） ・特別日課のことを踏まえて、単位設定を行ったほうがよいのではないかと。（野呂 t）	

- ・現在、年間35時間を確保できているとは言えない。前回は2～3週間前ということもある。そのような中で前回、学習したことを身につけているとは言えない。2単位に設定しても、実際は1単位分が確保できるのかも保障はない。(教頭)

※1単位＝年間35時間分の届出。本校の現状は正式ではないが20時間ぐらいかもしれない。

2単位＝年間70時間分。体育や美術などが該当する。

3年間で1050単位の履修をしなければいけないという規定がある。

【③「情報」について】

〈確認〉

- ・教科で特出して実施しない。
- ・生活単元学習で3年間配列を組み実施する。
- ・内容は情報リテラシー、モラル、携帯電話などの情報機器による危険の理解などを行う。
- ・LHRでも題材に触れながら行う。

〈補足〉

- ・当初は、教科として1単位を考えていたが、生活単元学習の中で実施することになった。(教頭)
- ・1年間で準備期間としH28から実施する。来年度は、実施している他校の資料を取り寄せて参考として内容を精査していきたい。次年度は暫定的に実施を考えている。(金子 t)

〈質問・意見〉

- ・生活単元学習の内容が濃厚になり大変になることが予測される。担当しているクラスが来年度は3学年に進級することもあり、1年間で求めている力まで到達できるのかが不安である。(鈴木貴 t)
- ・生徒は携帯電話などに興味・関心があるため、情報リテラシーやモラルは必要ではないか。配列など、どのように生徒に伝えられるのかが大切になってくる。(岩城 t)
- ・1学年でどこまでの力が必要なのかは、個々の実態によって異なる。実物を活用したいが、校則では持ち込みを禁止していることもあり、どのように指導していくのかを悩む。特別日課との関係も考えて実施してほしい。(山口 t)
- ・原案通りでよい。進路状況をみると技術的なものを必要としている者は少ない。インターネット上のトラブルが増加しているため、情報リテラシーやモラルは必要だと考えている。生徒指導部でも考えていく必要があると認識している。(小原 t)
- ・原案通りでよい。卒業生の実態を考えると必要であると考えている。(小松 t)
- ・将来的には教科になることがあるのか。(祐川 t) →現状では何とも言えない。(金子 t)
- ・生活単元学習の中で実施する中で、授業時数を削減するのは厳しいことがある。(祐川 t)
- ・まずは生活単元学習の中で実施してみてもよいのではないかと。日常生活の中で、携帯電話などを当たり前で使うことが増えることが懸念される。そのようなときがきたときに、生活単元学習の中で学ぶべきことができなくなるのではないかと。内容の精査が必要になってくるのではないかと。(小林和 t)
- ・教科として新設するのか、生活単元学習の中で行うのかのメリットについて考察したが、教科として1単位にすると週1の時間が確保できる。生活単元学習の中で実施すると一定期間の中でしか学ぶことができない。誰が、どのように、どこまで何を教えるのかということが大切になってくるのではないかと。(野呂 t)

【④職業（キャリア）について】

〈確認〉

- ・総合的な学習の時間で、今年度の評価・反省を踏まえて1学年のみで実施する。

- ・ 2・3 学年は生活単元学習（進路学習）中で実施する。題材配列の見直しが必要になる。

〈質問・意見〉

- ・ 原案通りでよい。1 学年で実施してみて評価を行う。来年度の 1 学年で再度実施する。（上村 t）
- ・ 原案通りでよい。現在、生活単元学習のみで実施しているが不都合を感じたことはない。ただ、総合的な学習の時間で実施しているのも見てみたい。（鐘ヶ江 t）
- ・ 生活単元学習の会議で成果が出ていると聞いているため、原案通りでよい。（高橋 t）
- ・ 1 学年の様子を見てみないと分からないが、原案通りでよい。（村瀬 t）
- ・ 実施しながら、2・3 学年のことを計画することは大変なことである。計画を立てるのではあれば、じっくりと考えていく必要がある。時間的な余裕を持つことは必要ではないか。原案通りでよい。（田中 t）
- ・ やって見ないと分からないのではないかと。原案通りでよい。（大田 t）
- ・ 実際に 1 学年で職業の授業を担当しているが、メリットは帯で実施することで、生徒も教師も常に進路のことを考えることができる。普段の生活の中でキャリアの意識を持てる。ただ、準備は大変である。働くことだけではなくキャリア教育の一環である生きていくための力を身につける、人生を考えることを取り入れることが大切なのではないか。（矢倉 t）
- ・ 新 2 学年でも試しにやってみることで更に検証できるのではないかと。構想としては、5 月の現場実習について学び、ソーシャルスキルを取り入れてコミュニケーション能力をつける、個別実習を経験した先輩方の成功や失敗体験の話聞く、1 年前の自分と見比べてみる、そして進路希望調査を行いたい。3 学年では、1・2 学年では足りなかったところを補う形にしたい。予測としてはコミュニケーション能力をつけることが考えられる。社会で必要な力を身につける学習、労働教育、卒後支援、手帳、情報モラルなどを学ぶことを考えている。継続的に行うことが大切ではないか。（矢倉 t）

※⑤～⑦に関しては、まとめて討議することとなった。

【⑤委員会活動について】

〈確認〉

- ・ 時数増加と委員会の意味を踏まえると現行通りには行えない。
- ・ 帰り S H R 後に設定。
- ・ 基本は月曜日の放課後に実施、担当分掌で決定してほしい。
- ・ 通知表は課外活動と押さえ、本来は所属だけの記入。
- ・ 委員会担当者の選定を考え直す必要がある。

【⑥部活動について】

〈確認〉

- ・ 委員会活動との兼ね合いもあるが、月曜日と木曜日の週 2 回実施が可能。
- ・ 部活動の顧問はボランティアではなく、各部に全職員が配置できるようにする。
- ・ 会議日は火曜日と金曜日とする。
- ・ 次年度の会議は、職員会議、運営協議会、学年部会、学科部会、分掌部会は教務部で設定する。教科部会、形態部会、衛生委員会などの各種委員会は担当者間で適宜設定することになる。

【⑦朝の時間の使い方について】

〈確認〉

- ・ 朝の学習で取組める内容とする。

- ・国語や数学にすると、短時間で習熟度別のグループ学習のような効果的な指導は見込めない。
- ・HR単位で実施。

〈質問・意見〉

- ・個人的には、職員会議と運営協議会の2つの会議のみの設定でよいと感じている。
朝読書の資料は、参考資料として一読してほしい。(教頭)
- ・部活動がボランティアにしる、全職員の配置にしる、異動などで人の出入りの多い本校では、週2回実施となると、教師の本来の仕事となる授業づくりが疎かになるのではないかと。(野呂 t)
- ・委員会活動や部活動があると、担当する教員の負担が増加するのではないかと。担当者が重複しないような配置にしてほしい。(中川 t)
- ・朝の読書の取組みはよいのではないかと。自分の興味・関心を持って、情報の共有ができるのではないかと。(小林睦 t)
- ・朝の読書を実施すると、漢字が苦手な生徒に平仮名の本を読ませることを薦めると生徒のプライドを傷つけることもあり、読書は良いことではあるがツールとしてこだわる必要性はないのではないかと。生徒の実態もあるため、効果のある学年もあるのかもしれないが、朝の読書という縛りは必要ないのではないかと。朝の読書の時間は、漢字練習やHRの一つとして捉えてよいと聞いているため、担任が準備することになると大変になるのではないかと。(渡邊 t)
- ・現在、担当しているクラスでは、朝の時間を使用できるまで至っていない。各クラスに任せられるのはいいが負担が大きくなる。朝の学習は取り入れることはできると思うが、進級後は分からない。移動時間に余裕を持たせたい。(佐々木 t)
- ・現状のままでよい。朝の読書と決定せず生徒の実態に合わせてほしい。現在、担当しているクラスでは取り入れることはできるとは思う。(鈴木絢 t)
- ・現在、担当しているクラスで新聞記事について取組んでいるが、時間設定するよりは時間以外でできることが大切であると考えているため、時間設定しなくてもよい。(鐘ヶ江 t)
- ・漢字が苦手な生徒がいるからと言って、できないことをそのままにしておくことがよい訳ではない。図書室での借用、寄宿舎でのブックン利用を通しての借用、辞書を活用して調べてもよいのではないかと。また、字の無い絵本を活用し生徒達が内容を考えることもよいのではないかと。(後藤 t)
- ・資料に記載されているSHR含めた15分間での実施なのか。(渡邊 t)
→SHRの時間を増やし、体力づくりを0.7コマ(35分間)に設定し、更衣の時間を含めて考えていかなければならない。(金子 t)
- ・考え方や生徒の実態もあるため、読書する学級や漢字の学習を行う学級などの学校の特色ではなく学級の特色として捉えたらよいのではないかと。(矢倉 t)
- ・現状としては、作業学習の残業や日誌の記入などで部活動に参加できていない生徒がいる。部活動の有無ではなく学校の日課をしっかりと行えなければならない。そのような生徒がいると、全職員での部活動の指導ができるとは限らないのではないかと。(高田 t)
- ・教員側の熱意は大切ではあるが、今後、教育課程などの変化が考えられる中で部活動の時間や会議の増加があると負担が大きい。現状、時間外での会議設定なども多い中、負担を大きくすることはよくないのではないかと。(山田 t)
- ・委員会活動が月曜日の放課後となると、実際に部活動へ参加できるのは木曜日のみになるのではないかと。(矢倉 t)
- ・朝の学習は学級裁量でよい。学校としてのおさえは必要ではある。

会議は思いつきで行うと他の会議と日程が重なってしまうため、ある程度のルールが必要ではないか。(野呂 t)

- ・会議日程の設定のルールが必要な点は大切な視点である。普通高校では、校務支援システムを活用して実践している。(教頭)
- ・部活動の顧問がボランティアであると、担当に偏りが生じる。各部に何人と決まりがあると、急なことが起きても生徒対応ができる。(阿部 t)

【総括】

- ・教育課程は学校教育の根幹で大切なことである。今後も何らかの形でこのような会議を実施したい。(教頭)
- ・1月に粗方のことを提案する。(金子 t)
- ・外部研修などに参加された先生方は他校の実態と本校の実態と比べて本校だとどのように取組めるのかを考えてほしい。また、公立学校はどの学校に通学しても同じ教育を受けられることが特色ではあるが本校に合う、今金だからできる教育課程を作り上げたい。(校長)
- ・冬季休業期間中は、研修、休養、3学期に向けての準備に努めてほしい。交通安全には留意して過ごしてほしい。(校長)

上記のとおり会議を開催した。

平成26年 12月 25日

北海道今金高等養護学校長 高嶋 利次郎 印

週時程表 (案)

女子登校 8 : 25

男子登校 8 : 30 1 単位時間 50 分

勤務時間 8 : 20 ~ 15 : 50、16 : 50 ~ 17 : 05 職員朝会 8 : 20

休憩時間 15 : 50 ~ 16 : 50

清掃活動 月・火・木・金曜日は現行通り 40 分で清掃・SHRを行う。勤務時間の関係で水曜日清掃無し。

		月			火			水			木			金						
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3				
8:30 8:40	登 校																			
8:40 8:55	日生・SHR（0. 3）																			
8:55 9:30 9:45	1 校時	体力づくり (0.8) 更衣・移動(0.2)			体力づくり (0.8) 更衣・移動(0.2)			生 単	体 力	作 業	体力づくり (0.8) 更衣・移動(0.2)			体力づくり (0.8) 更衣・移動(0.2)						
9:45 10:30 10:35	2 校時	LHR 全校集会 2 月 1 度			音	作	国		国 語		業 学	作 業	作 業	音	数	作	数	作		
10:35 11:20 11:25	3 校時	国	作	生	生	業 単	生							国	生	生	生	生	生	業 単
11:25 12:10 12:15	4 校時	数	業 単	総	単		業 単	数		総				習	業 単	業 単	業 単	業 業		
		学		合				学	合	学	合									
12:15 13:05	給食・休憩・更衣																			
13:05 13:50 13:55	5 校時	他 学 科 作 業	美 術 ／ 学 生 単	体 育	美 術 ／ 学 生 単	体 育	作 業	総 合 作	作 業	音 楽 ／ 学 生 単	体 育	作 業	作 業	日生清掃 (0.8) SHR 13:45 下校 会議日 14:00～15:50 16:50～17:05						
13:55 14:40 14:45																	6 校時			
14:45 15:30 15:35	7 校時	日生清掃 (0.8) SHR 15:25 下校			日生清掃 (0.8) SHR 15:25 下校			業	業	学 生 単	日生清掃 (0.8) SHR 15:25 下校									
15:35 15:45 17:00		委員会実施日 部活動可能日			会議日 15:30～15:50 16:50～17:05						SHR（0.2） 15:45 下校						部活動 15:30～16:45			

第 4 章

調査研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

近年における卒業生の実態調査

～キャリア教育の視点を通じた教育課程の編成のために～

(2) 設定理由

平成24年度の課題研究で「キャリアプランニングを中心とした基礎的研究」が行われキャリア教育の学習が始まり、研究推進委員会が中心となって「今養版キャリアプランニングマトリックス」が作成された。そして、平成25年度には各種課題研究や教育実践研究が行われ研究を深めることができた。また、プロジェクト研究では教育課程検討委員会が中心となりキャリア教育の視点から「教育課程（行事）の見直し」のアンケートを行いその結果を総合的に考察して担当部署にその行事の課題を報告した。そして、教育課程検討委員会では、更に研究を深めるために卒業生の実態と意識調査を通して今後の教育課程の編成に役立てることを検討した。進路指導部では、毎年卒業生の活動を研修会で報告していたが改めて卒業生をとりまく環境の調査をまとめ、本研究を通してキャリア教育の視点を通じた教育課程の編成に寄与できるであろうと考え実施する。

(3) 研究の内容と方法

- 最近の卒業生の実態と就労状況や生活の様子をもとに調査する。また、本校での学習が卒業後の生活にどのようにかかわっているかを調査することによって今後の教育課程の編成に寄与する。
- 調査は進路指導部外勤者の聞き取りをもとに行う。その他にも青年学級、同窓会一泊旅行なども利用する。

(4) 推進日程

- 4月28日 第1回研究推進委員会：今年度の研修内容確認
- 5月8日 第1回進路指導部討議：今後月1回程度開催予定
- 7月1日 第2回進路指導部討議：開校来の就労者・離職者の実数把握
- 7月30日 第3回進路指導部討議：卒業生事例の選出
- 8月20日 第4回進路指導部討議：卒業生事例の一部確認、研究の進め方の確認
- 10月3日 第5回進路指導部討議：卒業生事例の報告・考察1
- 10月24日 全体研修（中間発表会）
- 12月1日 第6回進路指導部討議：卒業生事例の報告・考察2
- 平成27年1月16日 進路研修
- 平成27年2月10日 第7回進路指導部討議：まとめ
- 平成27年2月13日 全体研修（校内研究報告会）

2 研究のまとめ

(1) 離職率と離職理由

まず始めに、一般就労をした卒業生の離職について、その実態を調査する。

表1 本校の卒後3年以内離職率

①	過去15年（1～15期生）	36.6 or 40.8% ※退職年不明が3名いるため
②	過去10年（6～15期生）	35.8 or 39.6% ※退職年不明が2名いるため
③	過去5年（11～15期生）	30.0%
④	過去3年（13～15期生）	33.3%

①は軽い学科1間口、重い学科2間口だったころの卒業生を含んでいる。

②は平成14年に軽い学科2間口、重い学科1間口に学科転換をしており、その年の入学生が卒業した年からの数値。

③は平成21年に本校の教育課程が改定された翌年からの数値。

④は教育課程の改定した年の入学生が卒業した年からの数値。

本研究の目的を考えた場合、直近の③や④の数値で述べるべきだろう。ただし、本校の場合一般就労者数は年平均4.5名しかいないため、その少ない就労者数と退職者数で検討するのは本来誤差が大きすぎるので、あくまでも参考として考える。

1990年代前半から言われてきた言葉で、『753退社』というのがある。これは中卒・高卒・大卒生の卒後3年以内の離職割合がそれぞれ7割、5割、3割程度ということを指している。全国的には平成18年頃から『643退社』に言い替わっているらしいが、北海道は依然変わらないようである。そうであれば、本校は過去3～5年で3割程度ということから、本校では特別支援教育において、現在に至るまでの本校の教育課程や先生方の指導から、一定の成果をあげていることが読み取れる。

しかし、改めてこの本校の離職率の数値は誤差が大きいことや、入学年度により生徒の実態が大きく異なるため、離職率が高い低いといった数値ではなく、離職原因の本質を洗い出し、その中から教育課程の編成に取り入れる要素があるかどうかを探る必要がある。

そこで、直近の5年（平成22～26年卒、表1③）を抽出すると、一般就労者合計30名のうち離職者は9名おり、その主たる退職理由は以下のとおりである。

- 企業の倒産
- 家庭の都合
- 職場でのコミュニケーションの失敗など
- グループホーム利用者の異性交遊

このように、本人が主たる原因となっているのは●の二つの事例で、これについては、教育課程による学習指導の検討が必要とされる要素と言える。

（２）企業・福祉サービス事業所からの本校への要望

次に、卒業後の受け入れ先は、本校の生徒に何を求めているかをまとめる。

本校では３学年の現場実習（前提実習）の受け入れ企業や福祉サービス事業所に、実習後に評価表の記入をお願いしている。本人の実習中の様子や、採用の可否はもちろんだが、今後の教育活動に反映させるために、学校教育への要望も記入していただいている。最新のデータとして本年３月卒業生（１５期生）の評価表より、今、本校の卒業生に企業・福祉サービス事業所は何を求めているかを探る。

進路指導部では評価表を「一般就労用」「福祉的就労用」「福祉的就労＋グループホーム用」「グループホームのみ用」に分けて記入を依頼している。昨年は２３名の評価表を「一般就労用」９か所、「福祉的就労用」７か所、「福祉的就労＋グループホーム用」３か所、「グループホーム用」３か所に配布し回収した。以下にその回答を載せる。なお、「福祉的就労＋グループホーム用」では複数の生徒が実習していることから同じ福祉サービス事業所から複数の回答をいただいている。

【資料】本校の生徒に求める力とは ～平成２５年度３学年現場実習評価表より～

<一般就労用>

- 本生徒が卒業後に社会人として就労するために、今後の学校生活でどのようなことを身につける必要があると思われますか。

○介護サービス業

資格をとり、それを生かして仕事をするになると、介護は記録が必要になるので、文章を書くことが要求されます。短時間で毎日実習の記録を書けていたのですが、誤字や脱字が多いのが気になりました。

本人も自覚していましたが、時折、友達言葉になってしまう時があったようです。

○サービス業

実習期間も７週間と長い期間でしたが、日々、作業している姿を見ると、徐々に作業内容を理解して、スピードも早くなって成長していると思います。課題だった、解らない事があった時に周囲の人達に聞けるかどうかでしたが、実習を重ねることによって、自ら積極的に話しかけられるようになっていましたので、良くなったと思います。２回の実習期間を経て、本人は色々な面で非常に成長したと思います。

○食品加工業

作業についてはまったく問題ないようです。休日の過ごし方を充実させる必要がありそうですね。

○食品加工業

年齢層の違いもありますが、マイペースに自分を通してしまう場面があり、相手の気持ちも考えられるようになるよう支援しました。

- 実習期間、巡回、学校の対応など、今回の実習を通しての感想や御意見など、どんなことでも結構ですので御記入ください。また、障害者雇用について御意見等ありましたら御記入ください。

○介護サービス業

実習生さんが学校でいろいろ経験させていただいているので、実習がスムーズに行きました。

今後もたくさんの経験を重ねてあげてください。 よろしくお願ひ致します。

○食品加工業

実習期間中に巡回をし、実習者の様子を確認しに来る事は大事だと感じました。直接、会社の人間へは言いにくい事があっても、先生となら話が出来る場合もあるので。

○食品加工業

様々な環境の生徒や家族の方が今金高等養護学校で学ばれている事と思います。先生方の御苦労を察するに余りますが、障害のある生徒の皆さんが、自分自身の存在の価値を感じられる様に御支援いただければと思います。 障害の軽重にかかわらず、地域で生活することには、それぞれ困難さがあります。どんなに困難なことがあっても、必ず支援者がいることを伝えていただければと思います。

<福祉的就労用>

- 実習生の課題等について

実習生および保護者は貴施設の利用を希望しておりますが、実習期間中の様子から、施設を利用するにあたっての課題等について御記入いただければ、今後の指導に役立てたいと思いますのでよろしくお願ひいたします。

○就労継続B型事業所

当事業所の中では、どうしても『かわいい実習生』として、目を細めて見てしまう所があります。残りの学校生活、同年代の友達と人間関係を学びながら楽しく過ごして欲しいと願っています。

○就労移行支援事業所

作業中、休憩時間等、職員以外の利用者とも会話やコミュニケーションをとれるようになると良いと思います。

先々に進もうとせず、いま依頼された事をきちんと行い、次に何を行うか聞いてから行動すると良いと思います。

○就労継続B型事業所

当法人は、障害種別問わず、どんな障害や病気を持った方でも利用できる施設になっている為、作業能力、作業内容等は様々です。そんな中でも、学校とは異なった環境で戸惑ってしまうかもしれませんが、決して自分より作業をこなせない人を責めたり、疑問に感じたりせず、受け入れ助けて支えてあげようという気持ちを育てていって欲しいと思います。

○就労継続B型事業所

作業パターンなどを理解、習得し、大きなミスに繋がることはありませんが、慣れることで集中力に欠けて、仕事の仕上がりが雑になってしまうことがありました。

○就労継続支援B型事業所

実習期間が短いこともあるかもしれませんが、一連の作業の流れを把握し、次の作業に向けての準備等を確実に出来るようになって欲しいです。 対人面では特に問題なく、他の利用者とも話は出来ていましたが、もう少し積極的に職員や利用者に対し、質問等をしてくれればと思います。 ケアホーム内での他の利用者との交流はあまり見られず、一人で居室にて過ごされている事が多かったです。

○就労継続支援B型事業所

作業で注意する点を手本を示して教えると、理解を示し、作業を行っていましたが、時折、検品を忘れることがありました。声かけをするときちんと検品をすることが出来ていました。また声かけをすると白衣をきちんと着ることが出来ていましたが、自ら気を配ることが出来ると、なお良いと思います。

○就労継続支援B型事業所

作業を行うことに関しては全く問題ありませんが、次の作業に移る時に少々戸惑うことが見受けられました。わからない事があれば、積極的に職員に対し、質問等出来るようになってほしいです。

○就労継続支援B型事業所

食品を扱う施設が殆どなので、できるだけ料理や食品に関心を持っていただけたらと思います。

● 学校教育・家庭教育で身につけておいた方がよい点について

今回の実習生に限らず、一般的に高等部卒業までに身につけておいた方がよいと思われる点について御記入いただければ、今後の学校教育・家庭教育の中で生かしていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○就労継続B型事業所

◎気持ちの安定（不安になったときの対処法を知っていること）

◎体力

◎自立した活動の経験（一人で○時間△できる）※作業に限らず、休憩も

◎衛生面：マスク・作業帽子・手袋の使用等

◎排泄・食事など基本的な身の回りのことが一人でできる

◎好きなことがある。

○挨拶・返事・質問・報告等のやりとり

○作業能力

○就労移行支援事業所

・対人関係を築けるようになること（コミュニケーション）。

・帰宅時のバスで寝過ごすことが数回あったため、体力をつけてほしい。

・依頼された仕事以上の事をしている事があったため、自分が今行っている仕事を把握できるようになる事。

・会話の中で声が大きくなり、一方的になることがあったため、年齢を問わないで対話できるようになる事。

○就労移行支援事業所

いつも笑顔で素直な面が一番良かったと感じましたが、今後社会に出て、特に女性の方ですので、誰かに騙されやしないか等、余計な心配をしてしまいました。信頼関係は一定期間お互いを知って生まれると思いますので、多少疑う気持ちも必要かもしれませんね。

- 実習期間、巡回、学校の対応など、今回の実習を通しての感想や御意見など、どんなことでも結構ですので御記入ください。また、障害者雇用について御意見等ありましたら御記入ください。

○就労継続B型事業所

ご両親は、ご多忙な中、前回同様に熱心に実習をサポートしてくれていましたので、〇〇さんも安心して取り組めたと思います。進路の先生・担任の先生にも適切で丁寧な連絡・巡回指導をいただきましたので事業所としても不安なく実習を受け入れることが出来ました。現場実習を有意義なものにするためにも学校・ご家庭から必要と思われる情報を正確に伝えていただけることが大切だと感じております。

○就労移行支援事業所

以前にも実習に来ていたことで、スムーズに作業やルールを守ることができていました。今後も実習前にアセスメントシート（個人調査表）があると支援に役立ちます。

<福祉的就労＋グループホーム用>

- 実習生の課題等について

実習生および保護者は貴施設の利用を希望しておりますが、実習期間中の様子から、施設を利用するにあたっての課題等について御記入いただければ、今後の指導に役立てたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

○ケアホーム（日中活動～就労継続支援B型事業所）

入浴や食事時間に時間がかかっていた。共同生活である為、あまり時間をかけてしまうと、次の人が困ってしまうので、あまり時間をかけずにできたらと思いました。

○ケアホーム（日中活動～就労継続支援B型事業所）

人とのコミュニケーションは問題ありませんでした。就寝時間を設定する事により、起床が一人で出来るようになればと思いました。

○グループホーム（日中活動～就労移行支援事業所）

他の利用者の方とのコミュニケーションが苦手なようでしたので、自分から話しかけるなどの努力を、自分でできるようになると良いかと思われます。

○ケアホーム（日中活動～就労継続支援B型事業所）

部屋に一人でいることが多かったです。人との関わりを持つことで、本人が楽しく生活ができると思いました。

○ケアホーム（日中活動～就労継続支援B型事業所）

慣れない環境の中で生活をされていました。分からない事や困ったことが多かったと思っています。本人から率先して人に聞く事ができるようになればいいと思っています。

● 学校教育・家庭教育で身につけておいた方がよい点について

今回の実習生に限らず、一般的に高等部卒業までに身につけておいた方がよいと思われる点について御記入いただければ、今後の学校教育・家庭教育の中で生かしていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○就労継続支援B型事業所

職員や先輩の利用者に対しても、きちんと丁寧にあいさつが出来る人になってほしいです。
また、いかなる場所においても、対人とのコミュニケーションを積極的に取れる人になってほしいです。

○就労継続支援B型事業所

あいさつ、返事等、はっきりと失礼のない言葉遣いで受け答えが出来るよう見につけてほしいです。
いかなる場所でも、対人とのコミュニケーションを積極的に取れる人になってほしい。

○就労継続支援A型事業所

卒業をするまでに、あいさつをきちんと見につけておいた方が良いと思います。なぜなら、あいさつする事によって上司や仕事仲間からも「あいさつが出来ているね!」と言われるからです。これから卒業して社会に入ったらあいさつは必ずというほど重要になっていきます。

○就労移行支援事業所

自ら将来の展望を見据え、その目標に向かって努力することが出来るようになれば良いと思います。
生活と仕事の両立の重要性を認識することが出来るようになれば良いと思います。

○就労移行支援事業所

どの職業につくにあたって、報告が出来る方が良いと思われます。何か思っている事などもためこまないで、口に出して言える方が作業を行っていても失敗が無いのではないかと思います。

● その他

現場実習期間や巡回等、学校に対してのお気付きの点や、疑問・要望等どんなことでも結構ですので御記入くださるようお願いいたします。

○就労継続支援B型事業所

本人がパニック状態になった際の対処方法を教えていただいたらよかったと思いました。

○就労継続支援B型事業所 / ケアホーム

身だしなみは問題なく行えていました。もっと向上して頂くために、本人に意識させながら学校生活を送らせていただきたいと思います。

以上のことから、企業・福祉サービス事業所共に、主に「コミュニケーションに関する能力」を強く求めている事がわかる。仕事に関わる報告・連絡・相談（ほうれんそう）だけではなく、出・退勤時や休憩時間などでの挨拶を含めた、日常のコミュニケーション能力について広く身に付けることが求められている。その他、作業能力、国語力、身辺自立などもあげられている。

（３）卒業支援の実際から

次に、近年の卒業支援の中で、近年の卒業生の傾向として象徴的な事例をあげ、在学中にどのような支援が必要かを考える。個人情報保護から具体例を記載しないが、３名の事例から検証する。それぞれの課題は以下のとおり。

ア 「コミュニケーション能力、障がいに対する自己認知、親の認知、携帯電話（SNS）」

イ 「コミュニケーション能力、障がいに対する自己認知」

ウ 「コミュニケーション能力、障がいに対する自己認知、性」

エ それぞれの課題から

上記３名の実情を踏まえ、生徒自身の傾向として大きく次の２つが考えられる。

① 障がい受容の不足

「障がい」を自分の課題として捉え、それに対する対処方法を身につけていくことで、自分と社会や仕事に対する考え方、生き方に到ることが出来る。Ａ男の段階としては、「どうして自分が？」という障がいを否定する考えを抱いたままである。Ｂ男は、障がいを否定する時期は過ぎ、少しずつ受容しながら、自己肯定感を得ることでバランスを取っている状態である。そのバランスの中でメタ認知を進めている。Ｃ女については、定型発達姉がいることで自分の出来ないことを受け容れることが出来ていない。家族関係の問題もあるが、自分を受け容れ、認めてくれる人に対しての依存度が高い傾向が見られる。

② コミュニケーション能力の不足

Ａ男の場合の問題は、本人の性格的な問題と、地域的に変わらない人間関係も起因していると考えられる。これに、携帯ゲームの使用などで他との関わりの機会を失ってきた社会的環境要因も重なって、言葉などによるコミュニケーションを学ぶ機会を逸してきたと想像する。そのことがスマートフォンでのＳＮＳによる安易なコミュニケーションツールでの「つながり」に依存していく原因になっていると思われる。さらに強い者に依存していく傾向にある性格も災いして、友人という対等な関係よりは従属的な関係を求める。これは、家族関係が希薄な生徒に多く見られる傾向である。このことが、Ａ男の場合、就労先での友人関係よりも学校時代からの友人関係を求めてしまう傾向に拍車をかけている。

Ｂ男の場合は、生育過程における支援者の影響によるものも大きく、道徳的な考えの基礎になっている。さらに、就労場所の環境も相まって、精神的な成長を助けていると考えられる。しかし、Ａ男同様、関係性を従属的なものに求めることも多く、今だ不安定な状態である。将来についても、あまり深い洞察を持てずに判断してしまう可能性がある。さらにＣ女も人間関係力の弱さから共依存的な関係しか築くことができない弱さを持っていることから、大きな問題に発展している。親自身の障がい受容も進んでいないために、環境を変えることで防ぐことができるのではないかと考えている。しかし、これは本人不在の問題解決であり、これからも本人の課題として残っていると思われる。

（４）本校の教育課程との関連と提案

先の「（１）離職率と離職理由」から、今までの本校の教育課程が卒業後の就労生活に向けて一定の成果をあげていたと考えられる。しかし、離職の理由を見たときに、コミュニケーション能力や性教育に改善が必要と考えられる。「（２）企業・福祉サービス事業所からの本校への要望」からは、主にコミュニケーション能力が求められ、その他に作業能力、国語力、身辺自立などもあげられている。「（３）卒後支援の実際から」からは、自己認知、コミュニケーション能力の向上、そして性の指導が求められている。

更に、あらゆるニーズに対応できる生徒像を想像するならば、生活上の困難を解決するためのスキルとしての課題がいくつか考えられる。今年度の就労に向けた企業面接において自らのライフプランのビジョンなどを語らせる質問が出されていたので、それらの質問に答えられるだけの表現力を身につける必要がある。また、卒後支援や地域の相談支援の考え方は、あくまで本人のニーズに基づいてプランニングしていくものである。本人が出来るところ、出来ないところなどを自己認知し、支援して欲しいところを発信できることが必要である。

以上の事から、本校の教育課程との関連として、「自立活動」「LHR」「道徳教育（情報教育、性教育も含む）」などの充実があげられる。

各教科や生活単元学習等をはじめ「自立活動」「LHR」の中でも、コミュニケーション能力の向上やSSTを利用した授業が考えられる。また、生徒自身の意思決定が出来るようなシステム作りが必要であり、自治的な活動をトレーニングとして機能する事が大切となってくる。このことが学び合う意欲と習慣をつけ、ルールのリレーションの確立と結び付いている。

これらを踏まえて、「メタ認知」「コミュニケーション」などの力をつけるための教育活動として、「自立活動」の時間で出来る事に、クラスのメンバーを教育共同体に育てていく手法の「ミーティング活動」がある。これには「人の話を真剣に聞く、共感する、丁寧に話す、意見の違いを乗り越えて折り合い、合意すること、協力して決めたことを実行すること」等の目的がある。「ミーティング活動」とは、これらの目的を達成するための手段であり、個人の自己肯定感を育てることや自治的集団を育てることが自分に対する気づきに繋がると考える。そして、他者という鏡を通して、自分を知る手段になると思われる。

「道徳教育（情報教育、性教育も含む）」の充実については、「法の遵守」や「勤労観」、「公德心」を軸にした授業づくりを推進していく。特別支援教育では、意識されにくい内容ではあるが、社会とつながりを持って生きていく社会人として必須事項であると考えられる。それらを授業の中で考えさせる過程が必要である。そして、生徒一人ひとりの道徳律としての確立を目標とすることである。情報教育では、単に操作スキルではなく、メディアリテラシーを主だった目的とした教育を取り入れる事の必要性を感じる。メディアリテラシーとは、情報が流通する媒体（メディア）を使いこなす能力、メディアの特性や利用方法を理解し、適切な手段で自分の考えを他者に伝達し、あるいは、メディアを流れる情報を取捨選択して活用する能力のことである。近年、卒業生の問題事例において、この知識が乏しいことから正しい選択が出来ないために携帯電話（スマートフォン）を媒体としたトラブルが多数起きている。性教育については、生活単元学習の中でも「心とからだ」の単元を設けて教育課程に盛り込まれているところであるが、道徳教育の中でも「性教育」を取り入れていくべきではないかと感じる。卒業後のトラブルの中で女子に多いのは、異性問題であり、特に、性の問題である。道徳の中の公德心と絡めて教えていく必要があると考える。

次に、上記の充実のために提案するのは「授業の在り方」である。本校の授業形態として、「一

斉授業＋TT」が主に取られているが、この形をもう一度見直して「協同学習」などをベースにコミュニケーション能力の向上を目的として考えていくことで、苦手意識を持つことなく「関わり」をスキルとして得られるようになると考えられる。他との関わりを学習活動の主として考えることは、個人を超えた「集合知」を生み出すことである。メタ認知能力は、自分以外の他者との関わりでしか得られないものである。協同学習では「互恵的な協力関係」「個人の責任が明確」「参加の平等性」「活動の同時性」の四点を活動の中で保証しつつ、進めていくことが大切である。また、コミュニケーション力は、「つながる力」でもある。セーフティネットにアクセスする力、SOSを出す力、または自分のSOSに気づく力、それらを得ることが社会人として社会で生きていくことに繋がっていると考ええる。

（５）さいごに

教育基本法第一条 教育の目的では、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」としている。変化の激しいこれからの社会に対応できる社会人としての在り方を私たちは教える必要がある。シチズンシップ教育により、民主主義社会を支える市民として十分な役割を果たせるよう、教育活動を行うのが私たちの仕事である。多文化社会、多様化社会と言われる昨今、幸福感も多様化している中で、適切に社会と繋がり、伝達（コミュニケーション）することで自分なりの「幸せ」を追求し、生きていく術を身につけることがキャリア教育の一つであると考ええる。そのための教育課程の編成に本調査を活用していただきたい。

●引用文献

- ・ 中学校 学習指導要領 第三章 道徳編
- ・ 小学校 学習指導要領 第三章 道徳編
- ・ 「授業づくりネットワークNo.16 協同学習～学び合い、学びの共同体 その良さと実践」 学事出版
- ・ 「授業づくりネットワークNo.4 協同学習で授業を変える」 学事出版
- ・ THE 協同学習 明治図書出版
- ・ 「クラス会議」完全マニュアル人とつながって生きる子どもを育てる 赤坂真二 著 ほんの森出版
- ・ 先生のためのアドラー心理学 勇気づけの学級づくり 赤坂真二 著 ほんの森出版
- ・ 修行論 内田 樹 著 光文社新書
- ・ 学級づくり 成功の極意 赤坂真二 著 明治図書出版
- ・ べてるの家の「当事者研究」 浦河べてるの家 医学書院
- ・ 「非」援助論 浦河べてるの家 医学書院
- ・ 「7つの力」で育てるキャリア教育-小学校から中学・高校まで 諸戸祥彦 著 図書文化社
- ・ 学校掃除と教師成長 自問清掃の可能性 平田 治 著 一莖書房

第 5 章

寄宿舎の研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

社会的自立に向けたスキルアップを目指して

～今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した研究～

(2) 設定理由

今年度は本校の第6次研究であるキャリア教育の3年目であり、研究の最終段階となっている。本研究は校内の研究推進委員会が連絡・調整役となって進められており、寄宿舎としても研究推進委員会や学校と連携して研究を進め、キャリア教育についての理解を深めながら一貫した指導・支援を行っていきたいと考えている。

昨年度の事例研究では、日々の指導を「今養版キャリアプランニングマトリックス（以下『マトリックス』と略す）」に照らし合わせ、抽出生徒へのアプローチの仕方を具体的に提示することで統一した指導を行うことができた。そこで、今年度も昨年度と同様にマトリックスを生かしたソーシャルスキルトレーニングの事例研究に取り組み、個別の指導計画作成の際の指導観点について検証を行っていくことにした。これによって、生徒が社会的自立に向けて様々な能力を身につけることができるとともに職員の指導力向上にもつながると考える。

キャリア教育について職員一人一人が理解を深め、生徒が自らの力で「自分らしい生き方」を見いだせるよう、本主題を設定した。

(3) 研究の内容と方法

① キャリア教育の共通理解

- ・学校で行われるキャリア教育学習会へ参加し、理解を深める。
- ・長期休業中に研修会を計画し、キャリア教育の在り方について共通理解を図る。

② 事例研究

- ・男子棟をAグループ、女子棟をBグループとし、対象生徒を1名抽出する。生徒の個々の実態に応じた課題に対して、どのようなスキルを身につけることが求められ、それに対してどのようにアプローチしていくか考察する。
- ・研究主題を各グループごとに設定し、副題はマトリックスの指導観点を参考に生徒の実態に応じた目標を設定する。
- ・研究期間は1年間とする。

(4) 推進日程

- 6月・・・対象生徒抽出、グループ協議、研究内容決定、全体発表・協議、キャリア教育学習会
- 7月・・・寄宿舎研修会
- 10月・・・中間発表・協議、キャリア教育学習会
- 12月・・・キャリア教育学習会
- 2月・・・最終報告、キャリア教育学習会

2 事例報告（Aグループ）

『自立に向けた生活習慣の指導』

（１）事例対象生徒

- ・学科 生活家庭科
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…自閉症、知的障がい

（２）対象生徒の環境

- ・母、兄の３人家族であるが、母と兄とは別居しており、幼い頃から祖父母に養育されている。

（３）対象生徒の実態

① 基本的生活習慣

- ・基本的な身辺処理については、ほぼ自分で行うことができるが、丁寧に行うことが難しい。
- ・忘れ物や置き忘れが多い。宿題や日記をやり忘れることがある。
- ・２日続けて同じ下着を着続けたり、衣類を洗濯し忘れることがある。同じハンカチを２日続けて持ち歩くことがある。
- ・整理整頓、物の管理をすることが難しい。

② 社会性

- ・日課についておおまかな流れは理解しているが、自分で考えて行動することや時間を意識して早めに行動することが難しい。
- ・衛生面に対する意識を持つことが難しい。
- ・人と会話をする 것을好むが、一方的に話すことが多く、相手の状況や気持ちを考えて話すことが難しい。
- ・場面に応じた言葉遣いや敬語を使うことが難しい。

（４）保護者との連携（家庭での様子、保護者の意向）

- ・家庭では、保護者に頼ることが多く、自分からの行動が少ない。
- ・保護者からも整理整頓ができていないことや忘れ物をする事について注意をしてきたが、行動に変化がみられなかった。
- ・自立に向けて、日課に沿って生活できるようになってほしいとの保護者の意向である。

(5) 課題の設定及び指導仮説

① 実態の整理

- ・自分から考えて行動することが少なく、行動が必要な際には、職員の言葉かけが必要である。
- ・丁寧に行うことが難しく、やり忘れることもあるため、職員の確認が必要である。
- ・生活全般において職員から言葉かけや確認などの支援を多く受けているが、本人が問題意識を持つには至っていない。

② 課題の設定

以上の実態から今養版マトリックスの指導観点「知識・技術」、指導の柱「社会の仕組みなどの知識・技術」より「集団生活を通して、社会のルール、マナー、礼儀などを意識して生活し、行動できる生徒を育てる。」こと並びに、指導観点「自己内省」、指導の柱「課題を解決しようとする心」より「自己決定、自己反省の課程を繰り返し、課題を解決する力を育てる。」を方針とし、下記の課題を設定することにした。

「課題を解決しようとする心を持ち、身辺処理能力の向上に取り組む指導」

③ 指導仮説

本生徒は、経験不足から整理整頓、着替え、洗濯などを丁寧に行うことが難しいことや、やり忘れることがあり、職員から言葉掛けを受けている。特に忘れ物が多いため、翌日の準備については職員から言葉掛けや確認を多く受けている。しかし、これまでの生活の様子から他者に依存する態度が見られ、言葉掛けをされたことについて意識を持って行動するには至っておらず、また忘れ物をしたことについて改善しようとする気持ちを持つには至っていない。

課題を改善しようとする本人の気持ちを育成しながら、身辺自立に対する指導を行うことで、身辺自立の向上を図ることができると考える。

(6) 指導内容及び方法

① 翌日の準備をすることができる。

・準備時間の設定

翌日の準備は、下校後すぐに行う。日記は20：30に書く。

・持ち物確認の徹底

登校前に自分で確認を行う。持ち物については、学校にて日記に書いてきていることから、日記を確認しながら行う。

登校前に職員に確認をしてもらう。

② 清潔に生活することができる。

・下着は、毎朝パジャマから着替える際に着替える。

・下校後、着替えた際に使ったハンカチを洗濯袋に入れる。他の洗濯物と一緒にすぐに洗濯を行う。

③ 自分から行動できる。

- ・忘れがちな行動についてポイントを絞り、行動する時間を部屋に掲示して、確認できるようにする。
- ・週の初めに当番活動を確認する。

④ 整理整頓をすることができる。

- ・洗濯物は自室で干すこととする。衣類を畳む際は、職員と共に行う。
- ・収納場所を設定して分かりやすいように表示する。設定場所に整理整頓できているか定期的に確認する。

⑤ 取り組みの振り返りをする。

- ・特に課題となっている忘れ物と下着の着替えについて、できていたかを毎日チェック表で確認させ、週の終わりに職員と振り返りを行う。できていたときは大いに誉め成功体験を積む。できていないときはなぜできなかったか考えさせ、次週へつなげる。

(7) 指導経過

① 翌日の準備をすることができる。

翌日の準備は下校後、日記を書くのは20：30と、それぞれ設定したことで、忘れずに行う習慣がついた。

持ち物の確認については、日記に書いてきている翌日の持ち物を見落とすことや、干している衣類を入れ忘れることがあり、本人が準備をした段階では入れ忘れがあるため、職員の確認が必要であった。取り組みを始めてから、職員が確認しているため忘れ物は少なくなったが、職員の確認に依存している様子があったため、できるだけ一人で準備を完成させた上で、本人から依頼して職員が確認をするようにした。依然として一人での準備では不備があり、継続して指導していく。

② 清潔に生活することができる。

毎朝、下着を取り替えることにしたことで習慣が付いた。ハンカチを取り換えることも、身につきつつある。それぞれ習慣として身につけてきているが、清潔に対する意識は取り組み前と変わりのない様子であるため、清潔に対する意識が高まるよう指導が必要である。

③ 自分から行動できる。

「登校前」、「下校後」、「午後8時30分」の3つの場面で、本生徒が忘れがちな行動を行うようにし、確認できるように図1を部屋に掲示した。

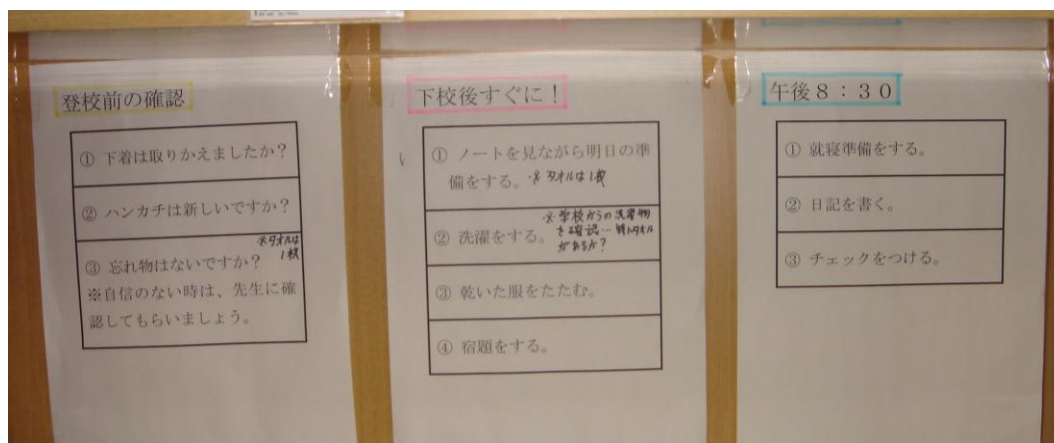


図1 机に掲示

言葉かけがなくとも、決められた時間に自分で行動する様子がみられるようになってきたことから、20:30に行くことについては、20:30までに終わらせるように変更し、時間に幅を持たせて自分で考えて行動するようにした。しかし、下校が遅いときや、やることが多いときなどに急ぐ様子がなく、時間に間に合わせようとする意識を持つには至っていないため、時間を意識して行動できるよう指導が必要である。

当番活動については、初めのうちは職員が週初めに活動内容を知らせていたが、自分から週初めに確認するようになった。現在は職員からは知らせていないが、自分で確認し、忘れずに参加している。

④ 整理整頓をする事ができる。

洗濯をして乾いた衣類は、下校後に畳むようにしたことで、衣類の整理整頓は習慣付いている。取り組みを始めたときは、職員が畳み方の見本を見せながら一緒に畳んでいたが、衣類を丁寧に畳むことが身についたため、一人で行っている。

収納場所についても、収納する物を図2、3、4のように表示したことで、一人で収納できるようになった。



図2 机の引き出しに表示



図3 ロッカーの引き出しに表示



図4 ベッド下の引き出しに表示

物を管理することが難しく、洗濯物は部屋で干しているが、乾いていないものを取り込むことがあるため、指導が必要である。

置き忘れが多く、物の管理について指導が必要である。

⑤ 取り組みの振り返りをする。

置き忘れをすることが多かったことから、チェック表（図5）に置き忘れの項目を加え、毎日チェックをするようにし、週毎に振り返り、反省を行った。

振り返りをしたところ、忘れ物をすることや置き忘れが多かったことについて、できなかった原因や具体的な改善策を考えることが難しく、本人の意識として、注意を受けないようにするというのを一番に考えており、その場限りの反省となることが多かった。よって、本人が課題を意識して生活できるようにするため、先週のチェック表を掲示し、できていなかったことを目にして意識できるようにした。また、課題を改善する意識が高まるように、チェック表に「今週の目標」を加え(図6)、先週までのチェック表をもとに簡単且つ具体的な目標を週初めに立てるようにした。目標を意識して生活している様子が見られてきており、継続して指導していく。

	6月9日	6月10日	6月11日	6月12日	6月13日	今週の反省
	月	火	水	木	金	
朝に下着を着替えた	×	○				毎日着替えるのを忘れた。
忘れ物をしなかった	○	忘れ物をしなかった	○	○	○	

図5 取り組みを始めた時の様式

今週の目標	昨日も見ながら最終石巻に入す。					
	9月22日	9月23日	9月24日	9月25日	9月26日	今週の反省
	月	火	水	木	金	
朝に下着を着替えた		○	○	○	○	おでんやんち入れな かった。
忘れ物をしなかった		○	×	○	○	
置き忘れをしなかった		×	○	○	○	
(置き忘れた物・場所)		洗面室 ベルト	洗面室 ベルト			

図6 新様式・机に掲示

①～④の取り組みにより、身辺自立については向上しているが、受動的な様子であり、本人が意識を持って行動するには至っていない。今後は⑤の取り組みを重点的に進めていった上で、自主的に意識を持って行動し、身辺自立の向上が図られるよう指導を進めていく。

(8) 結果及び考察

① 翌日の準備をすることができる。

翌日の準備をする習慣がついたことから、言葉掛けを極力減らして自主的な行動をみていき、さらなる定着を図った。言葉掛けを減らしたことで、自分で考えて、一人で準備を終わらせられることもあった。しかし、慎重に確認することが難しく、やり忘れがあった際には気がつくことができず、特に職員に持ち物の確認の依頼を忘れてしまい、忘れ物をするがあった。

忘れ物が課題であることから、確認の必要性については、その都度指導したが、常に意識を持つようになるには至らなかった。

② 清潔に生活することができる。

下着の着替え、新しいハンカチの用意、毎日の洗濯など清潔に関する習慣は身についた。清潔に対する意識と理解を深めるため、チェック表では下着の着替えの項目をなくし、「衛生面で気をつけること」の項目を設けて、その週に衛生面で気をつけることを記入するようにした。徐々にではあるが衛生に対する意識がついてきている。

③ 自分から行動できる

就寝準備、日記、チェック表の記入について、20：30までに終わらせるように設定を変えたことで、やりたいこと、やらなければならないことを考えて時間を過ごすようになってきた。しかし、時間がないときでも、他のことに気をとられて行動が遅くなることや、自分の動作にかかる時間を理解することが難しく、20：30までに間に合わないことがあった。

④ 整理整頓することができる。

湿った衣類を取り込んでいることがあり、職員と共に確認して取り込んだが、徐々に一人で確認できるようになった。

置き忘れについては、チェック表により、置き忘れをしやすい物や場面を理解してきているが、確認が定着せず、言葉掛けが必要であった。

持ち物に対して執着がなく、物を紛失しても保護者に新たに購入してもらえば良いという考えを持っていた。保護者に協力願い、紛失して購入が必要になった際には、寄宿舍の小遣いの中から購入することとした。その後、紛失した物はないが、保護者に対する依存の気持ちを減らすとともに、物を大切にし、管理できることにつなげていきたい。

⑤ 取り組みの振り返りをする。

②のとおりチェック表について変更し、毎日のチェックについては、忘れ物と置き忘れに絞った。依然として忘れ物をするものがあつたが、今週の目標や反省の項目では、忘れ物をした原因を考えることや、忘れ物をなくすための具体的な方法を考えることが難しく、職員と一緒に考え、理解を進めていった。振り返りを行い、その場では課題に対して改善しようとする意識を持つようになったが、意識を継続することが難しく、成功体験を積むことができなかった。

今回、課題を改善しようとする気持ちを育成しながら、身辺自立に対する指導を行い、身辺自立の向上を図った。取り組みを行い、身辺自立の面では、経験不足のためできなかったことが、取り組みにより習慣付いたことで、スキルが向上していった。次の段階として自主的な行動を見ていったところ、新たに課題がでてきた。また、取り組み当初から課題であった忘れ物については、少なくなつてはいるものの繰り返されている。これらの課題に対し、本人が改善しようとする気持ちを持つため、チェック表を用いて課題を理解させ、解決に向けて考えるように取り組んだ。しかし、原因や解決策を考えることが難しく、職員の助言のままに、受動的になる様子も見られ、自己決定して課題を解決できるようになるには至らなかった。自分の課題を理解できるようになってきているが、課題を解決するには、課題に対してより深く問題意識を持つ必要がある。また、本人の実態として現時点では多くの支援が必要であるが、支援に依存する様子が見られるため、必要な支援をしつつ、課題と向き合わせて解決できることが増えるよう、継続して指導をしていきたい。

3 事例報告（Bグループ）

『より良い人間関係の構築のために』

（１）事例対象生徒

- ・学科 産業科
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…自閉症、精神発達遅滞

（２）対象生徒の環境

- ・家庭環境
祖父、父、母、弟の５人家族

（３）対象生徒の実態

① 基本的生活習慣

- ・身辺処理全般については自分で行うことができるが、丁寧さに欠ける部分があるため、職員の確認が必要である。
- ・整理整頓をすることが定着しておらず、物を分類して収納することが難しい。

② 社会性

- ・人との関わりを好んでいるが、周りの人と馴染むことが難しい。
- ・自分の思っていることを直接伝え、相手を傷つけてしまうことがある。
- ・人が話をしている時に自分の興味がある話題になると、割り込んで話し始めることがある。
- ・場面に応じた言葉遣いで話すことが難しいことがある。
- ・自分自身を過大評価しており、自分の非を認めることが難しい。

（４）保護者との連携（家庭での様子、保護者の意向）

- ・保護者と吹奏楽という共通の趣味を通して、よく会話をすることがある。
- ・将来に向けて自立して生活する力を身に付けてほしい。
- ・焦ってくると相手の気持ちを考えた発言が難しいことがあるため、考えて発言をできるようになってほしい。

（５）課題の設定及び指導仮説

① 実態の整理

- ・自分の思いをそのまま相手に伝えてしまい、相手を傷つけてしまうことがある。
- ・人との関わりを好んでいるが、周りの人と馴染むことが難しいことがある。

- ・場の状況に応じた、言葉遣いをするのが難しい。

② 課題の設定

以上の実態から今養版マトリックスの指導観点「コミュニケーション」、指導の柱「相手を受け入れ、自らそこに参加する」より「相手の立場や考え方を理解して受け入れ、関わるができる力を育てる」ことを方針とし、下記の課題を設定することにした。

「より良い人間関係の構築のために」

③ 指導仮説

本生徒は、人との関わりで自分の思っていることを直接伝え、相手を傷つけてしまうことがある。また相手の感情を理解することが難しく、自分の気持ちをうまく言葉にして伝えることが難しい。本生徒も中学校時代より人との関わり方について悩みを抱いていた経緯があり、発言の仕方やコミュニケーションの取り方について改善したいと意欲的である。

現在、不適切な言葉遣いや発言が見られたときには、その都度、場に合った言葉遣いや発言を指導しているが、継続することが難しい。そのため、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れて、周りの人はどのような考えを持っているのか、また、自分の発言によって相手がどのように感じたかを知ることによって、適切なコミュニケーションの取り方を学び、より良い人間関係が構築できると考える。

（６）指導内容及び方法

① 自分の特性を知る。

- ・ワークシートに取り組み、自分にはどのような特性があるのか理解を深める。
- ・学担、室担、周りの友達に自分はどのように見られているのか意見を聞き入れ、客観的に理解する。

② 場面を作って学習する。

- ・定期的に時間を設け、生徒を数名集め、学習会を実施する。実際の場面を想定し、ロールプレイやコミック会話を用いてコミュニケーションの取り方を学ぶ。
- ・学習会の中で学んだことを日々の生活の中で活かしていくよう指導する。
- ・学習会で活かしたことを発表し、みんなで賞賛し、今後も継続するよう伝えていく。

（７）指導経過

① 自分の特性を知る。

- ・7月2日に第1回目の学習会を行った。この日のテーマは「自分や周りの人を知ろう！」ということで偏愛マップ（図1）を活用し、自分の特性の理解を深めた。偏愛マップとは1枚の紙に自分の興味・関心のあることを書いてまとめたもので、自分の性質などが一目で分かるものである。これを活用することによって、自分にはどのような特性があるのか、また他

の人とはどのような共通点があるのかを知ることができる。職員の偏愛マップを見本に本生徒は自分のことを適切に分析し、アピールしたいことを多様を書くことができていた。その後、3分程度で偏愛マップを用いて自己紹介を行ったが、自分の興味・関心のあることを一方的に知ってほしいという気持ちが強くあり、周りの反応を気にすることなく自分本位に話してしまう様子が見られた。最後に自分の特性を理解した上で、周りの人の目には自分の姿はどのように写っているのか、周りの人に答えてもらうワークシートを配布した。(図2)

② 場面を作って学習する。

- ・7月14日に第2回目の学習会を行った。場面に応じた言語的コミュニケーションスキルで寄宿舎生活で「こんな時はどうする？」というテーマでロールプレイを行った。最初はこちらが提示した内容を理解することに時間を要したが、内容を噛み砕き説明すると、ロールプレイにならずに一方的な発言が見られた。(図3)
- ・8月20日に第3回目の学習会を行った。内容はコミック会話を活用し、絵を見てどのような場面であるか、またどのように返答したら良いのか吹き出しにコメントを記入させた。本生徒はイラストを見てその時の人の気持ちや現状を読み取ることはできたが、自分の思うままに発言したり、口調が厳しいところがあり、コミュニケーションスキルを考えたときにやや課題が残った。
- ・9月17日に第4回目の学習会を行った。表情から感情を読み取るというテーマであった。無表情、微笑、笑顔、不機嫌、怒り、困惑、不安、泣くの表情の写真を見せ、どんな感情を持っているかを答えた。また、顔と表情の気持ちというプリントの記入を行った。本生徒の様子として、顔の表情から気持ちを読み取ることはできるが、「空気を読むことが難しい」との発言があった。自分が発言した後に、相手の表情が変わるので「まずいことを言ってしまった。」と思ってしまうと言っていた。

上記のことから、本生徒は絵や写真を見て状況を考えたり、適切な返答を発言することはできるが、実際の場面では自分の思ったことをすぐ口に出したり、その場の雰囲気を読み取ることが難しいということが分かった。今後の学習会は4回設定されているが、実際の日常生活でよく見られる場面を想定した、ロールプレイなどを行っていきたいと考える。

- ・10月30日に第5回目の学習会を行った。あったか言葉とチクチク言葉について、KJ法を用いてそれぞれあげてもらった。時間はかかったが、あったか言葉は「ありがとう」「頑張れ」チクチク言葉は「うぜえ」「嫌い」などと記入し、それぞれ5、6個あげることができた。自分はあったか言葉とチクチク言葉どちらを使うことが多い？という質問に対し、チクチク言葉と答えた。また、言葉はあったか言葉でも言葉遣いが悪かったり、厳しい口調になるとチクチク言葉になってしまうことを伝え、言葉遣いを直したいという発言があった。(図4、図5)
- ・11月12日に第6回目の学習会を行った。「きっかけことばを上手に使おう」をテーマにロールプレイを行った。ペアになり行ったが、基本的な相手とのやりとりはできていた。ロールプレイの内容で体調不良の生徒が先生に早退することを伝えるという場面があり、本生徒は先生役をしたが、「お大事に。」という言葉が出てこなかった。体調の悪い人を気遣う「お大事に。」という言葉を書いてあげられると、思いやりの気持ちがある人だと思われることなどアドバイスすると、納得して聞いていた。(図6)
- ・12月11日に第7回目の学習会を行った。友達とケンカをしてしまった時にどのタイミングで謝ったら良いのか、それは謝る必要があるのか、ペアになってロールプレイをしている。本生徒は謝らなければならない場面と謝る必要はない場面を的確に分析して記入していた。ペアでの話し合いで違う意見になると相手を気遣いながらも自分の意見を主張したり、同調

したりする様子が見られ良い雰囲気だった。また、怒りの表現方法についても良い方法と良くない方法を自分なりに考え、答えている。自分がうまくいかないと感じるところは友人関係だと話す、悩みや怒りを溜め込まないためには好きなことをして気持ちを切り替えたり、誰かに話を聞いてもらおうと答えられた。(図7、図8)

- ・1月21日に第8回目の学習会を行った。学習会のまとめの時間になる。これまで自分の課題や言葉の使い方、場面に応じたコミュニケーションの使い分けなどについて学習してきたが、実際に課題に直面したときに相談できる人はいるのか、相談できる人とはどういう人なのか、信頼関係とはどういうものか話し合っている。本生徒は自分の課題をよく理解するまでに至り、相談できる相手もたくさん挙げることができた。また信頼できる人とは「きちんと話を聞いてくれる人」「口が堅い人」などと記入し、職員が話す信頼関係を築く方法を納得して聞いていた。卒業後、何か問題が起こったときに相談できる相手がたくさんいると助かること、相談ができる信頼関係を築くためにはコミュニケーションの中から得る人間関係が大切だということ話している。これまで学習してきた良好な人間関係を築く方法を忘れず、時折、学習のプリントやノートを見返して振り返る時間を作るようにと話して終了した。(図9)

(8) 結果及び考察

① 自分の特性を知る。

- ・偏愛マップを用いて自己紹介を行うことや、周りから見た自分というワークシートを使うことによって自分の長所や短所を再確認し、自己理解を深めることができた。

② 場面を作って、学習をする。

- ・定期的に時間を設け、学習会を行ってきた。コミック会話や相手の表情を見て、相手の気持ちを考えるなどといった、視覚的な情報を読み取り答えることは適切な回答をすることができた。実際の場面を想定したロールプレイでは最初は恥ずかしがっていたが、回数を重ねていくうちに、その場に合った適切な会話や態度をとることができるようになった。勉強会で学んだことを日々の生活の中で生かすよう指導を行ってきた。友達との関わりの中で気を付けようとする場面も見られたが、その場の雰囲気や気持ちが高揚した時に、その場に適さない発言が見られた。

今回の事例研究は、本生徒が人とのコミュニケーションの取り方に課題を抱えていることから、「自己理解」「コミュニケーション」の2点に絞り、より良い人間関係の構築のための指導を行ってきた。自己理解では自分の長所やアピールポイントを再確認することができ、本生徒の自己肯定感につながったと感じる。また他者から受けた評価を受け入れることで、課題解決に向けて取り組む姿勢が見受けられ、今回の学習会へ意欲的に参加する様子も見られた。学習会の中では主にロールプレイやコミック会話を用いて学習を進めてきた。学習会の中では適切な関わり方をすることができても、実際の生活の中ではその場に適さない発言が見られることもあった。しかし、事例研究を始めた当初よりも相手の気持ちを考えた言動は増えてきている。今回の学習で学んだ知識を生かして、今後も日々の生活の中で活かしていけるような指導を行っていく。

好きなもの

- 特撮(スーパー戦隊、仮面ライダー、Ultraman)
- 笑5 ~ ~~笑5~~
- 楽しい歌 ~
- ・ファイターズ!!

吹奏楽一番!!

好きな動物

- 犬 ~
- ねこ ~
- のほほんわんわん

好きな食べ物

- ほとんど!!
- リンゴ
- さいせんのなみ
- 月をいたい
- しらがうてゐるわー

好きなアニメ

[Redacted]

出身地

[Redacted]

好きなアーティスト

1. ショーパンとチャップリン!!
2. ヨシキネとタケノコ!!
3. 大塚愛とセシリア・テンドー!!

(3) 1-10

[Redacted]

性格

- 小性格
- おおさは
- いたすら大好き!!
- おはしくさい...
- 結構二重人格...
- 変人

特技

- 楽器を吹く事!! (クラリネット)
- 声の質・音域を自由自在に使える!
- 牛乳一気飲み ~!!



私の星座

- ・虫平会!! 第
- ・男おしりかな...

の 偏愛

私の前も... ~

カヒバリ ~

私のまわりであった事!!

- ひからびたサンダーボルトの身体を毎日みてた (いざ)
- いじをキルトでふりつけた友人がいた!!
- かみさんが階段から落ちた!!



いじ

好きな曲

1. 吹奏楽関係
2. ポカロ
3. 山

休日の過ごし方

- ゴロゴロ ~
- ゲームとTV
- たまに楽器吹し
- どこか散歩 ~
- その他色々

毎(に)月

あなたから見た私ってどんな子？



_____に聞いてみました！

明るくて、おもしろい！
かんぱりやさんできょう面！

_____に聞いてみました！

明るくて元気！
ハキハキと受け答えすることができる。
きまり・ルールを守ろうとする
クラリネットがとっても上手！

_____に聞いてみました！

元気で、おちょこちょい
直してほしい所が
男言葉 話にのってほしい

図 2

こんな時どうする？



1 テレビ (pc) が見たいけど、他の人が見てる時はなんて言っているかな？

あとで見てもいい？

2 自分の洗濯が終わりました。どうしていますか？

洗たく物を取り、水たらし DO ~ 洗たくしてあげるよ！

3 友達に遊びにさそわれたけど、あんまり気が進まないな……。どう断っている？

ごめん、また今度でいい？

4 手伝って欲しいことがある時、なんて言っているかな？

ごめん、ちょっと手伝ってくれるか？

*今の自分を振り返って書いてみてね！！



図 3

【あったか言葉】

○相手に言われてうれしくなる、やる気が出る

ような言葉

↓

相手をうれしくさせる

・あいかわどう

・大丈夫

・がんばれ！

・一緒にやろう？

などなど…



【チクチク言葉】

・相手に言われて嫌な気持ちになる言葉

↓

時として相手を傷つけることがある言葉

・うざい

・キエい

・お前

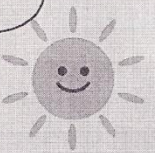
・○○しろよ！

などなど…



図 4

あったか言葉



チクチク
言葉

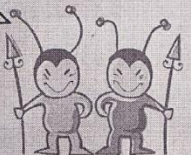


図 5

きっかけことばを上手に使う

次の話を読んで、考えてみましょう。

Aさんは宿題の提出期限に少し遅れたので、休み時間に音楽のプリントを出しに職員室に行きました。ちょうど、音楽の先生がいたので、Aさんは無言で宿題のプリントを先生に差し出しました。しかし、横をむいていた先生はAさんに気づかず、そのまま行ってしまいました。受け取ってくれるものと思っていたAさんはがっかりしました。



質問1 Aさんが確実に宿題を先生に提出するためにはどのようにすればよかったでしょうか。相手に自分の要求を伝えるにはタイミングや言い方が大切です。そのことをふまえて、Aさんのとるべき態度を考えてみましょう。

先生に「遅れてすみません。宿題を出しに来ました」といっていいと思う。

質問2 話しはじめのポイント1

選択肢から適切なことばを選んで文章を完成させましょう。

- ①先生にAさん自身のことを（ ）のような工夫が大切です。
②加えて（ ）や（ ）も大切です。

・気づいてもらう ・無視される ・すばやさ ・タイミング ・本題を優先すること ・言い方

話しはじめのポイント2

「話しはじめのことば」＝「きっかけことば」を上手に使いましょう。

- 「きっかけことば」の例

すみません…	〇〇さん（先生）と名前を呼ぶ
だれかと話をしていたら「お話し中のところすみませんが」	忙しいそうにしていたら「お忙しいところすみませんが」

きっかけことばを上手に使う（実践編）

「話しはじめのポイント」をおさえた上で、実際にやってみよう！

①基礎 ●ロールプレイでやってみよう

参加者：2人以上

内容：一人が先生役になります。もう一人は、生徒役になり、「きっかけことば」を使って会話を始めます。やってみたあと自分や周りの人に聞いてできたかどうか振り返ろう。

場面 ● 休み時間です。担任の先生が廊下を歩いています。今日、用事があり早速しくはありません。そのことを伝えましょう。

評価 ●…完ぺきにできた ○…できた △…意識できなかった

	自己評価	他者評価
自分の存在に気づいてもらった。	○	
タイミングよく言えた。	○	
言い方が適切だった（きっかけことばが使えた）。	○	

②応用 ●実際の場面で「話しはじめのポイント」が使えたかチェックしてみましょう。

場面

評価 ●…完ぺきにできた ○…できた △…意識できなかった

	自己評価	他者評価
自分の存在に気づいてもらった。		
タイミングよく言えた。		
言い方が適切だった（きっかけことばが使えた）。		

① 謝ることの意味

わざとしたことではなくても、その場では謝ったほうが良いことがあります。
 反対に、謝ると相手が「なんで謝るの?」と思うこともあります。
 難しいことですが、場面によって考えてみましょう。



場面1 ●クラス対抗ソフトボール大会で、チャンスに三振してしまった。

みんなに謝る必要がある？ あやま	ある	・ ない
どんな口調で？	・ 軽く	・ すまなさそうに ・ とても深刻に しんこく
どんな言い方で？ (または謝らなくていい理由) あやま りゆう	ごめん せっかくのチャンス、無駄にして	

場面2 ●自分は間に合うように家を出たが、電車が遅れていて、友だちとの待ち合わせに5分遅れた。

友だちに謝る必要がある？	ある	・ ない
どんな口調で？	（軽く）	・ すまなさそうに ・ とても深刻に
どんな言い方で？ （または謝らなくていい理由）	ごめん電車が遅れちゃって	

場面3 ●部活の先輩が後輩4人に5個入りのお菓子をおみやげにくれた。相談の結果、ジャンケンで勝った人が2個もらえることにした。

ジャンケンに負けた人に謝る必要がある？ おやま	・ある	・ない	
どんな口調で？	・軽く	・すまなさそうに	・とても深刻に しんこく
どんな言い方で？ (または謝らなくていい理由) おやま りゆう	相談した結果、それが最善策だから 先輩と1対1で話した方が早い		

場面4 ●クラスでの話し合いの時、Aさんはクラスでリーダー的な存在のBさんが出した意見と反対の意見を出した。Bさんはむっとしている。

Bさんに謝る必要がある？	・ある	(ない)	
どんな口調で？	・軽く	・すまなさそうに	・とても深刻に
どんな言い方で？ (または謝らなくていい理由)	てあるてだから あのソリが 出るから。		

①

② 「怒り」とのつき合い方 (その1)

怒り=イライラ、ムカムカする気持ちについて考えてみましょう。



- あなたは イライラ、ムカムカすることはありますか?
(・よくある ・ときどきある ・あまりない ・ぜんぜんない)
- イライラ、ムカムカすることは…
(・だれでもあります。 ・だれもあるわけではありません。)
- あなたは どんな時にイライラ、ムカムカしますか。指数0~5のレベルで表してみましょう
(イライラしない⇐ 0 1 2 3 4 5 ⇒ ぶち切れ!!)

①	友だちに自分の不得意なことを指摘された。	0
②	レストランなどで長時間待たされる。	X
③	今やろうと思っていたのに「早く片づけなさい」「勉強しなさい」などと、言われた。	0
④	がんばったけれども思うような結果がでなかった。	X
⑤	人前で失敗してしまった。	X
⑥	理由はわからないが友だちにからかわれた。	0
⑦	やることがたくさんあって時間がたりない。	X
⑧	期待していた予定が急に変更になった。	X
⑨	誤解され、悪く言われた。	0
⑩	初めてのことや、いろいろなことを一度に言われよくわからなくて不安になった。	X
⑪	理由もなく一方的に怒られた。	0
⑫		

4. 3.の結果から あなたがイライラするのはどんなときか分析してみよう。

自分がイライラするのは「友人関係」なとき。

- イライラすることは…
(・悪いことです。 ・悪いことではありません。 ・どちらともいえない)
- イライラした気持ちをためておくことは…
(・よいことです。 ・よいことではありません。)

なぜかというと…

体調不良、ストレス

③「怒り」のつき合い方 (その2)

怒り=イライラ、ムカムカする気持ちについて考えてみましょう。 (怒り) (イライラ) (ムカムカ) (冷静) (笑顔)

質問1: あなたが「イライラしたときの表現方法」としてやったことのあるものに○をつけてみましょう。

☐	① 「ばかやろう!」「このやろう!」など 相手にむかって悪いことを叫ぶ。
☒	② ふて箱を投げる、いすを投げる、ドアを思いっきり閉めるなど物にあたる。
☐	③ 紙をビリビリ破る、鉛筆を折るなど物をこわす。
☐	④ 水を飲む、顔を洗う シャワーをあびるなど体をすっきりさせる。
☐	⑤ 相手や近くにいる人をたたく、ける、なぐるなどする。
☒	⑥ イライラしたことを人(先生や親、友だち)に話す。
☐	⑦ 深呼吸をしたり、ストレッチをする。
☒	⑧ 好きなこと()をして気分転換する。
☒	⑨ 「あ〜あ!!」「まったくもう!」と人には聞かれないような声でつぶやく。
☐	⑩ その場を離れて気持ちを切りかえる。
☐	⑪ なくったり物を投げないように、手をポケットに入れ「落ち着け」と心の中でつぶやく。
☐	⑫ どうしてそうなったんだろう、今度はどうしたらいいのだろうと考える。
☐	⑬ 何もしないでがまんする。

質問2: 上の表現方法でよい方法だと思うものはどれですか。

8: 好きなことをやる

質問3: 自分でできそうなものはどれですか。

8: 好きなことをやる、一人で過ごす、話しやすい人に聞いてみる。

○社会人になってどんなことで悩んでいるかな?

販売接客業
人間関係、緊張しやすいのも、失敗したり、自信がないと、声がかたくなる

理想と現実が違うもの...



頑張っても同じ失敗をしてしまう…。人間関係がうまくいかない…。など社会へ出ると悩みも増えていきます。



そんな時は、誰かに相談しよう!

誰かに相談することで自分では気付かなかったことに気付いたり、深刻に考えすぎないで済んだり、自分がどうしたいか整理できます。

○相談できる人はいますか?

○なぜその人に相談したいと思いましたか?

真実に話を聞いてくれる、話しやすい

相談相手をたくさん見つけておくと、もしもの時に助かります。

○信頼できる人ってどんな人ですか?

ちゃんと話を聞ける人、一緒にいて、楽になる、楽しくなれる人、口がたたく

信頼できる人をつくるためには積極的に会話をして相手のことを知り、自分のことも知ってもらうことが大切です。

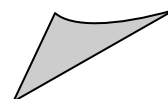
今まで勉強してきたことを振り返って、時々見直してみましょう!



資料 1

特別支援教育研修会の記録

平成26年8月1日



平成 26 年度特別支援教育研修会 開催要項

研究会主題

特別支援教育における「キャリア教育」と「生徒指導」

～ 障害のある児童生徒の社会自立に向けて、学校種を越えた指導・支援・連携を進めるために ～

< 目 的 >

- ・分科会や講演を通して、「特別支援教育」「キャリア教育」「生徒指導」の各観点から教育実践を見つめ直す。
- ・児童生徒が社会自立を目指す上で必要となる力について整理するとともに、参加者全員のスキルアップを図る。

< 日 程 >

9:30	10:00	11:30	11:50	13:10	15:15	15:45
受付	開会 基調講演	研究紹介	昼食 校内見学	分科会	全体発表 閉会	

< 講 師 >

北海道教育大学函館校	准教授（本校学校評議員・研究アドバイザー）	北村 博幸 氏
今金町立今金中学校	教諭（今金町特別支援教育スーパーバイザー）	小室 育恵 氏
北海道檜山北高等学校	教諭	石崎 洋志 氏
北海道檜山北高等学校	教諭	小泉 卓哉 氏

開会・基調講演（10:00～12:00 体育館） 進行：研修部 近藤 和也

開会のあいさつ・講師紹介 校長 高嶋 利次郎

基調講演

① 「今金町・中学校における特別支援教育の現状と課題」

今金町立今金中学校 教諭（今金町特別支援教育スーパーバイザー） 小室 育恵 氏

② 「高等学校におけるキャリア教育の実践」

北海道檜山北高等学校 教諭 石崎 洋志 氏

③ 「高等学校における個に応じた生徒指導」

北海道檜山北高等学校 教諭 小泉 卓哉 氏

④ 「特別支援教育におけるキャリア教育と生徒指導」

北海道教育大学函館校 准教授（本校学校評議員・研究アドバイザー） 北村 博幸 氏

本校の研究紹介 研修部長 矢倉 一

校内見学（昼食 11:50～13:10 の間に同時進行）

- ・ 事前に希望申し込みをされた方を対象として行います。
- ・ 12:30からご案内します。体育館にてお待ちください。
- ・ 写真等を撮影されたい場合は、案内担当者へお申し出ください。

分科会（13:10～15:15）

- ・ 協議の柱に沿って協議を進めます。お申し込みの際、参加される皆様から申込時にお寄せ頂いた質問や事例についても協議します。
- ・ 活発な協議となりますよう、たくさんのご意見やご質問をお願いいたします。

① 「特別支援教育とキャリア教育」～協議の柱：社会参加に向けた指導・支援～

運営：北海道今金高等養護学校	教務主任	金子 亘喜
	研修部長	矢倉 一
講師：北海道教育大学函館校	准教授	北村 博幸 氏
講師：北海道檜山北高等学校	教諭	石崎 洋志 氏

場所：体育館

② 「特別支援教育と生徒指導」～協議の柱：個に応じた指導・支援～

運営：北海道今金高等養護学校	コーディネーター	高田のぞみ
	生徒指導主事	小原 雄一
講師：今金町立今金中学校	教諭	小室 育恵 氏
講師：北海道檜山北高等学校	教諭	小泉 卓哉 氏

場所：柔剣道場

全体発表・閉会（15:15～ 体育館） 進行：研修部 近藤 和也

- ・ 分科会で協議した内容について発表しあった後、閉会となります。

1 基調講演

(1) 今金町立今金中学校 教諭（今金町特別支援教育アドバイザー） 小室 育恵 氏

演題：「今金町・中学校における特別支援教育の現状と課題」



○今金の特別支援教育の推進について

- ・推進チーム会議、育ちの支援委員会、支援員の配置が充実している。
- ・保健師との関係性が強い。
- ・早期対応で救われた子どもがたくさんいた。早い段階での発見、気づき、対応が大事であることを保健師との連携で感じた。

○地域の関係機関との連携で

- ・児童相談所の巡回相談となると足を運びづらい保護者が多数おり、児童相談所の前のクッション的な役割で関わってきた。
- ・こども園に行って支援の助言も行い、保護者にとって安心できる存在になることができた。

○中学校の特別支援教育について

- ・特別支援学級の子どもは自己肯定感や自尊感情が低い。褒められる経験が少ない。叱られることが多い。
- ・障害種、障害程度が多様化してきている。
- ・中学校では高等養護学校を目指している生徒が多いため、授業が受験対策になりがちな点が少し残念である。
- ・中学校から社会自立を意識した取り組みが大事。生徒が「自分は社会を担える存在である。」と思えるような取り組みが必要。
- ・（小室氏は）生活単元学習で、作業的な取り組みを行っている。特に農作業に力を入れている。畑のものを育てる喜び、世話をする過程がキャリア教育につながるのではないかと考えている。
- ・農作業のほかにも民間の委託の仕事（味噌のパックのラベルを貼る仕事）を行っている。集中力、忍耐力、手先の巧緻性を高められる。また、生徒にとっては自身がラベルを貼った味噌が売られているということが社会に一步入ったような気持ちになり、間接的ではあるが、社会参加になる。作業学習は社会自立を意識できる取り組みであると考えている。

○最後に

学校訪問で檜山北部は特別支援学級の実態が複雑多様化していると感じる。函館などの都市部と比べて、義務の特別支援学校が無いため、身体障害の生徒も入ってくる。

しかし、先生方が皆、専門性を持っているかといったらそうではない。先生方には自分たちの持っている引き出しをつかって試行錯誤しながら熱心に頑張ってもらいたい。悩みは尽きないと思うが、着実に進んでいるのは間違いない。さりげなく手をさしのべていくようなアドバイスができるようになればいいな、と自分自身は思っている。

特別支援教育は特別だけど、基本の教育。普通学校でも困り感のある生徒にぜひ今日のことを参考に関わってほしい。

○質問

- Q. 農作業を行うことになったいきさつと、今後の流れについて教えてほしい。
- A. 農作業は生きているものを育てること。自分の経験から、生き物を育てることは生きがいにつながると考えているため、育てる喜びを感じさせたかった。収穫した後は、収穫した喜びを調理学習で感じさせたい。自分たちで育てたら、こういうふうにおいしくできた、来年こういうものを育ててみよう、など考えさせたい。
- Q. 普通中学校では芸体教科や学級活動は母学級で行うと思うが、多動の生徒と関わる際に必要なことは？
- A. 配慮。なるべく指導者がつけるときはつく。職員間で年度初めなど早い時期に研修を行う。全体に説明した後に個別に説明する。机間巡視の際に、ついて見たり、一斉指導の際に個別で説明したりする。気分がのらないときには無理させない。何が何でも交流学級に行かせるのではなく、実態に応じて臨機応変に対応する。

○事前アンケートより

- Q. 通常学級から特別支援学級への移動を保護者にどう伝えればよいのか。
- A. 何が何でもすぐ特別支援学級ではない。そのクラスでできることをやってみるべき。そのためには実態把握が大事。そのひとつとして発達障害のチェックリストにプラスしてコーディネーターの先生に心理検査を実施してもらい、良さや課題を細かくアセスメントしてもらって、どんな手立てを行うか検討することが必要。まずは今の学級でできることを探す。その後結果を保護者に伝える。その子の能力に合わせて、例えば数学だけ個別にする、原稿用紙のマスを大きくする、教材を見直す、など、可能な範囲で通常学級でやってみる。それでも難しかった場合は児童相談所の巡回相談や医療機関を紹介する。保護者と根気よく向き合うことが大切。本人の将来像をイメージしてください、と伝えている。その子にどうなってほしいか、歩み寄り、が大事。プロセスのひとつひとつを大事にして歩み寄ることが大事。

(2) 北海道檜山北高等学校 教諭 石崎 洋志 氏

演題：「高等学校におけるキャリア教育の実践」



○キャリアガイダンスとは

- ・進路指導部と、総合学科を推進する部署を一緒にした。進路指導もキャリアについての取り組みを行っている。
- ・本校では将来大人になって社会に出たときのために、その生徒に合った指導を行うことを一番に考えている。
- ・キャリア教育、科目選択、進路サポートの3つのアプローチを行っている。

○キャリア教育

- ・入学当初から「キャリア」という授業を行っている。
- ・どこに行ってもみんな社会に出て生きていかなければいけない。この力を育成しないと社会で生きていけない。そのため本校で指導している。

- ・生徒には自分と向き合うこと、進路と向き合うこと、自分のキャリアをデザインすることが必要だと伝えている。

○学習単元の設定

- ・自己理解、職業理解、社会認識、履修計画作成の4本の柱で単元を組んでいる。

○系統立て

- ・1学年は宿泊研修で職場見学、9月に自分史作成、11月に上級学校見学を行う。
- ・2学年は7月にインターンシップ、2月にライフプランの発表を行う。
- ・「主体的に自立した」を意識させることが本校のポイント。

○SST

- ・1年生の6・7月に行っている。
- ・話し方について生徒に考えさせる。実際に2通りの方法でやってみる。良い例、悪い例を提示し、何が良かったか、何が悪かったか考えさせて、生徒にも取り組ませる。
- ・現在は生徒の話し方、間の取り方の変化が歴然。現在は生徒の実態が変わってきているため、内容も合わせて見直していかなければならないと考えている。

○質問

Q. 中学校段階で何が身についていると高校段階で生きる力はあるか。

A. 個人的には、挨拶だと思う。挨拶できないと就職したときに採用されない。「こいつ何なんだ。」と思われる。そこからスタートするとマイナス。挨拶したいという思いはあっても恥ずかしくて出来ないという生徒もいる。通り過ぎてもそれが先生か気付いていない生徒もいる。視野が狭い。

もうひとつは周りが見られるようになること。この2つに共通なのは、相手を思いやれること。そういう生徒は挨拶もできるし、周りも見られるのではないかなと思う。

Q. 自分史をつくる活動では、様々な家庭環境の生徒もいると思うがどのような配慮を行っているか。

A. こういう家で育った、という内容を記入する欄はない。今自分はこういう学校にいる、こういう部活に入っている、こういう理由でこの部活に入ったのではないかと自分で分析する。暗い内容を書いた生徒に対しては、呼び出して、「これみんなの前で発表するけど、大丈夫？みんなの前で発表することでこんなマイナスポイントあるけどいい？」と確認する。内容を担任に伝えたいという意図で伝えてくる生徒もいるため、その内容は発表することを「ダメ。」とは言わない。

(3) 北海道檜山北高校 教諭 小泉卓哉 氏

演題：「高等学校における個に応じた生徒指導」



○生徒の実態

- ・檜山北高校は今金とせたなの間にあり、10年前に総合学科になった。授業だけでなく部活動に

も力を入れている。授業は座学だけでなく商業、農業の授業もある。

- ・生徒は 300 名程度でほとんど地元の子。行事に対しても力を入れている。積極的に学校の活動に参加している。
- ・マイナス面は全体的に幼いこと。周りを考えられない。精神面で弱い生徒や、特別な支援が必要な子が何名かおり、教育相談に力を入れている。

○教育相談

- ・具体的な事例として、「放課後面談」を行っている。支援員がついて 3 年前くらいからやっている。現在利用者は 6 名。コミュニケーションの能力、基礎学力の向上、インターンシップ、自己理解、面接の練習、マナーの指導に時間をあてている。対支援員の先生だとできるが、場面が変わるとできない生徒が多い。対応できる教員が不足していることが課題。

○予防的取り組み

- ・頭髪服装指導。月に 1 回行っている。最近では男子の長髪が目につく。
- ・その他、携帯電話、交通安全などの研修、メンタルヘルスの研修、性教育講話を行っている。
- ・男女間のトラブルが多い。道徳教育についても取り入れることを考えている。
- ・担任だけが指導を行うのではなく、学校全体のことと捉えて、取り組んでいる。
- ・予防で一番大事なことは日常の指導であると思っている。廊下で歌を歌ったり、口笛をふいたり、暑くて上半身裸になったりする生徒を見つけたらすぐに指導を行う。他の生徒は注意されている様子を見てやらなくなる。

○早期発見・早期対応の取り組み

- ・朝の玄関指導。校内外の定期的巡回。クラス担任の面談。
- ・Q-U の活用。表の見方の研修もおこなった。気付かなかったとしても意識してみることによって未然に防止できることも多いのではないか、と思う。

○家庭・地域との連携の取り組み

- ・支部懇談会の実施。PTA が学校祭の模擬店に参加。保護者と生徒が交流を図る。夜は教員と保護者の交流。警察との連携。情報収集。昨年は深夜徘徊が多いという情報をいただいた。

○問題行動の実際の対応

- ・懲戒とその他に分かれる。
- ・生徒の話を丁寧に聞く。
- ・特別な支援が必要な子、必要でない子では対応は分けていない。行った行動に対して行う。

○質問

Q. 特別な支援が必要な子は学力が低いという話があったが、単位が取得できないということはないのか、どのように対応しているのか。

A. 数学では、1 学年は習熟度のクラス。支援員が入り、直接指導してもらっている。放課後面談でも支援を行う。もっと難しい生徒に対しては補習、講習を行う。テストも難易度を調整し、その生徒に合ったものにする。観点別評価。それでいいのか疑問に思うところもあるが、それで単位を認めている。

- Q. 放課後面談の利用者は現在 6 名と言っていたが、自分で希望して対象になっているのか、教師が選んでいるのか。
- A. 希望はとってない。年次初めに教員の方でピックアップし、その中から優先順位を決めて行っている。状況を見ながら病院の受診を勧めることもある。

(4) 北海道教育大学函館校 准教授 北村博幸 氏

演題：「特別支援教育におけるキャリア教育と生徒指導」



○「個に応じる」とは

- 「個人間差ではなく個人内差に基づく」
- 「適切なアセスメントの実施」
- 「生徒の強い部分を活かす」
- 「得意な学習スタイルを活かす」
- 「自己肯定感を育む」

- ・個人内差を把握するには「適切なアセスメントの実施」をしなければならない。以前は「実態把握」という言葉を使っていたが、実態把握は生徒がまだできていないところを把握するもの。アセスメントはこんなことできるよ、ここが強みだよ、というものを同時に把握することを指す。
- ・「生徒の強い部分を活かす」、「得意な学習スタイルを活かす」について。個に応じるためには、アセスメントで明らかになった強みをどう生かすか検討しなければならない。短所改善型指導、長所活用型指導をうまく組み合わせることが大事。小学校では短所改善型が多く、高等養護では長所活用型が多い。知的な遅れがない発達障害の子に短所改善型をやりすぎると、あまり効果が無い。
- ・「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 第7章 自立活動 第3款 指導計画の作成と内容の取扱い 2.(3) ウ「進んでいる側面を活かし遅れている側面を補う」ことを強調したい。

○得意な学習スタイル

- ・「自己肯定感を育む」について、得意なことを用いて成功体験を積むことは自己肯定感を上げることにつながる。

○事前アンケートより

Q. インクルーシブの理想的なあり方について。

A. 2つの視点が大事だと思う。1つ目は地域の小学校に入学するのが普通だと思うが、特性によっては特別支援学校に通うことになっても、その生徒にとって望ましい教育であれば、それでいいと思う。2つ目は障害のない子が障害のある子を理解することが大切であること。地域の同級生として当たり前と考えられることが必要。

4 成果と課題

全体研修会やキャリア教育学習会には、勤務の関係上、全職員が参加することは難しかったが、研修会の資料や記録をもとに個々でキャリア教育の必要性を再確認し、共通認識と理解のもと研究を進めることができた。

事例研究では、日々の指導をマトリックスに照らし合わせ、抽出生徒へのアプローチの仕方を具体的に提示することで目標とする指針からそれることなく、統一した指導を行うことができた。また、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れることで社会的自立に向け効果的に指導することができた。

個別の指導計画作成の際の記述観点については、指導のねらいを意識し、生徒一人一人の実態に応じた指導に当たることができるよう再度見直しを行い、指導目標を確立した。さらに様式を検討したことでより良い個別の指導計画が作成できると考える。今後も寄宿舎研究を進めるなかで、個々の専門性を高めると同時に、保護者や関係機関との連携を図っていきたいと考える。

2 分科会の記録

分科会①「特別支援教育とキャリア教育」～協議の柱：社会参加に向けた指導・支援～

普段教育相談で中学生をみて思うこと、行くとよい実践は？

今金高等養護学校（以下、今養）・金子氏

- ・挨拶ができない子が多い。初めての場所、知らない人にもできる子が少ないと感じる。
- ・本校は職業学科を設置する学校であるため作業学習を行う。どこの学科に入っても挨拶、連絡、報告する力を付けさせたい。
- ・中学校でも生きていく力、かわいがられる力（素直さ、話を聞く姿勢、表情）がある子を育ててもらえれば。

フロアより

- ・機械や動物を扱うため、返事を大きくすること、わからないときにわからないと言うことを指導している。

挨拶など、日常の指導で大事にしていることは？

檜山北高・石崎氏

- ・TPO に合わせた挨拶が大事だと思う。教師が他生徒に対して厳しく指導しているときにも「こんにちは。」と言ってくる生徒がいる。

＝どのように指導すればよいのか？＝

教育大・北村氏

- ・実習の評価で仕事内容よりも挨拶や返事、指示されたことが終わった後の報告、身だしなみを整えることができる生徒のほうを採用してもらえる。
- ・障害のある子にとって「場をわきまえた」というのは次段階。「できる」ことが大事。その次に場をわきまえることが大事。教えていくことが大切。

＝今の中学生は挨拶しない子が多いか？＝

今養・金子氏

- ・緊張や障害からくる緊張もあるかもしれないが、本校の生徒よりは挨拶ができない。

＝中学校よりもっと早い時期からできた方がいいのか？＝

フロアより

- ・挨拶、返事が大切だと聞く。継続が大事だと思うが、マンネリ化してくる。

＝効果的な指導方法は？＝

フロアより

- ・1 つめに、挨拶運動を行っている。八雲の「八」を使って、8メートルで挨拶しようという取り組み。全校で行っている。
- ・2 つめに、声を出す。太鼓を取り入れている。体育館の後ろまで聞こえる声を出すことが目標。声を出すことによって自信になり、普段も挨拶を大きな声でできるようになる。
- ・3 つめに、自立検定。自分で自分を評価する。

教育大・北村氏

- ・まさにキャリア教育。ステップアップ。
- ・自己肯定感を高めたり、内面の成長を促している取り組みだと感じた。
- ・挨拶運動ではなぜ行っているのか、など説明することでまた意識が変わってくるかも知れない。理想としては挨拶の意味・意義をわかった上で行うのが本当かもしれない。

檜山北高・石崎氏

- ・挨拶すると思うが、意味を、となると難しい。先日、「なぜ挨拶をするのか？」と生徒に聞いたら、みんな答えられなかった。その時は私見を言ったが、全校での取り組みとなると違うかな、と感じる。
- ・小さい頃からの挨拶の経験が必要かもしれない。

教育大・北村氏

- ・障害のある子どもに限定すると、学校ではできるけど、家に帰ったときにできない、ということがあると思う。
- ・普通高校の生徒でも挨拶できる子とできない子がいる。学校ではできているがそれを社会に出たときにできない子が多い。

＝小学校の子が自ら挨拶するきっかけはとは？＝

フロアより

- ・毎朝玄関に立っているが、自分から挨拶する生徒は3割。しているけど聞こえない子もいる。意味は理解させなくてもいい、と思っている。挨拶はするものなんだ、という経験をさせてほしいと思う。3割の子は自分に自信のある子。そういう子は10メートル離れていても大きい声で挨拶してくる。だからそういう子を育てないとな、と思う。

＝自己肯定感、自信、さっきの話とつながりますよね？＝

フロアより

- ・牛舎の担当。業者の人など外部の人が来校する。生徒のことを覚えてくれて、大人として接してくれる。いろんな話をしてくれる。仕事の技術も教えてくれる。生徒はそのためには挨拶しなけ

ればいけない、と感じて大きな声で挨拶する。何かしてもらおう、という意識。

どうやったら意欲的な自己肯定感が強い子が育てられるのだろうか？

今養・金子氏

- ・褒められるのがいいのではないか。
- ・もっと上を目指そうという意識。「運動だけは褒められてきたから。」など。
- ・いいときは褒める。いけないときはなぜその行動がいけないのかを説明することが必要なのではないか。

教育大・北村氏

- ・失敗経験を反復すると、小さな頃から「僕は何をやっても無駄だ」という考えになる。
- ・褒めることは大事。また次も頑張ろう、となる。
- ・上手に褒めることが大事。意欲的な行動につながる。

＝どのように褒めればよいのか？いいところを見つけるコツは？＝

教育大・北村氏

- ・小学校で「ちくちく言葉」などの取り組みがある。

フロアより

- ・誰に褒められるかが大事。
- ・「ほわほわ言葉」＋具体的に何が良かったか伝えることが大事。
- ・ほわほわ言葉を遣えたら「言えたね。」と般化させる。モデリング。

＝生徒が褒められるように意図的にやってることはあるか？＝

フロアより

・褒める対象は生徒だと思うが、ときどき褒めることに加えて、「先生びっくりしちゃったよ！」などと一言添える。「自分がこういうことしたら先生こんなふうに思うんだ！」と生徒が思うようにする。

＝普段の関わりの中ではどのようなことを行えばいいのか？＝

教育大・北村氏

- ・ADHDの子に対して褒めるところが見つからない子がいる。普通は何かいいことをしたときに褒められると思うが、その子の保護者には、「何もなかったら褒めることにしましょう。」と言っている。物を壊さなかったら褒める。など。

＝ほかには？＝

教育大・北村氏

- ・発達段階によってそれぞれ違うと思うが、「この子にはこれ」というようにあまり決めつけない方がいいのではないか。

引き継ぎ、個別の教育支援計画について

＝活用しているか？使いやすいものなのか？＝

フロアより

- ・個別の教育支援計画とは別に、より詳しく書かれたもので引き継ぎを行っているため、個別の教育支援計画がどこまで活用されているかは…。
- ・個別の教育支援計画は作成している。担任間では書類では引き継がれているが、学校全体として考えると、できていないのが課題。

今養・金子氏

- ・作成をお願いしたい。保護者の同意が大事だと思うが、中学校から届かないときがある。それがどうなっているのかが疑問。教育相談のときにはお持ちください、と言うが、持ってきてくれるところが数校しかない。入学する前提で教育相談しているので状況を知りたいが、実態把握が大変。事前資料があった方がその子をよりよく見ることができる。

＝中学校段階でつけさせたい力について＝

今養・金子氏

- ・午前中の講演で小室氏が「受験対策に偏っている」という話をしていた。まず入学が目標になってしまう。生きるためにつけなければいけない力は高校の前段階でつけていただきたい。
- ・選考検査は倍率があるため、落ちる子もいるが、受け皿も少ない分、選考検査をしないとイケない。
- ・「つけさせなければいけない能力は」とよく聞かれるが、コミュニケーション、基本的な国語・算数の能力、人間性が必要だと考える。つけさせなければいけない力をもう一度見直してほしいな、と思う。

＝他に行っている実践について＝

今養・金子氏

- ・話を戻すが、実態だけでなく、「この生徒はこのようなことをすると、こういうことできるからここまでしている。」というものがあればすごく助かる。高等養護では今までしていた支援をどこまで減らすか、どう変えていくかという視点で指導を行う。そのため、いま言ったようなことを書いていただければ。

フロアより

- ・引き継ぎのとき、どのくらい指導計画は有効だと考えているのですか。

教育大・北村氏

- ・指導計画はフォーマットがある。一番大切なのは、「こういうことをしたらこういうことができます。」ということ。
- ・はがきサイズのファイルに「コミュニケーションは…」というように支援計画と一緒に記載しておくといい。
- ・強めに指導すると殻に閉じこもってしまう生徒がいた。そういうところで情報の大切さを感じる。

フロアより

- ・八雲では、個別のファイルがあたるようになっている。使い方を説明したりしている。支援計画は保護者の協力が必要だが、(保護者が目を通すため) 記入できないところも多い。引き継ぎを行うときには別の資料も用意して合わせて読んでください、ということもある。そういう難しさはあるかな、と思う。
- ・支援計画を見てもわからないことが多い。保護者の手前書けないことが多いのかな、と思うが、事実を書く分には問題ないと思うので、要注意するべきところは書いていただければと思う。書きづらいことがあれば別でも構わないので、できれば何かしらの形で伝わってくるとありがたい。それが生徒にとって有益なのではないかと思う。前もってわかっていたらどういうふうに言葉かけしたらよいのかかわかる。

檜山北高・石崎氏

- ・つくるといふ話しはあって、フォーマットもあるけど作れていない。

フロアより

- ・今年度から作るようにしている。問題行動起こす子、特別な支援を要する子の割合が多い。生徒の情報共有を増やすようにしている。
- ・できるだけ多くの生徒の様子を聞けるように中学校を訪問して聞くようにしているが、なかなか出てこない場合もある。研修でも幼稚園・小学校・中学校の連携は強めましょうという話はあるが、高等学校はいれてもらえない。個別のものをつくって共有するようにはしている。
- ・情報はあがってきてはいるが、校内委員会でその子の名前があがっているというのではない。機能していない。「この子はこうだけど、しょうがないよね。」という感じ。校内を整備しないといけないと感じている。
- ・生徒個々の情報は出願時点では出ない。入学が決定した後に会議を開いて話し合っている。校内支援委員会でこういうことに気をつけて授業しましょう、という話をしている。そのような子は欠席日数が多い。今は半分欠席したら進級できないが…。
- ・八雲町の中高連携協議会。八雲高校の卒業生の離職率が増えてきている。ミスマッチだけではない。保護者の問題、職業に対する考え方。小中高の積み重ねが大事。キャリア教育。八雲高校の生徒は中学校のときに挨拶の取り組みがあったため挨拶は素晴らしい。最近気になることは朝に会っても夕方会っても「こんにちは。」ということ。挨拶の意味づけは高校の前にしてあげなけ

ればいけないのかな、と思う。

＝キャリア教育ではどのような視点が大切か＝

フロアより

- ・通常高校における発達障害のある生徒へのキャリア教育ではどのような視点が大切か聞きたい。

檜山北高・石崎氏

- ・個別対応で良いと思う。今年卒業させた生徒を事例に、どのような視点が大切か考えると、あせらせないこと。単位が取得できなかった生徒がいた。その生徒は調理が得意だったため、内容をがらっと変え、調理実習を個別で行った。レポートを書かせて保護者に見せると、保護者との距離が縮まった。本人の自己肯定感も高まったように思う。
- ・一番は先生に理解してもらうことが大事。先生方の中に枠組みを理解できていない人がいる。こういう授業はこういうことに使える！というものを文章で出して、理解してもらった。

教育大・北村氏

- ・生徒の課題とキャリア発達の課題は似ている。
- ・その生徒のここを支援したい、と思うところがキャリア発達の課題と同じなのかな、と思う。

今養・金子氏

- ・個の指導をどのように集団に返すか、という問題もあるが、個別の指導がまず大事。それをどうつなげていくか。

フロアより

- ・情緒学級の生徒で母学級に入れなくなった生徒がいる。給食に入らない。入学式などの行事にも入らない。どう返したらいいのか。

教育大・北村氏

- ・行動的なものでいえば、母学級で何をやればいいのかわからない、二つ目は何をやったらいいかはわかるけどスキルがなくてできない。
- ・生徒の問題行動には必ず意味がある。一つ目は、何かを得ることができる。二つ目は嫌なことを避けることができる。うまくできなかった失敗経験が反復されたのではないか。無理やり母学級におしこむのは無理。母学級に登校できるところからはじめて、理解とかスキルとかを教えていくことが大事。原因を追及しないと。

＝他学校での実践は？＝

教育大・北川氏

- ・小規模校で、一人しかいない子が入学当初不安定になった。おびえた感じで固まることもあった。
- ・担任と話し合い、芸体教科は全部入ろうという話しだったが、初めから全部入るのではなく、で

きるところから行った。

- ・母学級の生徒に「こういうところが助けが必要だからやってくれるかい？」と言って協力を仰いだ。その後、1教科ずつ増やしていった。今は「先生来なくてもいいよ！」と言っている教科もある。

フロアより

- ・周りの目、教師の協力を気にすることがある。結果をすぐ求めずに長いビジョンで取り組んでも協力を得られないことがある。学校全体で協力できる発信力があれば、生徒にとって良い指導になるのではないかな。
- ・現在、高校生の子を担当しているが、アイロンビーズが好きでそれを行っていると、作業学習に抵抗なく行くことができています。段階を追って行うことが大事なのかな、と思う。これから現場実習もあるので、引き継ぎが大事だと思った。

今養・矢倉氏

- ・統合失調症の子がいて月に何回通学しましょうか、と話していた。少しずつ来られるようになったがその子は卒業後離職した。
- ・卒後の支援も大事なのかな、と思う。周りの先生の協力を得ながらスモールステップで個別で対応していくことが大事だと思う。

フロアより

- ・知的障害の子が普通高校に入学したいと希望を出しても可能かな？

檜山北高・石崎氏

- ・入試の時点では情報がないうえどうしようもないが、入ってくるとなれば対策は行いう。しかし、知的障害の子が普通高校に入ったときのメリットを考えると難しい。

フロアより

- ・地域の学校に通いたいという気持ちがあり、ずっと支えてくれている仲間もいる。

檜山北高・石崎氏

- ・保護者の理解が必要。なぜ普通校に入学させたいのか？そして受け入れる側としては不安が大きい。

今養・金子氏

- ・普通高校か、高等養護か迷っているケースもある。3年後にどのようなビジョンを持っているかが大事。

最後に一言ずつ。

今養・金子氏

立ち返るが、本校も入学選考検査をあるためふるいにかけてしまうのが現状。ふるいで落ちてしまった子が普通高校に行くという状況もあるため、そのような現状を発信していければ、と思う。挨拶、生きる力の育成、かわいがられること、を視点に指導していったらと思う。

教育大・北村氏

やはり、将来の児童生徒の支援に関しては着実に取り組みを行っている。今これから何が考えられるかという、特別支援ではない子の支援が必要かな、と思う。「みんなちがってみんないい」ということを考えられることが大事。

檜山北高・石崎氏

教育相談のところで統合失調症でおさえつけなければいけない子がいた。それが悔しかった。何が良かったのか考えなければならないし、そのようなことを受け入れられるクラスづくりが大事だと思った。

第 6 章

研究の成果と課題

1 今年度の研究のまとめ

平成23年度初頭、平成23年度のプロジェクト研究では何に取り組むかという職員アンケートを実施した。その結果、「本校の教育をキャリア教育の視点に照らし合わせながら、本校の良い所、改善ポイントを探る」という内容の研究をスタートさせ、キャリア教育についての研修や、キャリアの視点を具現化かつ現実化するために、第6次研究をどのように進めていくかが話し合われた。

その結果をもとにスタートした第6次研究は、今年度で3年目、最終年度を迎えた。研究主題である『社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究 ～「今養版キャリア教育」の創造を目指して～』に沿って、1年目は学年・学科で検討を重ね、今養版キャリアプランニングマトリックス（以下マトリックスと略す）の作成に取り組んだ。2年目以降は、課題研究ではマトリックスを活用した生活単元学習と作業学習における実践的研究、プロジェクト研究では「キャリア教育の視点を通した教育課程の見直し」、寄宿舎の研究ではマトリックスを活用した「卒業後を見据えた生活の指導」と題した事例研究に取り組んだ。

また、今年度はキャリア教育の視点を通した教育課程編成に役立てるために、卒業生の実態調査を調査研究として行った。さらに、夏季休業中に行った特別支援教育研修会では、「特別支援教育における『キャリア教育』と『生徒指導』」を主題として、本校および近隣校の課題について幅広く協議し、校内研究へと反映させることもできた。

このように、今年度はこれまでの取り組みを継続しつつ、これを総括し、3年間の成果と課題をまとめる1年となった。

(1) 成果

① 「キャリア教育」の共通理解

本校の研究の進み具合を全職員で確認し合う全体研修会のほか、第6次研究開始当初から行っているキャリア教育学習会、特別支援教育研修会などを通じて、本校の教育活動の在り方について考え、議論を重ねた。特に今年度は、プロジェクト研究に関わる教育課程全体会議も行われ、授業時数や週時程、それぞれの授業の在り方といった具体的な点まで深く考える機会となった。その際、キャリア教育とは何か、マトリックスはどう活用できるのかを考えることができた。

② 教育活動の“整理整頓”

①を下地として、具体的には生活単元学習と作業学習の授業の在り方や評価の方法、教育課程全体の今後の在り方、寄宿舎における生活指導の在り方など、学舎ともに様々な教育活動について整理整頓が進んだ。さらに、調査研究における調査結果をもとに、これまで、及びこれからの教育課程について考えることができた。今後の更なる整理整頓に役立てていきたい。

③ より一層の学舎連携

研究推進委員会に寮務主任に入ってもらふことや、寄宿舎職員に学校の研修会や学習会に参加してもらふことが増え、学舎ともに“今養版キャリア教育の創造”という一つの方向で研究や教育活動を進めるという流れがより強固になった。今後も連携を続けていきたい。

④ 様々な課題に気づけたことが成果

基本的にどの研究組織でも「マトリックスに沿って」「マトリックスを生かして」という言葉をキーワードに研究を進めてきた。本校なりのキャリア教育、すなわちマトリックスの教育方針を普段の指導に浸透させていくという流れを作ろうとしたのだが、後述するような大きな課題が浮き彫りとなった。研究を進めていくなかで疑問点を見出し、課題として次に引き継げるよう残すことができたのは、皮肉ながら成果とも言えるだろう。

(2) 課題

① 「キャリア教育」「マトリックス」の理解

成果で述べたように、キャリア教育の共通理解は様々な場面を設けたり、方法を工夫したりすることで、一步一步進められてきた。しかし、昨年度からより深化する形でこれが進められてきたかどうかは疑問が残り、結局「キャリア教育とは何か」「マトリックスはどのような位置づけか」といった基本的なところが曖昧になってきてしまった。年度当初に行った研究の全体計画やキャリア教育とは何かという押さえの共通理解も、不十分であったためと思われる。そのため、研究を進めていく過程で様々な考え方が行き交い、混乱し、収集がつかなくなったと考えられる。さらに、もともとは職員の思いが積み重なって作られたマトリックスだが、それが過去のものであるという意識があったり、生徒の実態の変化があったり、これに従わなければならないという拘束感が次第に生まれたりした。

結局のところ、校内研究の進め方に問題があったという点は否めない。だからといって、学習指導要領にも明記されているキャリア教育という概念そのものを、後ろ向きに捉えるべきではない。第7次研究に向けて、キャリア教育の推進に向けた校内研究の在り方を今一度考え、立て直し、キャリア教育やマトリックスについての押さえを明確にし、共通理解を進める必要がある。

② 「マトリックス」や「指導内容表」の検証とリンク

マトリックスはあくまで“試案”である。これまでの、そしてこれからの指導・支援の実践を通して内容の見直しが必要ならば見直し、改訂していく必要がある。また、学校教育目標もここ数年来変わっていないが、時代に即したものに変わるとしたら、その達成に向けた道筋であるマトリックスがきちんとした道筋をたどる形になっているのか確認する必要もある。

マトリックスの他に「指導内容表」についても、その存在意義や活用方法について改めて確認し、中身の見直しが必要ならば見直し、改訂していく必要がある。指導内容表は、本校の各指導形態（教科指導、領域・教科を合わせた指導、総合的な学習の時間、自立活動）において具体的にどんなことを指導するのかをまとめたものである。これは、マトリックスよりも早い平成22年度に大幅な改訂を終えている。日常生活の指導の指導内容については平成25年度に見直されたが、この他については一度も見直されていない。また、マトリックスとの相関についても検証されていない。今後、新たに作られたマトリックスと以前からある指導内容表の両方をリンクさせることで、本校のキャリア教育に一貫性・系統性を持たせることができるのではないかな。すなわち、これは「教育課程」の改訂という大きな課題と言える。この改善・解決に向けて、日々の実践を見直したり、生徒の実態把握をしっかりと行ったりすることもまた課題と言える。

③ 教職員の専門性向上

「キャリア教育」も「教育課程」も、非常に大きなテーマである。これについてかみ砕いて理解するための研修の機会が十分だったかどうか、振り返る必要がある。キャリア教育学習会や教育課程全体会議という機会はあったものの、その進め方や協議の内容はそれぞれの場の目的を達成しうるものだっただろうか。また、個々人の意見に論理的な理由や根拠があり、建設的に議論が深まるものであっただろうか。さらに、昨年度に引き続き公開授業を実施したが、職員一人一人のスキルアップや、キャリア教育、あるいは特別支援教育に関する専門性の向上につながるものになっただろうか。①で述べたような雰囲気の中で、十分だったとは考え難い。職員一人一人が研究と修養を積み重ね、論理的・建設的な議論や授業づくりを進められるようになることが求められる。

④ キャリア教育と生徒指導

マトリックスに基づいた指導・支援をしたとしても、その効果を左右しかねない問題が近年顕著に見られる。それは、家庭・地域環境や本校入学以前の生育歴などから派生している生徒指導上の諸問題である。その内容は、非行・暴力から異性関係、情報リテラシーの問題と幅広い。特別指導の件数は年々増え、ケース会議ではその指導の進め方について検討が重ねられているが、同じような過ちを再発してしまう生徒もいる。こうした背景から、道徳的要素を取り入れた指導の必要性について議論されることも増えてきた。また、保護者支援の必要性についても年々話題となるケースが増えている。

そもそもキャリア教育とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程である“キャリア発達”を促す教育である。生徒指導とは、生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動である。この2つはいずれも、教育活動全体を通して行われるべきものであるという点で共通している。さらに、学校において生徒一人一人のよりよい人格形成を目指すという点でも共通しており、視点が定義上異なるだけで目指す方向性は同じと言える。従って、キャリア教育の推進と生徒指導上の諸問題解決に向けた取り組みは切っても切り離せない関係にあり、今後の研究推進においては相互の相関と相乗効果を考慮すべきものと考ええる。

⑤ キャリア教育と学校組織

キャリア教育実践のカギは、「生徒が主体となること」「教育課程の見直しと授業改善をすること」「組織の見直しをすること」の3つと言われている。「組織の見直し」については、この研究が始まった当初からにわかに指摘されてきた問題である。本校は全職員に占める期限付き教諭や新採用教諭、長期休業中の教諭の割合が多く、さらに外勤中心の4名は授業に入っていない。なおかつ担任や主任・部長の兼務もあり、実際のところは少ない職員で授業や分掌業務をこなしていることが大半である。それゆえに、授業や業務の本質を見過ごし、場当たりの事に事が進んでしまっていることも少ないとは言えない。

そのため、今年度は校務分掌検討委員会を計7回開き、キャリア教育充実のための組織・会議見直しも進めた。その結果、新しい形は見出せたものの、実現には様々な準備期間が必要ということで次年度からの適用は見送られた。今後、この結果を踏まえて学校運営の在り方を再構築することで、キャリア教育の充実を進めるということも一つの課題と言えよう。

2 次年度に向けて ～第7次研究に向けて～

本研究は、キャリア教育の概念をどのように本校の教育課程や教育活動に位置づけていくか、教職員間で共通理解していくことから始まった。第6次研究の1年目は、「キャリア教育」をどのように捉え、どのように進めていくかを全職員で考える1年であった。その結果、「キャリア教育」の理念や考え方を職員間で共通認識できてきただけでなく、「今養版キャリアプランニングマトリックス」を完成させることができた。

第6次研究の2年目である昨年度、3年目である今年度は、マトリックスの活用に試行錯誤し、マトリックスとは何なのかを改めて見つめ直した2年間であった。生徒を立派な社会人に育てたいという思いを込めて作られたマトリックスが、果たして本校生徒に適したキャリア教育を実践できるものになっているのか、考え直さねばならない。適しているものにした上で、職員一人一人が指導計画の作成、実際の指導、評価などそれぞれの場面においてマトリックスの要素を練り込んで教育活動を展開していくことが求められる。

前項②でも述べたように、このような「教育課程」と言うべき大きなテーマは、もはや研究の域を超えており、次年度以降は教務部が業務の一部として主導していく方向で話が進められている。一方、第7次研究は、教務主導の教育課程改善にもつながる取り組みとなるだろうが、「身近なテーマで」「当事者意識を持って」「小グループで」をキーワードに、研究が日々の授業実践に直結するような形で研究主題・内容・方法を立案する方向性となっている。

いずれにしても、これまでも、これから、職員一人一人が真剣に校内研究に取り組み、時代や地域、何より生徒の実態に即した本校なりのキャリア教育の形、教育課程を創り続けていくことになるだろう。本校の教育活動全てが生徒一人一人の生きる力と明るい将来につながることを信じ、全職員一丸となって「今金版キャリア教育」を創造していく。

分科会②「特別支援教育と生徒指導」 ～協議の柱：社会参加に向けた指導・支援～

前半：小泉氏、小原氏、小室氏の3者による協議

より具体的な生徒指導について、各校で最近の起きた問題は・・・

檜山北高・小泉氏

- ・男女関係のもつれがLINEで広がる。高校から携帯を持ち始める。携帯（スマホ）などに対して注意力がないままに使用し、大きな問題に広がる。
- ・気持ち（精神面）が幼い。思うがままに行動する。自己制御できない。以上2点が本校の課題
- ・9割9分携帯を持っている。親からの迎えが半分いるので、必要な物ではある。
- ・使い方が悪かったら、自分の責任で禁止になると、本人たちには伝えている。

今養・小原氏

- ・悪質な画像、不適切なやりとり（性にかかわる問題）が携帯を通じて起きている。
- ・本校でも、懲戒を取り入れている。手探りな部分もある。
- ・過去は学年主体で対応し、懲戒規定がなかった。
- ・普通高校にいるような生徒が増え出したところ、問題も増え始めた。
- ・喫煙、窃盗、対教師暴力が目立ち始めた。
- ・H24から、学校としての体制作りを行い、H25懲戒規定を稼働。内規はH26から。
- ・協力体制に基づき、関係者で会議を開き、原案を作成し指導を行っている。
- ・檜山北高校と違う所は、自宅謹慎の前に学校内での指導を行う姿勢。
- ・昨年度は問題行動件数が増加した。15件（14名）が停学処分懲戒を受けている。
- ・男女の関係に関しては、昨年度は厳しい状況（問題）が続いた。
- ・男女問題に関して歯止めが効かない。いきなり盛り上がり最後までいってしまう事例が多い。これらの理由により、男女関係に対する指導が厳しい。
- ・今年はまだ案件が少ない。
- ・生徒指導の案件が、より高校の問題と直結している。

指導上の高校と特別支援学校でのやり方の違いについて・・・

今養・小原氏

- ・指導のめどをたてる。原案は会議だが、具体的な指導支援は担任学年と相談しながら取り組んでいる。
- ・高校は1本の柱のもとに、各先生方が指導していく。
- ・障害によるつまずき、事後をしっかりと見ること。

障がい特性を意識した指導について。基本的な考えとは・・・

今金中・小室氏

- ・人間として社会に出て行くので、社会的なマナーをしっかりと早い段階から指導していく必要がある。
- ・心理的な部分での病気もあり、その子のきもちを受け取るカウンセリングマインドが重要。定期的に。根気をもって取り組む。

- ・駄目なものは駄目と教えるのと同時に、その子のメンタル障害に応じたケアも重要。
- ・実態把握。本人を知る意味でも、アセスメント、バウムテスト、エゴグラムなどの活用。しっかりと押さえを持って取り組むことが必要。
- ・感情をぶつけてくるほうがまだよい。時間はかかるが、長い目で向き合う事例は多い。

学校の職員の移動や環境上、保護者支援、地域支援が重要。そのポイントは？

今金中・小室氏

- ・今金町は関係者が集まり、会議を開くシステムやフォローができていく体制がある（ケース会議等で）。
- ・学校側からのフォローも当然重要。

保護者とののかかわりや支援、申し渡し時のポイントしていること

檜山北高・小泉氏

- ・状況説明、今後どのようにしていくかの説明。正確な状況説明。
- ・よくしていくための指導であり、協力して行っていくことを必ず伝える。
- ・保護者の変化はあまりない。「なんで？」「どのくらいで？」が多い。生徒の方が理解している。

今養・小原氏

- ・保護者から「何で？」は少ない。社会自立を意識しているので、理解を示してくれる。悪いことは悪いと伝えてくださいと言っていただける。
- ・言葉に対してはとても敏感（懲戒、停学などの言葉）。
- ・言葉を吟味して話しをしている。生徒が今後成長していくための時間、きっかけであると伝えるように心がけている。
- ・保護者によっては、どうしてよいかわからないと訴えることもある。地域相談支援の活用も促し、実際に活用されている。（外部機関との連携も）
- ・保護者が子どもと向き合える時間になったと、言っていたケースもある。

最後に・・・

特性を押さえた上で、なぜ問題行動が起きているのかという視点。善悪の区別も含め社会に大人として送り出す重要性を認識して育てる視点。これらのことがとても重要である。

後半：フローワからの意見をもとに協議 ～事前のアンケートから～

フロアより

- ・スクールバスのイスや窓ガラスが割れた。同じ失敗（問題）を繰り返さないために。懲戒に値するような事例だが、学校による対応の違いがある。各学校の取り組みとは？

今金中・小室氏

- ・今金町は、見た目は落ち着いているが、携帯トラブルは多い。陰湿になっている傾向がある。勉強会を行っているが気休めや限界がある。粘り強い指導支援。むきにならずに取り組んでいく重要性。

檜山北高・小泉氏

- ・SST。指導部通信。警察講義。即効性はないので、地道に。指導部通信とは、長期の休み時に、そのときに問題になっていることをテーマに（今回は携帯について）

今養・小原氏

- ・つぶやき WEEK という実践を通して、生徒全員が教師に「つぶやく」ことができるようにして、面談を行っている。目安箱「スケッチボックス」の活用。生徒の意見を書いて入れてもらう。生徒会からの回答あり。不安要素があるときは問題が起きる前に情報共有。子どもたちが、自分自身で学校を良くしていく心、気持ちになるような仕掛け。

フロアより

- ・保護者が知的障害。その保護者の青空学級児童は登下校の際、突然に手をつなぐ。傘で叩くなど問題を起こす。被害者の親から聞くケースが多い。その都度指導しているが、別な形で問題が起きる。保護者の問題意識が薄い。

今金中・小室氏

- ・発達支援センターとの連携。外部機関との連携。サービス利用の検討。

檜山北高・小泉氏

- ・担任以外の管理職も含め、複数での対応が必要。根気、継続。

フロアより

- ・特別支援学級。双子。教室でボール遊び、けんか。家庭での雰囲気の影響で学校でも起こる。母親も困り果てている。指導を継続しているが、なかなか振り返りができない。

今金中・小室氏

- ・スペシャルスキルカードなど、写真、イラストなど、場面に即した指導。

今養・高田氏

- ・短い言葉で。

フロアより

- ・通常学級。辞めていく生徒に対するフォロー。退学後のフォローについて。

檜山北高・小泉氏

- ・退学は多い年で、3～4名。冷却期間、地域とのつながり、フォローが大切と痛感している。担任がフォロー、アポを取る人が多い。

今養・小原氏

- ・不本意入学。関わりたくない、関わってほしくないケースもある。ケースバイケース。担任裁量で行うケースがある。

今金中・小室氏

- ・通院している病院との連携。

フロアより

- ・保護者を支える視点（周囲に支える人がいない）→保健師さんとの連携について。

今金中・小室氏

- ・5歳児検診からのかかわりがはじめにあった。
- ・こまめな連携。保護者も巻き込みながら、情報共有もしながら、保護者を安心させる（巻き込む）。
- ・母親同士と保健師との学習会開催（孤立しないような工夫、支援）。

今養・高田氏

- ・保護者の悩みを定期的に聞く。（振り返りが必要）。

今金中・小室氏

- ・今金でない場合は、受け身が多い。来れば受け入れるスタンス。立場を使って保健師から活動するように伝えている。ある地域では、保健師の移動があり、繋がりが難しい。

フロアより

- ・放課后面談（個別指導）の人数が増えつつある。人数の関係上、こちら側の手が回らなくなるのが実状。より効率のよい面談（学習）方法はあるのか。

フロアより回答

- ・面談をする期間を明確化。気持ちの準備が大切。
- ・担任、学年体制で行う。学校体制では、習熟度別で行っている。個別面談は大変だと認識している。
- ・年2回ほど面談。それ以外は、担任、学年で対応。朝学習で対応していることもあったが、個別的な対応であり、学校体制ではない。

今金中・小室氏

- ・人が少ないのが現状。永遠の課題でもある。

今養・小原氏

- ・特別支援の学校でも、時間が足りないと感じる。

フロアより

- ・生徒指導に関して、中学校ではそこまで問題行動が表面化していないと思う。本校の実態を聞いて驚いた。なぜなのか？

今養・小原氏

- ・今の高等養護学校の課題は生徒指導である。風通しが良いから見えてくるところが表面化している。こちらのスタンスとして、問題に対する指導をしっかりとしつつ、原因は何かも考えて

取り組んでいる。

最後にパネラーから

今金中・小室氏

- ・関係機関とつながることが大事。情報共有をより大切に。

檜山北高・小泉氏

- ・自分自身の実践を振り返る良い機会になりました。

今養・小原氏

- ・どの学校も課題を抱えている。お互いの協力を大切に。

3 成果と課題

平成26年度特別支援教育研修会の成果と課題には、どのようなものがあるだろうか。目的と運営について、参加者と本校職員のアンケート結果をもとに示す。

(1) 目的の成果と課題

目的は2つ。「1. 分科会や講演を通して「特別支援教育」「キャリア教育」「生徒指導」の各観点から教育実践を見つめ直す」と「2. 児童生徒が社会自立を目指す上で必要となる力について整理するとともに、参加者全員のスキルアップを図る」である。

① 目的1について

参加者は小中学校、高等学校、特別支援学校と多岐にわたる場所で日々指導に当たられている方々であった。講演と分科会では、それぞれの校種の実践や悩み、情報を聞いたり話したりする機会となっていた。校種ごとに異なった取り組みや悩み、意見の違いが出てくる。また似たような内容も出てくるだろう。例えば、中学校の方が高等学校の実践を聞く。小学校の方が中学校の実践を聞く。このことにより、参加者が共感し、知識が増え、視野が広がり、課題を解決し、参加者各自の学びにつながったことが成果であった。

逆に、分科会で多様な意見を聞くことができて、バラバラで系統的ではなかったなどの意見があり、分科会の運営の難しさが課題となった。

② 目的2について

参加者がどのように力を整理し、スキルアップを図ることができたかをはっきりと具体的に述べることは難しい。ただ、講演や分科会で、実践を聞き、話をすることで、参加者自身が参考になったり、勉強になったことはアンケート結果からも把握できる。また、学んだことをもとに、積極的に指導に当たるといった意見も見られている。それぞれが学びになった物を持ち帰り、自己の実践に当たられることが期待される。

(2) 運営の成果と課題

檜山管内における唯一の特別支援学校であり、地域の特別支援教育を推進するセンター校としての役割のひとつとして、このような研修会の実施は欠かすことができない。重要な業務である。実施し、参加者が学びを共有することで、一定の成果はあったと考える。ただし、運営としての課題は2つあげられる。

1つめは、主題設定である。ここ3年ほどは、キャリア教育をテーマにして研修を行ってきた。しかし、実際には、キャリア教育というマクロな部分だけではなく、この檜山管内地域のニーズを生かしたミクロな視点での主題設定も必要となってくる。本校の校内研究のテーマとの関連も含めながら検討していく。

2つめは、研修会の進め方である。

地域のニーズに即した内容を視野に入れて研修会の内容を考えるに当たり、講演と分科会形式という流れだけではなく、講師と多く話す時間を設けることや、ワークショップ形式なども考え

られる。参加者に「学びとなった」「来てよかった」とさらに思ってもらえるような、研修会を考えていきたい。

(3) 参加者の概要

参加者数は、外部から 32 名、本校職員が 36 名、講師 4 名の合計 72 名であった。

資料 2

今養版キャリアプランニング マトリックス

今養版キャリアプランニングマトリックス（試案・平成25年3月現在）

指導観点	観点の中身(解説)	指導の柱	1 学 年 段 階 (学びを通して気づく・知る)	2 学 年 段 階 (将来を意識し、自ら学ぶ・行動する)	3 学 年 段 階 (将来を見据え、自ら学ぶ・行動する)
心と体	・元氣 ・体力 ・健康 ・食生活 ・睡眠・休養 ・規則正しい生活 ・ストレスコントロール	心身の健康 基本的生活習慣の確立	●健康でたくましい心と体の必要性に気づかせ、身につけることができるよう指導する。	●自らの心と体の変化をとらえ、心身の健康を維持できるよう指導する。	●卒業後の生活を見据え、自ら心と身体の健康が保てるよう、望ましい生活を組み立てる力を育てる。
			●生活リズムを整え、望ましい食生活や規則正しい生活ができるよう指導する。	●自立した生活を意識し、望ましい生活習慣を身につけることができるよう指導する。	
自己理解	自分の長所や課題を見つめる力 ・他者からの評価を受け入れる力	長所・課題の理解 他者からの評価の受容	○自分の長所や課題に気づくことができるよう指導する。	○自分の長所や課題を受け入れるとともに、自己肯定感を持つことができるよう指導する。	○自分の長所や課題を踏まえて、自分の気持ちや考えをしっかりと持ち、自分らしさを持てるよう指導する。
			○他者から受けた評価に、耳を傾ける気持ちを育む。	○他者から受けた評価を受け入れる気持ちを育む。	○他者の気持ちや考えを理解・尊重し、自分のあり方・生き方にいかすことができる力を育てる。
職業	・責任感 ・向上心 ・自立心 ・実行力 ・職業理解・分析能力 ・働く意識 ・働く喜びを知る ・将来の目標を立てる力 ・将来の目標に向けて課題を解決する力	働く態度・能力 職業理解	●与えられた仕事の意味を理解して時間いっぱい集中し取り組めるよう指導する。	●手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら、与えられた仕事に取り組む事ができる力を育てる。	●自ら仕事の工程や課題を理解し、効率よくやりとげる力を育てる。
			●身の回りのいろいろな仕事について、社会との関わりやその仕事に求められる能力などを考える力を育てる。	●自分の適性がわかり、将来の職業について具体的に考えることができる力を育てる。	●職業生活の中にやりがいや生きがいを見いだし、前向きに自己の未来を設計する意識や社会の一員である自覚を育てる。
自己内省	・集中力・持久力 ・持続力・忍耐力 ・積極性・自主性 ・真直さ・忠実さ ・負けず嫌い ・前向きである ・様々な物に興味を持つ ・謙虚な心 ・反省の心 ・感謝の心	物事に対する意欲 課題を解決しようとする心	○時間いっぱい集中して学習する意識を持ち、目標を達成しようとする気持ちを育む。 ○自主的・積極的に活動に取り組む大切さを知り、自ら努力を続けようとする気持ちを育む。 ○成功や失敗を繰り返しながら反省を積み重ね、他者の意見も受け入れながら、自分の気持ちや考えを整理する力を育てる。 ○自己決定・自己反省の過程を繰り返し、課題を解決する姿勢を育てる。	継続	○自らの課題解決に向け、素直な気持ちで物事に取り組む姿勢を育てる。 ○他者への感謝の心を持ち、それを表現する姿勢を育てる。
				継続	
知識・技術	・公共交通機関の利用 ・金銭管理 ・職業に応じた知識・技能 ・読み書き計算 ・常識 ・マナー ・身だしなみ ・礼儀 ・ルール ・整理整頓	社会の仕組みなどの知識・技術 読み書き計算などの知識・技術	●集団生活を通して、社会のルール、マナー、礼儀などを意識して生活し、行動できる生徒を育てる。	●社会のルール、マナー、礼儀などを、状況に応じて使うことができる生徒を育てる。	●社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身につけ、社会の一員として生活できる力を育てる。
			●金銭管理や読み書き、計算などの生活に必要な基礎的知識が身につくよう指導する。	●身につけた知識を、日常生活で生かすことができる生徒を育てる。	●身につけた知識を応用し、社会の中で生きていく力を育てる。
コミュニケーション	・声の大きさ ・あいさつ・返事 ・報告・連絡・相談 ・言葉遣い ・話す・聞く ・協調性 ・人づきあい ・他者理解	自分から相手に発信 相手の話を聞いて判断 相手の考えを受け入れ、自らそこに参加する	○場や状況に合わせた声の大きさを、あいさつ、返事・報告ができる力を育む。	○あいさつや返事、簡単な敬語を使うなど、社会生活に必要な意思表現能力が高まるよう、日常的に指導する。	○その場に応じたあいさつ、返事・報告をする力と、相手の人権を尊重するよう適切な言語能力を育てる。
			○相手の話を最後まで落ち着いて聞くことができる力を育む。	○必要な支援を他者に求めることができる力を育む。	○解決出来ない問題に対して、地域の中で適切な相談相手を選んで支援を求める力を育てる。
応用力	・判断力 ・判断力 ・理解力 ・計画性 ・意思決定 ・柔軟性 ・効率的 ・情報収集 ・情報活用 ・取捨選択能力 ・自己統制力 ・危険回避 ・協力 ・余暇の充実	意思決定 将来設計 情報活用 人間関係	●TPOに応じて何ができるか、何をすべきかの選択肢を与え、その意味を理解させ、選択していける(判断する)力を育てる。	●TPO、自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をできる力を育む。	●卒業後の家庭生活・社会生活・職業生活において、自らの意思と責任によりよい選択・決定を行うことができる力を育む。
			●目標を達成するためには工程があることを理解させ、与えられた計画や工程に取り組ませ、習慣化できるよう指導する。	●家庭生活・学校生活に必要な習慣の確立を目指し、職業生活に活かす力を育む。	●社会生活・職業生活等に必要な習慣の形成に向けた指導をするとともに、余暇の活用等を図り、前向きに自己の将来を設計する力を育む。
感性	・想像力 ・表現力 ・感受性	感受性 表現力	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを知り、経験や疑似体験を通じてその価値に気づいたり認めたりできる心を育む。	継続	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを理解した上で、柔軟に物事を受け入れる心を育む。
			○真・善・美として感じたことを言葉・造形・音楽・行動などで表現できる力を育む。	○真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて言葉・造形・音楽・行動などで適切に表現できる力を育む。	○卒業後の豊かな生活を目指し、真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて適切に表現できる力を育む。

学校教育目標の達成

希望豊かな判断力と行動力を持つ生徒を育てる

このマトリックスは、平成24年度の校内研究において、研究推進委員会、学年部会、学科部会が検討を重ねて、最終的に結果まとまった完成版です。
 これは各学年段階の指導方針として捉えていただき、これをもとに授業・指導・支援していくよう、また必要に応じて保護者等に説明していただくようお願いします。
 しかし、日頃の教育実践等により、再度検討が必要になることも考えられます。そのため「試案」としています。検討の必要性を感じたら、研究推進委員会に連絡をお願いします。

あ と が き

特別支援教育において、生徒一人一人の将来的な社会参加・自立を目指した「生きる力」の育成（キャリア教育の充実）は教育活動における最大の目標の一つであることは言うまでもありません。また、これからの時代、特別支援を必要とする児童・生徒の増加が予想されており、教育現場に求められる要望や要求も多岐にわたってくると考えられます。

今後の特別支援・高等部教育の在り方を考察しながら、本校においても、今年度も引き続きキャリア教育を中心としたさまざまな取り組みを行ってきましたが、本号には、その研究・研修、実践、報告等が収録されています。

このような本校の取組を校内的なものとして共有するだけではなく、校外的にも積極的に情報発信しながら、保護者や関係機関の皆様との連携・協力のもと、学校の様子や取組、実態等を共有しながら本校教育活動を推進していくことの必要性を強く感じています。また、これからの厳しい時代を生徒一人一人がたくましく生き抜けるよう、夢や希望を持ちながら充実した社会生活が送れるよう、我々は日々の教育活動において強い使命感と責任感を持って臨まなければなりません。そのためには、我々一人一人の、知識、支援・指導力、人間性等、資質・能力の向上が必要不可欠となります。今後も、校内外を含めた、教職員一人一人の研究・研修活動の充実を図っていきたいと思います。

特別支援教育の一端を担う学校として期待され、信頼される今金高等養護学校であるために、この研究紀要を皆様に御一読いただき、御意見・御指導等いただければ幸いです。

平成27年3月

北海道今金高等養護学校教頭

佐 藤 公 人

共 同 研 究 者

学校長 高嶋利次郎
教 頭 佐藤 公人
事務長 五十嵐裕昭

<教務部>

1 学年 泉谷 好子 、 橘 晴美 、 上村 幸教 、 小林 和幸 、 佐々木真由美
金子 亘喜 、 山田みゆき 、 初山小枝子 、 矢倉 一 、 太田 雄大
石黒 駿太 、 山口 晋 、 加藤 大輔 、 小林 睦美 、 出村 朱美

2 学年 田中龍右ヱ門 、 中島 朋之 、 阿部 昌弘 、 小原 雄一 、 渡邊 雅都
鈴木 貴史 、 鈴木 絢子 、 村瀬はるな 、 工藤 大地 、 後藤 倫弘
高橋 詩織 、 吉本 香奈 、 近藤 千晶 青山 未帆

3 学年 国府由香利 、 祐川建一郎 、 高田のぞみ 、 近藤 和也 、 野呂 篤志
岩城 研太 、 鐘ヶ江真知 、 高山 愛望 、 中川 優子 、 松本 紀子
林谷 和織 、 小松 裕樹 、 藤倉 雄一

<舎務部>

生内 希 、 上山 真人 、 竹端 賢一 、 川村 洋二 、 伊藤 亮
和田 雅史 、 清野 恵美 、 泉波 卓也 、 猪瀬 雅法 、 藤田 美華
島野 五樹 、 松尾 晴奈 、 齊藤 直美 、 佐藤 友梨 、 川崎 真知

<行政>

雨谷 敬子 、 山崎 直樹 、 森屋 香 、 川崎 澄子 、 高野美智代
中村 和子

平成 2 6 年度 研究紀要 **創** TSUKURU 第 1 7 号

発行者 北海道今金高等養護学校長 高嶋 利次郎

発行日 平成 2 7 年 3 月 3 1 日

〒 0 4 9 - 4 3 0 4 北海道瀬棚郡今金町字今金 4 5 4 番地 1

TEL (0 1 3 7) 8 2 - 3 1 2 1

FAX (0 1 3 7) 8 2 - 3 0 9 2